



見八犬傳 第八卷
卷一

特別
A13
4304



曲亭主人著編

八犬傳 第八輯

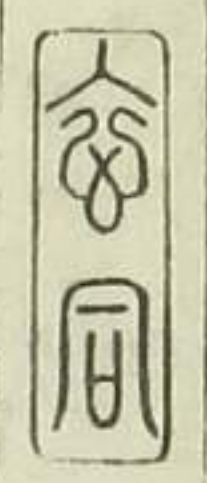
柳川重信畫

上帙

江戸書林文漢堂精刊



八犬傳第八輯自序



饗庭文庫

曲亭主人江戶浪士也。別號多。有名平居綴。文章為著作。其次名小書高。為賴齋。傷國文。推其文諸雜。之時。歸。取。野。相。公。素。婦。詞。句。以。命。之。相。公。詞。曰。才。同。自。序。於。撰。史。小。說。時。号。蓑。笠。就。雲。墨。時。辨。曲。亭。編。兒。戲。小。策。子。時。稱。馬。冬。下。俚。巴。人。其。曲。不。高。和。者。彌。無。是。以。馬。琴。曲。言。二。號。著。于。世。云。

曲亭山名。見漢書。陳湯傳及大明一

統志。馬琴。取野相公。素婦。詞句。以命之。相公。詞曰。才。非馬。卿彈琴。未能。身異。鳳。史吹簫。猶拙。見管。原為長。抄。十一訓。

是它了雷水狂商半閒任天翁愚山人數馬約

于訓抄
作者名
見徹書
記物語

八犬傳八輯卷一

文漢堂

一十二號皆臨時隨筆其號或笑其別字之多
主人乃辨之曰古人有表字亦無別字或稱本貫或
以所居地名相呼耳近世別號始自偽流間亦有出
海樓臺主人名某菴則名以而為某堂某樓主人此以
世別號所以至之不足怪矣時好名者亦往往以
為雅事因無其堂其樓臺亦自號某堂某樓主人夫
有名而世實為虛名虛名與身俱生不傳於後世
雖引十數號與坊間實記本姓字號一非但文人墨
客有不歸其號其號又與傳名萬物亦有之矣異

名至諸家本草乃藥物異名最煩多非字而得焉識
別強不輒故老氏曰名可名非名法固亦曰名實
之實名實而忘如不知此常之名也由此觀之余之
有十數號猶無也古之為人許人仲名不許人見面
余胡為空名而人於信身而不思名此肩於裨官者流
而之儻筆耕不斲造化小兒與之為校槍也豈思名
者所庶幾於名者是矣者可俱評稗史焉未得是名
河漢也作者親其情至寓之以獎忠孝戲淫中
辨貞淫猶且正是非昭法戒又善懲隱隱禁竊盜之

有難雜成集虛假之詞而綴之文奉之與文盡
所無之徵諸集晉抑於南極守胃亦有物則求
之于內胸中無物則求之于外內外攝合然後許多
脚生焉於戲嘻唯徐悟立談之旨於言外世人
多不思之好閱得史者庸庸者假之詞之奇中出矣
且其千情萬形可笑可悲可笑之罵之嘲合已余不
閱者不擇乃杜又唯謂虛假之詞之証世惑供一毫
無益於名教而擅斥之至甚焉者燒更皇鶴在故何
也為膠柱不能不悟幻境為仙家除此之外厭常喜

怪是效徒好猿鬼而不樂觀鬼者若茶以好者龍而
懼真龍當時呈有就者賞笑教其龍走點去余亦為
得幻呈面就也久矣尚幸不能致去就為此杜編所
以行予今僅者與余同愚者之思及于此乃觀重龍
如親真龍于油然足以感而肅然知所懼一可者矣
余對空高談如前條時八傳第八輯全稿方成歎
序未果即次是言代序以頽于簡端

天保三年九月廿



袁望漁隱撰
盛義書
之印
猿江

南總里見八犬傳第八輯上帙五冊總目錄

卷

第七十四回

牝牛悖順 辨答恩錢
卸枋磯九 墜殘雪窖

壹

第七十五回

趕醉客小文 吾遇次團太
懷短刀假替女 按摩犬田

卷

第七十六回

庚申堂俠者囚 賊婦
廢毀院義任送 船蟲

式

第七十七回

盡眾賊酒顛 脅旅舍
傳內命由充招 二客

卷

第七十八回

北母自恣賞罰
東使雙賜首級

三

第七十九回

齋家廟良臣贈 異刀
憩茶肆奸佞試 落葉

上四卷

第八十回

斬殘仇毛野 與莊介戰
舒傳來小文 吾和兩雄

下四卷

第八十一回

荻野井返命 偽刀還舊注
三犬士再會宿 因重話表

第八十二回

青柳歌店亂 智題詩歌
穗北驟雨禮 儀喪行裏

上帙五冊目錄終下帙五冊續刻共發行



南總里見八代傳第八輯下帙五冊總目錄

卷

第八十二回

得失易地勇士遇厄
片袖稷禍賢女獨知

卷

第八十四回

夜泊孤舟暗資窮士
逆旅小集妙懲御豪

卷

第八十五回

傾志夏行留四賢
占夢重戶說識辨

卷

第八十六回

道節再謀復雙
大巧滅妖賊

卷

第八十七回

談天機老獸惜舊洞
照蕉火勇僧入猫穴

七

第八十八回

湯嶋社頭才子賣藥
聖廟老樹從者走猴

上八卷

第八十九回

呈奇功義俠寧冤囚

下八卷

第九十回

詳秘策忠款鋤奸佞

第九十一回

司馬濱船蟲驚淫

閻羅殿牛鬼劈賊

第九十二回

鈴森毛野擊綠連

谷山道節射定正

下帙總目錄終本輯上下二帙分卷共十冊刊布



八代傳八輯卷一



籠大刀自



京北割居長氏
之母無簾聽訟
賞罰赴赴良佐竊憂
魚龍出雷雖權似欺
君焉有咎

船戶津衛
由元

童子篠子酒
顛二

あはさきの
もは夜
こひもろ
そそ乃
らあち
袖をぬき
りのこ



鮫守磯九郎

丁田畔五郎
豊實よとみ



覆車横路
燕雀得時
不知鶻鷲
搏且充飢

善鴉堂

馬加蠅六郎徳武まかむしむろとくぶ

西ひかへ入る日と月と
引とけくまきいふれ
まきえいり時

石亀屋次因大



百堀卿三

泥海土夫二どろうみづと



杖を

中手あられ多

とてはる

たみ之致さる

ぬし袖垣

東

米

落鮎餘之七
有種

七下



人而獸性
牝牡相憐
野狐鼠怪
屠戮可駢

東

米

萩野井三郎

水垣殘三
夏行

標野重吉

悪僕媪内

八代目

三洲堂

以乃後のかふまろあぢが八犬傳をめぐらさるるびとよきたる八

多とやえの花のたのこよあひうてとあろを雲を志乃、をまて茂
阿たうちうたのそとを川とてう乃ゆくみもかへ毛犬川乃波
あまやこれな一なりひりりいぬかひのあをえあやのせをけむ蜂
り申る火の中よのかまをり犬山乃、こさけくはるも心たう一や
まへぬへ茂茂のまへ玉神もよふとりりていぬえあをぬり一や
おふけけかやの色をまみりぬるあこもほくも星のひとまき
いぬむのかぬ糸のくもまふらうみもかへせるあ乃玉やれぬ
蟹麻呂者伊勢余阪人殿村常久一稱也別號巖軒善研究
國學而所發明不尠矣是以其著宇通保物語年立千種根
左志各一卷有之皆刻于家然性謙讓而不遊於名利間是
故其書雖刻成而自非知音之友未嘗與諸人嗚呼可惜焉
文政十三年庚寅秋七月十六日病没享歲五十二是歌易
簞之前月所咏云因附録簡端楮餘一蓑笠漁隱再識

南總里見八犬傳第八輯卷之一

東都 曲亭主人編次



第七十四回 牛と犴々悌順答恩錢と辞ふ

再説大田小文吾悌順ハ那龍種ある暴牛の突りて來身勢ハ猛ク當るるもあ
りし此も騷々氣色を閃りと反て左右の角と林と捕駐り然も怯怒
牛の奮激四蹄と壞み踏入まを推倒させ角へも小文吾も亦一身の力を極え挑
あて一歩たふも退るる千曳の石の地中より見れ出て立る如く又鳥獲が奔牛の尾城
援留も憊々と覺え和漢は儔ヨリぬ稀有の壯觀でありけ初に酷く蒐散
とて辟易する牛力士ハ亦這緯の爲体を看み再胆を度と彼よとをりまを抗
足と空ふ人衆皆四下を聚るものぞ怕れ近く杖を必ぞ呆れ齊一目成とぞ然程ト

小文五の權且牛と疲しく曳と被るる声と共不烈に修煉の剽姚左へ推さ
 せ耶と右へ操甲たる打播の本支然しも悍る須本太牛の鈍や頑童放下さ
 棋兒の似く地响拍と挫と仰反倒れなり。これを規るもの思むも感と喝と采係声
 欲小答て夥く霎時の鳴も己さるる登時力士幾名も走り鬼ら力を勤して牛の四
 足を捉るもの又畢九と掴むもあつて毛どと糾る牛麻糸の雞の羽もくめせと罵の
 辛くして鼻融し太牛の絆索と林と敷索着て哨子鳴らして牽起せ牛を俵
 鎮り身振ひ々立時小文五とて怖れし西之歩返巡して牽る隨向容々
 と其番の之不退はけり有徳一程小文五の案内小立る磯九郎の逃も果さで又立
 聚る衆人と共侶の間遙小文五の勇敢旅力を目撃するあり宛酔る如く初八階
 と後の又噴き面を起せとて其支鎮ると慌しく之を稠人を撥分てま近し文五
 声とけ腰と折れとあ飲びと演る者那太力士牛裁判の二頭の牛の主とせし須

本太角連二と先小立と合はるる声とてあつて皆小文五の対ひ跪坐て一頭
 ついて俺們のけの結番の此彼三頭の牛の主虫電村を須本太郎進入村角連
 二並に大力士某甲某乙牛裁判の牛の角突の年毎に回影る牛の
 放るるもの又見茶牛の形はあつて牛力士の修煉と腕と捕牲ひし須本太
 牛の龍種るれや。暴出せよるも不慮の息劇は及び鬼神を欺くかん
 牙の勇力輒く牛と推滾しく那厄難と鎮めあひ却恩の三国山より高く又衆人の
 飲ひ千隈川より深き谷へ小坪で鰐と捕り朝美三郎義秀も牡鹿の角と
 列衣はたふ泉小二郎親衛も皆是る世の人のれは虚実のあつて人駭憶ふ
 か身の方量眼前を視て初て知ぬ今も亦信る勇士の在るを不思議る願ふ
 本費尊號旅館の巨細は名生させあか。記録の留め後々まの話柄も做まく
 欲まのてくと殷勤る言語并一七問れる大田が答を俟ましく找し出さ磯九郎ハ

小千谷を
前田利邦
郡
磯城
非多小千
谷の魚沼
郡
よ小栗村
も主呼て
りむる
と越後
塩沢の
牧をい
看官耳
訂ま

ゆもてあつた。と誇り。自らも須本太。ち對ひて。噫。大爺。連。識。ら。ま。這。個。刀。
祢。東。國。の。武。者。修。行。の。為。來。り。た。姓。大。田。世。村。と。小。文。吾。と。え。喚。れ。あ。海。内。を。
及。の。猛。者。の。旅。亭。も。一。倍。擇。れ。け。小。千。谷。の。御。子。名。も。あ。石。電。屋。次。團。太。が。一。大。
得。意。の。客。人。な。れ。も。あ。せ。り。致。待。り。け。今。之。這。里。の。閨。牛。と。現。せ。ま。お。れ。を。豫。り。約。
束。せ。れ。哥。々。の。名。代。死。御。導。す。れ。も。思。劇。で。良。も。忽。地。は。敵。守。の。磯。九。郎。と。認。り。
ぬ。い。ろ。く。し。と。咱。們。を。圖。て。當。面。小。支。回。稟。を。礼。さ。し。と。訛。音。高。く。穿。れ。牛。裁。判。と。
力。士。と。俱。に。敵。軍。を。く。仰。見。て。現。り。れ。磯。九。王。高。名。耳。小。東。の。め。く。の。ま。面。と。識。ら。
さ。り。け。れ。敬。る。を。吉。又。と。致。し。た。り。允。の。と。ち。陪。話。と。小。文。吾。の。傍。痛。と。以。て。六。れ。を。慰。め。て。
各。々。介。意。ま。あ。武。士。する。の。の。戰。場。を。名。の。勇。士。と。較。て。て。聊。功。の。誇。り。も。せ。あ。累。
たる。牛。と。制。り。と。何。ぶ。み。つ。る。負。む。足。ん。と。辱。め。ち。措。ぬ。ひ。と。技。を。誇。ら。ぬ。言。の。無。味。の。
花。と。り。を。美。し。に。答。小。大。家。感。た。る。中。小。須。本。太。郎。年。裁。判。們。ち。對。ひ。て。能。わ。

鷹。鳥。の。爪。を。隠。ま。し。の。鄙。語。も。以。あ。る。最。大。人。の。目。今。の。死。辭。を。儘。し。て。御。座。立。甲。
斐。も。る。幾。千。人。の。老。弱。男。女。を。幸。ひ。し。て。怪。我。も。せ。を。縛。と。を。異。治。り。と。欲。ひ。ま。う。
ま。ぐ。ん。報。ひ。も。せ。ま。く。ほ。き。ま。今。宵。の。お。宿。と。仕。の。支。と。取。持。め。い。と。ら。領。く。牛。裁。
判。們。又。磯。九。郎。ち。對。ひ。て。哥。々。目。今。夕。れ。如。し。誘。虫。魚。あ。伴。せ。宜。く。稟。め。い。
ね。と。憑。め。有。理。と。磯。九。郎。の。小。文。吾。と。さ。と。何。方。今。宵。小。千。谷。を。還。せ。め。め。く。も。あ。ね。
牛。主。健。の。所。由。素。任。し。て。那。里。の。泊。り。の。へ。の。又。自。然。の。道。理。を。誘。快。と。勸。を。推。辞。難。
たる。小。文。吾。の。才。の。意。の。隨。ひ。て。左。も。右。も。の。る。報。ひ。と。受。へ。は。俺。の。わ。の。聊。さ。も。
用。意。せ。る。管。待。の。初。よ。の。固。ゆ。ま。ま。這。義。と。違。ぬ。と。の。須。本。太。郎。角。連。二。
ま。真。實。と。し。て。け。御。助。力。の。遇。せ。り。怪。我。の。の。も。ま。あ。且。小。可。が。真。黒。牛。の。突。殺。す。
と。も。あ。ん。と。人。を。畜。共。ま。惹。る。任。ま。愛。く。皇。廟。の。祭。祀。と。果。せ。終。び。の。只。是。大。人。の。賜。り。
翌。も。返。苗。あ。め。小。可。も。亦。お。宿。と。せ。喃。虫。魚。の。翁。素。よ。り。田。全。の。の。れ。あ。ん。致。待。の。何。あ。ん。

然も他郷は異なり糧食のあつた米の飯秋冬も姓あり小鱈もあれ今頃稍
 雪圍の新世界野蔬も尚稀されど相槌打る須本太郎の合笑も領て現錯
 語をうひひる。只製の御酒を御意に入ると言ふ。日傾は訪ぬとぞ小文吾
 が後ま従ひ先も立夜鳴。虫電村へ借導せ磯丸郎さ又更も最の奥の心地
 巨摩を導りて意氣揚々と大田側へ隸後で俱み引れ七程。須本太生を操倒る
 大力殿より親んとて今まで残留する。老幼男女幾隊の樹下結縷草種を取取て拭
 醫袖掖は低語。ぞえさるるまで目送る。却角連二中途也。今宵の所要ありと信
 へて辭と家路を還り。大カ主門も便路を儘と別と生るも言り。半裁判の信
 る時の所役をれ。馮れてる小文吾を送るゆゆ。介程は小文吾の。須本太宿所
 到。よ目の最長死比れ。向暮と暮もせ下晡の宿。田舎の殊は長閑。その一
 布地と看回りと。衡門も杖入る。主人も素の富裕也。本邸第二の長身は。其子也。

奴婢もまろの御向の小所を走り。けの始末を信々と。宿所へ報られ。妻も見子も
 小文吾の名を知ら。あつたて。大家存一出迎へ。款待態大。客房を案内を
 上座を推升と。茶と肴の菓子。薦め。妻も見子も。泉生と捕鎮。わね。終て云と演る
 ど。登時主人須本太郎の婢妾輩が。と束。酒杯を受と。み。小文吾も薦め。け
 けの祭祀の恒例也。家毎は酒肉の儲。の況牛と出せ。め。各々を。捷と祈。と准備。の
 医。か。され。有。限。の。酒。菜。と。取。出。せ。外。隙。を。安。排。せ。る。主。客。の。辞。讓。熱。闘。牛。裁
 判。も。立。替。の。入。代。り。搜。擿。て。百。管。大。田。と。稱。賛。ま。れ。よ。磯。丸。郎。も。席。末。を。列。せ。と。以。の
 隨。飲。も。一。味。ひ。も。あ。つ。笑。ひ。自。と。人。より。先。に。醉。り。け。れ。俯。痛。れ。と。言。る。既。あ。く。不。意
 數。番。巡。り。時。須。本。太。郎。の。又。更。也。小。文。吾。の。羞。め。の。奇。偶。お。宿。の。仕。れ。も。猛。の。ひ。ひ
 意。も。儘。也。田。全。料。理。の。似。而。非。饗。饌。最。恥。か。く。以。就。て。二。種。の。餚。も。あ。る。泉。生。を
 鎮。め。ぬ。死。報。ひ。と。ま。さ。ん。い。鳥。許。が。ま。く。も。思。召。す。只。献。不。樂。の。餚。も。と。商。め。ひ。と。演。て

後方をなれ牛裁判のさるる。次房は準備する。縮麻織五反と永樂銭十貫文をよめ取てとある。小文吾が目前恭しく安排で共侶の薦むる。只今主人の稟せし如く相応に東西南北を暑く折られ縮麻七御旅中の汗衫も做さる。鏡の當所の恒例を暴る牛を辛く捕鎮むの時の牛の主より出まこと三貫文と定めて。遮莫けの暴る牛の大力士も蒐散されて殆難ま及びを料らば大人の御助力を立地の鎮むる。その勢は稟さんて聊主人の心を用ひ折乾を敵を東西と叱らるる。受収めい。主人のい。俺もは。辱く思ひま。ん。あの。美引。おの。口説く。小文吾の。あ。又。要る。人情。御向。既。い。け。武。ま。の。牛。捕鎮め。う。と。然。ま。功。と。ま。あ。折。牛。と。料。俺。身。も。矢。庭。の。突。倒。され。傷。つ。ま。の。ぬ。一。今。ま。の。與。の。ま。這。身。と。ひ。故。ま。約。束。違。ひ。甚。麻。を。力。ま。の。ま。う。は。只。是。意。外。の。恨。ま。の。ま。決。と。受。回。と。推。辞。ま。う。う。磯。九。郎。の。

折敷極遣の杖と出。袖巻掲して小文吾と信と睨て。先尔とち。笑。小可酔て。あ。あ。ね。ど。大。人。の。了。簡。甚。ま。る。の。寡。慾。も。事。ま。よ。る。夜。更。の。資。助。ま。る。が。報。い。と。固。辞。ま。あ。あ。あ。小。可。は。任。ま。る。今。ま。小。千。谷。と。深。り。と。哥。々。ま。ん。せ。美。法。は。ん。の。小。文。五。口。冷。笑。ひ。何。を。和。主。が。知。り。あ。う。角。力。の。折。箱。と。い。う。號。鳴。呼。る。と。と。林。下。も。磯。九。郎。の。耳。も。推。醉。たる。の。癖。ま。理。る。と。言。ま。と。縁。返。し。高。聲。ま。小。文。五。口。呆。れ。果。て。取。る。あ。も。足。ら。ぬ。醉。狂。人。と。口。角。い。益。ま。と。い。い。へ。と。再。り。牛。裁。判。の。ま。酔。ぬ。酒。より。ち。と。醒。す。此。彼。ひ。と。磯。九。郎。を。推。鎮。ん。と。拍。擇。ま。る。送。代。り。の。辭。の。か。き。果。も。あ。る。殺。風。景。の。主。人。い。と。月。苦。く。い。と。小。文。五。口。慰。め。て。人。も。我。も。酒。を。る。怪。死。の。ひ。の。を。寡。言。ま。り。が。三。辯。ま。る。は。も。柔。和。ま。り。も。諍。ひ。怒。る。の。感。在。水。の。所。為。ま。る。あ。る。ま。掛。け。の。且。く。緯。の。鎮。ま。る。を。徒。然。と。足。え。あ。い。別。席。を。ぬ。湯。漬。の。夕。飯。ま。あ。る。下。背。門。の。ま。の。編。小。の。乾。淨。舎。の。庭。も。あ。り。北。園。の。風。土。を。枕。も。樓。も。千。葉。紅。梅。も。昨。今。一。度。ま。皆。用。て。茅。の。軒。端。を。爛。漫。ま。

名黄氏こぞれ自お及あびおかも折おくる乘ありる夕あ月あ夜あのあ聊あ眺あめるたまあらたた誘あん案内あと付ら金
 せめと正首ある心つひと小文あ吾あのも猜あしてこれのと辞を且く這里と外とあら好あ潮あ間と
 とあひと心あを遠くカ引あ投あて立けり不あ程と碓あ九あ郎の小あ文あ吾と這あ席あ在あらる
 誰あの誰も憚るもあらぬれいままと罵あり狂ひて牛あ裁あ判あの意見と用あひを舌あをまくら
 収あ声あ立て各あのいらくとあれも咱あ們が哥あ々の年あをとれ地方で一と指あれる角あ力の扱あ
 ちりけれは果茶あう牛の二箇あと二箇あ組あ止ると易からんどけの火あ家の回あ背あを其自あ公あの心
 濟あぬと個あ碓あ九あ郎と客あ人の御あ導あを立れ小這あ首の主あ人が因あ茶あの酬ひを牽あらる縮あ
 樂あ錢あ受あればを損きて還あると哥あ々の以あり手初あ一あ本あ債あの今も肩をちら乘
 去あてを寄あ宿あ所へともまの又あ客あ人が入あ柄あ為りて空辞あ退と果あ亦あ咱あ們と哥あ々と比あらる
 日あの暮春あ後あ間は快あ快あべと錢あも縮も兩個あ分て祇あ借あと東衣あと席薦あ敲あて急せと
 牛あ裁あ判あの旨和あ論あと和王あの旨と理るなばを用あひぬまわねもとよ果あてもえぬ

か。這こ里こよりと小と千と谷とまで一里と二と里との路のあらる日あの暮春あう小重あ荷と擔あかる通あ宵あ
 ままの益を所の然とも望あまを俟あれば馬あを央かて馳あして遣ありね真あ夜あ中は必あ届あん
 の多の都て俺們の任あん和主の快あ就あ枕ありねと喃々と左あ右あの只管あ賺あまを碓あ九あ
 郎の半あ分あを疾視あ視あの牛より起りて馬あを央かて何あかせん官あ券あの知をてる
 連あ絡あ錢あ小あ角あ力も取ある俺も小重あ荷とせらるとあらぬは初あの九日あ也真夜あ中まで六
 月あのあの足の及まあらぬと五里あと二里あとまればと甚だのの工のあらる快あ擔あ為りて遞
 とさままと頻に狂生あ醉あも然る錯の取卑あ劣の本あ性留めもあらぬは牛あ裁あ判あ
 們の賺あ難あてかまのいは是あ非あもも救あはれ自あ茶あ立てる何の人の息劇あま及び裁判あの
 甲あ斐ありと主あ人の心あを放て遣すと承あべと其あらる商あ單あらる中は一あ兩あ名あ
 庵あ溜あの小不あ卦あ袴あ草あ鞋あまま々のと束を擔為り程は自あ餘あのの碓あ九あ郎と
 寄あらる推あ鎮あ也や碓あ九あ主あの使信あ和あ主の望あ不あ儘あと錢も縮も擔為りて草

ト鞋もつ小あり。身装と出だ。のれて然、磯九郎の二裏の擔荷をええ。是で好これ。然るが罷らん客人の中主人の中よりある。庭門よりと解をかつ。一人の先走り推用く胡枝の折戸の巻石近縁類。出で磯九郎が裳端折草鞋を穿き、瑞支て邪魔。まほ中力取ら。は偽りて裏の上は挿む裡面。二人の初の内端耶と吊揚て兼せ遣る。重擔を肩を受とて物ともゆる血氣の辻伎。伎燈る。出で西くむむとる。あひる裁判人へ目送り果て舊席に坐と占ま。酒客は怕れて。次房(避)う給侍の婢妾們と共小廝も出で來。亦復酒を薦む。老牛裁判們。磯九郎の噂。と小廝對ひ。あるも醉る。ぬふ十貫文の錢。のりて夜行を遣る。心のる。詐々も見隠れ。送りもくも。これ。這美と興へ。うと。心と屬。小廝們的磯九郎が人もあ。似而非廣言と憎。生心。早。偶。奥。あ。は。れ。と。焦。と。執。次。の。い。る。け。り。有。徳。一。程。小。文。吾。い。又。那。乾。淨。舎。死。

又解して。と。譚。全。半。响。の。り。夜。の。多。初。更。の。比。及。余。主。人。引。れ。又。舊。の。客。房。の。末。ま。け。れ。牛。裁。判。們。の。磯。九。郎。が。解。箇。様。を。信。と。る。を。報。知。ま。る。を。小。文。吾。が。驚。紀。を。安。ら。ぬ。の。み。た。れ。這。首。の。り。と。小。千。谷。ま。で。二。里。の。路。の。あ。ま。ま。況。千。隈。の。夜。河。の。醉。狂。人。の。錢。帛。を。擔。ぶ。て。一。個。夜。の。危。く。老。婦。恙。の。あ。ら。ん。ど。も。他。が。乾。父。次。因。太。市。人。も。れ。も。使。氣。あ。る。情。由。と。知。金。其。財。帛。不。愛。て。夜。深。一。個。磯。九。郎。に。還。し。け。り。と。あ。ひ。ま。ま。う。ん。の。恥。け。時。の。聊。程。の。一。と。も。醉。た。る。の。こ。ろ。に。遠。く。の。去。が。快。舞。笛。と。立。揚。を。須。本。太。郎。推。禁。め。て。宣。ふ。の。理。を。も。つ。と。起。せ。ぬ。の。及。び。僅。僕。輩。を。ま。ま。と。て。裁。判。連。の。心。に。記。す。と。お。禁。め。て。も。笛。を。た。た。か。切。て。小。廝。の。二。面。名。も。俱。不。遣。る。と。さ。う。と。大。家。は。あ。ま。そ。ら。俺。們。脱。落。す。那。人。を。信。徳。と。い。つ。て。い。ふ。か。多。月。御。食。膳。の。最。中。で。あ。り。ぬ。真。通。達。せ。り。ぬ。今。ま。で。の。事。及。ま。さ。る。と。報。す。主。人。の。眼。を。睜。と。す。那。奴。們。等。困。ん。快。甲。も。來。よ。も。の。提。燈。點。く。と。さ。

やと類の小焦燥て呼立と小文吾禁めて具等ゆ我個人を走らして引戻さんとせらるるも
 俺身みづもあつたは磯九郎の意云と強情張て後々いひひき今宵の御食
 応飲ひ述盡かろ今より暇とありてとていひも主入の禁め難てあつたは是
 非及の然と遠路の夜は復轎とまわらん乗とて走らぬとて小文吾
 頭と掉てその流るる車馳走れどもその爰より時を程まのく及ひかたは尤一のと
 の捨て身装は慌らとて主入の意も奴僕輩を西三名呼立て若們の
 客人の役ひまると快気なと辭せりく吩咐て却後方の合寓た牛裁判們の對て
 各位もそのもの一人途まで送らせぬ咱們的復轎と吊して迹より趕着んは境を
 憑きまう走るといふ大家異議もあつた宜きあるゆ甲し且く送ると主共侶の續
 けく来よ迹とていひて走り出る一兩名後れて来ぬ奴僕輩と呼掛るる急がて
 一町あまり先たはる大馬喘ぎ遅牛の月を便の不便なるは案下某生再説較守磯

九郎の醉小無し牛裁判們的皆禁めし意見を聴く十貫の銀五反の縮と獨
 初めらち撰て須本太が宿所と牛より只管路次と急ぎとて又只跟々踏々と歩れ
 運びの危るし幸いよと涼もせぬ跌をも甚辛くと路里餘来小ければ夜は二更の
 比小きけり磯九郎の性とと角力と好め然るるの替力る宛あつたはより持堅
 して背の汗は推流され酒の酔い醒あけり而垂時を思ふとて後小擔より卸
 きて推祖は月と瞻仰て腰を杖を抜出し胃毛を浸せ汗を拭ひて彼此とて
 今来一方の山路より相川村ありけりか。這里の件の村盡如也。陝野あり水田も
 われ樹下敷の陰るるは残るる言をなす。夜艾の野田のふれわれ宇津の山
 邊のあつたは人の遇あけり。口辨々悔し小獨執思惟る小御向あり酷く酔あけ人の
 意見と聴きとて倍々重擔を遙々とて来るるを俺も勞しと功を盡すなり。是
 よるも甚辛くと小千谷の宿までとて身も錢も縮も俺が東西よりぬ人も馮恩ぬ



擔奴とせし。只是酒の所為なれども。知漢を人かめれん然と。粟をていひのれは。三三
 了と。獨言。舌うち鳴る。後悔の今。此亦。一。格起。肩。載
 せ。折。忽地。婦人の叫ぶ声。一。嗚。妻を助けて。助けぬ。呼。登時
 磯九郎。あ。吸。且怪。急。下。人影。原
 是。狐狸。今。俺が。疲。悔。心。虚。入。魅。做。あ。ん。の。嗚。呼。
 罵。祖。推。斂。遠。眉。毛。廢。唾。塗。初。快。槿。程。亦
 復。吸。声。頻。起。助。け。と。叫。び。磯。九。郎。疑。或。去。も。限。矣
 月。燭。一。看。彼。此。看。回。声。正。樹。下。殘。雪。邊。人。土。中。あ。然
 と。か。ぐ。く。形。状。不。見。我。執。尋。思。做。ま。北。國。習。俗。冬。春。雪。れ
 深。比。獨。戸。們。雪。穿。空。藏。の。如。ふ。し。雪。密。居。て。鳥。捉。ま。毎。に。り
 今。四。月。の。初。旬。也。里。の。雪。消。果。も。日。光。疎。巨。樹。の。下。敷。陰。る。雪。の

小山のぞ。残。雪。あり。信。那。里。の。鳥。と。捕。り。穿。ぬ。雪。密。の。あ。ら
 ん。然。夜。行。せ。の。行。件。の。雪。密。の。一。の。助。け。の。扶。助。を。求。め。然。れ
 亦。知。る。い。て。い。の。声。が。不。立。て。果。し。雪。密。下。漸。解。初。の。雪。を
 深。く。え。え。上。の。岩。の。如。く。堅。し。且。滑。も。不。違。り。る。と。も。あ。ら。ん。声。を
 け。雪。密。下。其。の。め。の。声。正。婦。人。の。似。り。何。の。故。不。夜。を。獨。り。過。り
 情。由。の。ま。の。と。声。振。降。と。吸。の。向。雪。密。の。各。の。疑。ひ。の。理。り
 妻。の。千。隈。の。川。邊。多。農。夫。會。甲。の。妻。の。け。那。二。十。村。多。隍。廟。祭。祀。の。牛。の
 角。突。を。現。お。て。黃。昏。時。の。不。あ。け。這。邊。の。大。石。多。及。鼻。の。速。れ。狼。狽。を。あ
 の。岡。に。降。遊。せ。程。不。身。の。雪。密。に。陥。り。出。ん。ま。あ。り。ま。は。か。く。驚。馬。真。愛
 以。て。人。の。扶。助。を。俟。め。の。自。の。暮。れ。性。還。も。絶。て。声。喚。嗚。せ。二。响。許。悲。し。限。で
 あり。の。い。て。要。時。の。あ。ら。ん。旁。に。枝。楊。の。宿。野。還。る。良。人。告。て。あ。報

以の仇とまへ。いそくと哀まじく。伏拜むるをえびごも。声の涙の隠るる真実苦の
 そと磯九郎の夢の志をく領了。亦不慮の災難の雪の残るる暖るれ。蛇も蛇も出
 つらん那雪頻吹ふあするの。穿の七巻のあれる。信の空の隨する。拮の六を攀
 と。柔妻時等ねとのひりて昔処の退るる。雨箇の裏の締着る。索の釋の初を外
 牽引攫て。軀を空邊にまらゆまひ声とて。有喃女中俺今上りの。這初と棒を和
 女郎のれお楚と推方と曳る。隨出でて来と。取る外たよせよ。とあるゆさう初の杓成
 徐ゆる線降まら。那女房の幾番も。飲の演る。早央推方らゆのけ。磯九郎も
 焦燥て何を胡徐々々。快き未秩々々。向の程。由断の。現の女房初の杓。ま
 つけカを極めて曳と引く。卻含と取れ磯九郎の吐嗟と一声叫ぶも果む身と倒る雪
 空の底まで。撞と落とけり。當下件の女房の透き短刀抜合て。無から磯九郎が
 胸前刺んとめり。磯九郎の臥る。身と遺錯り。退退々々。怒れる声もあや。騙賊

奴謀られたりとも。長の知れる女流の。大刀敷腕戦る。目も物もせん。覚期せよと教
 團悍く。矢庭の丁と反覆して。刃を奪取んとせし。女人も不測の癖者也。る。奪れど。角
 いろの。又臂を三支ての進退便る。雪空のそと。とねく。挑をけり。浩処。一個の癖者もあ
 竹槍を引捲て。竹藪に陰より突然と。頭れ出づ。此も猶豫せん。合する槍とる。得て
 走る。空内ゆ。磯九郎が辛く。賊婦と膝の組布て。刃を奪取て刺んとす。振
 落けん。ある。まはれ。の。あせす。と。あ折件の癖者声とて。船首尾の。あ。と。回れて
 僅小力とゆる。賊婦の下より。声ゆ。絞と。と。遅る。刺外と。組伏られ。と。知ら。と。の。あ
 駭く癖者。あ。あ。と。棒突。あ。あ。と。刺る。修煉の竹槍。憐む。磯九郎。右の。信と
 裡。貫まで。刺串れて。柔妻時。あ。あ。と。喧を。仰。あ。あ。と。船虫。透き。と。反。と。短刀
 搔撈り。合する。あ。あ。と。重て。申く。十々。滅の。刀尖。春過る。ま。残る。雪より。脆。磯九
 郎が。露の。命の。果敢る。滅て。黄泉の。客と。あ。けり。有。は。は。癖者。あ。あ。と。

槍どき月緩めまぬまひ声をゆり立て船虫様子の甚麽を返と問へ答で上首尾を
 奴家中十々滅と刺れ死天の山路走り槍を携りて快歩を援にやぬまひ
 癖者領にて然る推れ竹槍を引抜又繰降しと携を徐手繰りもやも固
 引拮けの登時船虫の袖を拂ひ鬚撥抗て御高暗跡を定め薄情を身身の遅
 るれば奴家の竟組伏せられて命も既危なりと那奴が身あらず鐵を奴家持
 この短刀の折を捐へ辛くも利運よりたの今宵のまを鈍りてと怒り
 軀短刀の鮮血を拭ひ鞋を飲め帯の間へ挿め癖者四下をくく其首を脱落の
 るりかも憚らぬ那奴も曉ゆれと思ふより此を術延きりも没怪の福惠
 渾家不恙のぬれぬとらの憾のぬれぬぬれぬの造化終日牛の角突と怒
 飽を飲食して甲夜過てか這路也且取重ける裏物を初小櫃を大男子成
 迫りより猛可の計較必錢であらずと思ふれば同道より先へまの形のごと謀

合せ脚色の精妙先や獲物を一覽せ渾家も快来て見ぬるを其はさう歩
 速の擔荷のやうに入ると俱引解く裏の内を此彼芒芥と天で料る小違ひ
 永樂十貫地細の縮も五五の又中刀も取抗て腰を跨々喃船虫這俵擔ふ
 走のる人の怪むらもあん錢の俺成駝ひて縮の渾家のせよ其は領賊男賊
 婦が錢を合して一袱の包む背に駝せ縮の輕と船虫も合抗て肩から背に
 その袱の織色も是一對の虎狼の野心を拭取て共侶の面を早めと影清れ月虫
 有駁系憚り夫婦潜々笑けけらち譚り千隈河の津を投て程小迫り見く小
 提燈前路のかまのまのあり是則別る石龜屋次園太が須本太牛の鼻をよ
 め人の噂の知りて小文吾のういひ心もさきり獨り夜を那里を投て
 急ぎぬるの知るなる強盗夫婦の折るるの只一條の驟路の避躰る不便なれ
 然るなる船虫先立して行ちる次園太灯光を信とて癖者等と喚り提燈左

取り手も右も伸と秋裏を引留れも怯強盗を修弗と振動て必び進むを止せ
とて丁と突る巻の河の及所違はぬ修煉の勁播胸を撲り次園太の苦と叫びて面三
歩後燈で忽地撞と倒れる音もさる船虫の二反許行脱てあまの玉と口とさる空を不
敵の舉動這首管の素快あはれもと論を夜偷の重擔お抱足快く迹を埋せ逃り

第七十五回

醉客を趕く 小文吾次園太の遇ふ
短刀と懐巾で假鼓女大田を按摩せ

且説毒婦船虫が何の程も越後未末又強妻の妻あまの良人と俱り右の如大悪事と
做せ縁故を看官精し泊るべ原る船虫の御宗信濃の香掛を籠山逸東太縁連を
誑惑りて郡木天葵の短刀と盤纏千金と竊取り當晩旅宿を逃亡て足信とま程
當時越後半園の縁連がまるとけ長尾景春の所領よりと知られれば已むりも那
里の米魚の御るれ由縁の人のあはれも這身の所寓と討る便りよりと知らぬ山

路を辿りも馳と越後未末は彼此と於辨々有一日古志郡の金倉山の麓路を過
る折も前徑小撞見て懐かせ一金と奪畧られんとつ折賊の一人のりられ船虫木
天葵の懐刀と引抜たて且挑戦いと件の賊ののりもせで竟る刃と較多路と金を送
る略てけ然れども船虫が女流に似けぬ胆勇の舉動を感く敢亦これを殺さ且
その獨行を止り求歴と語る小故郷の武藏ののりも近曾良人と喪ひければ所淵と討
んと此の由縁と心當の遙々這地も来つれもその人も亦世と去りて迹絶あはれとす
下の雨漏りと進退殆難義の折陸奥の母黨の親族あれが那里と投て赴きとあま
盤纏をうてのそも泊るべも累糸と薄命を這身のうを知入わらぬ詭うられと
らん鬼の目も涙あり地獄の佛も佛るる願六目今略れるを金三が二でも分ちて返
めひねと口信する虚談と強盗でまると越子一箇の商量あり俺も亦の比女房を
喪ひて壁に脱剣の鞘を縫刺新水の技のりえ出納共極便る俺身今年

四十二歳和女郎も四十許るべし。佳れは此彼年庚門第相心かばとまへと。和女郎今より
 機と易て俺と夫婦なるや。常綺羅さして寵愛せし。這商量小乗とばやと合笑みか
 口説たけ。現窮寇の敵と擇ま。窮女と夫と擇ま。この鄙語は似る。船虫の腹。肚裏の
 中。繫る船の楫と絶てよ。山の岸も。折の倫見と。美引去。俺身の矢庭を殺さ。ん
 後。いもあれ。望来任と。後よ。いも。真愛と。轉と。驢と。做さ。庶り。思念。及。今。胸。決。め。ち
 領。神。の。結。び。過。世。あ。て。い。ら。う。の。食。言。さ。び。不。あ。わ。ぬ。伊。奈。舟。の。取。上。川。の。陸。奥。の。意
 ち。身。後。の。必。多。人。棄。果。の。い。そ。と。い。ふ。飲。強。盜。水。入。る。小。布。金。盗。質。を。妻。と。娶。ま。る。心。地。然
 宿。所。伴。去。ん。這。方。来。ま。せ。と。い。ふ。掖。て。小。千。谷。の。か。お。て。あ。ら。り。又。原。る。小。這。強。盜。重。子
 竹。筒。子。酒。顛。と。喚。做。した。一。所。不。住。の。山。家。之。當。時。戰。國。の。治。習。也。神。社。仏。閣。軍。兵。の
 乱。妨。を。免。ま。ば。種。破。れ。及。ぶ。も。ヨ。ラ。中。小。千。谷。と。塚。の。山。の。回。る。山。院。の。せ。尻。て。住。住。わ。り
 たる。あ。の。あ。れ。お。よ。り。酒。顛。二。の。這。其。九。廢。院。の。庫。裡。を。り。傾。危。を。ま。目。送。ア。酒。已。住。野。小

あつ。あ。時。博。徒。と。聚。合。て。表。彦。道。の。技。小。耽。り。銭。多。折。の。夜。拵。と。山。中。の。立。人。の。家
 中。を。竊。入。り。梁。上。の。君。子。と。言。夜。の。言。ひ。小。船。虫。と。妻。あ。せ。よ。り。同。氣。必。相。求。め。同。病。必。相。憐
 む。牝。牡。一。對。の。殘。賊。を。夫。と。資。け。て。共。侶。の。屢。惡。思。ま。做。を。程。ふ。の。日。も。相。川。の。驛。路。也。
 夫婦竊謀一合せ。磯九郎と殺せ。折船虫。雪空。更。十々。滅。と。刺。した。短。刀。は。是。則。別
 刃。あ。ら。び。の。年。杏。掛。也。縁。連。と。誑。惑。り。て。金。の。共。竊。取。り。る。木。天。蔭。の。短。刀。之。船
 虫。越。路。流。寓。に。酒。顛。二。の。妻。あ。せ。よ。り。後。外。小。舟。と。あ。毎。那。短。刀。と。懐。中。と。身。の。護。ふ
 做。せ。と。害。心。あ。ら。め。防。害。あ。ら。め。信。と。ま。の。ぐ。ら。ん。間。話。休。題。介。程。小。文。五。只。の。夜。頻
 下。磯。九。郎。と。趕。留。ん。ど。の。と。あ。り。の。牛。裁。判。甲。と。須。本。太。家。の。僮。僕。輩。の。徒。い。ま。も。來
 方。中。も。管。口。の。顧。路。次。と。急。ぐ。の。う。十。刻。を。後。れ。方。と。あ。あ。れ。も。趕。着。る。相。川。村。を
 うち。過。ぎ。那。驛。路。不。到。る。と。月。の。漸。々。傾。だ。て。真。夜。中。比。あ。り。ま。け。り。佳。依。折。る。前。程。の
 路。小。倒。れ。る。の。あ。り。ぬ。先。小。進。三。小。文。五。が。逸。速。く。た。か。七。訝。り。を。立。上。り。て。月。と。便。り。お

よければ是則別人を小千谷の逆旅主人。次國太史ありければ。何を付麻いふと驚き。吸活をま程の半裁判。由自餘の由。まの着々と。抱え起し。諸声立て。吸活を約半。响許次國太。俄然と。これ復れ。小文吾とて。不審け。大田の大小夜深。なる。這人々と。俱にあら。來あひ。故をあら。め。い。小文吾。同。小文吾。これ。俺。只。管。磯九郎。趕留ん。を夜。着て。走りと。這首。ま。あ。る。その。故。箇。様。々。々。と。向。須。本。太。郎。の。宿。所。へ。磯九郎。が。醉。小。衆。と。衆。人。の。諫。を。用。け。牽。出。物。身。銭。と。縮。き。小千谷。め。か。る。と。て。擔。ひ。寄。り。輝。の。趣。又。小文吾。が。あ。り。も。言。約。申。説。示。し。和。主。亦。何。等。の。故。小。の。所。へ。來。て。倒。れ。る。磯九郎。日。屬。より。酒。癖。を。い。め。の。れ。ま。あ。今。朝。も。做。め。て。あ。り。又。諫。て。遣。せ。し。小。啖。醉。の。ま。ま。と。大。人。共。侶。の。這。人。を。分。せ。し。も。小。可。ま。面。と。虧。き。白。物。之。那。景。本。牛。の。風。声。の。甲。夜。小千谷。め。か。る。小。可。宿。所。走。り。か。り。と。同。合。せ。し。區。々。と。分。明。き。

ねい大人の安否を知らず。ほ。い。ま。ゆ。い。宿。所。を。立。止。ま。る。暇。路。を。あ。る。程。不。夜。の。中。の。比。奈。り。折。り。兩。個。の。癖。者。の。袂。裏。と。駝。ひ。あり。わ。ち。と。た。提。燈。の。灯。光。を。い。れ。一。人。の。衣。の。鮮。血。を。塗。れ。る。偷。見。る。と。と。ひ。癖。者。等。と。喚。ひ。て。後。れ。て。走。る。一。個。の。賊。の。袂。裏。を。引。留。め。小。憶。を。胸。に。播。り。て。輾。轉。び。氣。絶。や。ま。けん。喚。活。され。今。ま。も。介。後。の。ま。ま。と。心。傾。く。月。を。見。て。料。ふ。一。晌。む。ろ。も。経。り。け。ん。寔。不。危。に。あ。る。と。を。り。ね。と。心。か。か。磯九郎。が。あ。り。と。報。ふ。驚。く。小文吾。も。自。餘。の。由。を。食。訝。し。と。又。怪。有。の。ま。ま。小千谷。の。這。暇。を。ま。あ。る。大。哥。も。他。の。逢。つ。ま。想。鬼。來。ぬ。俺。們。も。逢。志。ま。り。疑。心。下。那。癖。者。們。が。背。の。駝。に。あ。る。裏。の。色。の。り。り。と。と。同。へ。沙。國。太。袖。引。伸。と。那。袂。の。花。思。と。え。ま。ら。た。と。い。ま。ち。牛。裁。判。們。の。疑。惑。の。胸。安。き。俺。們。磯九郎。男。の。曾。て。那。二。種。を。包。せ。袂。の。縹。色。を。あ。り。れ。此。彼。共。お。り。似。ら。と。小文吾。又。駭。然。と。あ。る。磯九郎。の。生。死。存。亡。の。ま。一。箇。翁。を。り。と。那。癖。者。の。撞。見。方。も。這。邊。で。あ。る。迹。を。と。と。



八代傳八輯卷一

光三

○文英堂蔵



八代傳八輯卷一

○文英堂蔵

索てんといへば大家有理と心得て右と左不立別れた廻れが弦三張の提燈抗て共侶不涉獵
 とい果しと圖の邊不細糾の麻索あり又消残り一雪の中一糸の竹槍ありて血不流た
 係を又出せや大家齊一胸を流し取抗つ共まで噫痛やこれあつた疑ひもく磯九男の
 件の賊不殺されけん亡骸もあつた馬りつ又立噪く小文吾ややと咄鎮めても這雪を
 踏降りる人の足跡まゝ前圖の樹下より穴の邊不續たう要する志を索めこの
 まで進むぞ中次圍太のむちも那雪音の邊不到りて雪の内を覗くふ突立る初ありて
 その杪才ふええ原末磯九の亡骸の這雪中をあるめ提燈降し七快くええと云ふ大家
 ありて那細糾の麻索を提燈一張結着て雪の底まで線降き深六七尺は過ぎた骸
 正可ふええけりゆれば七を罵りゆる須本太が家の僅僕輩の皆畊作は熟されは這雪
 雪のとも思ひ且提燈を引抗きて一人件の麻索を繩階子ふあ降立て又一條の麻
 索を磯九郎の亡骸不結着る引きおとすもの力を勤て左右へ引出さる當下

空音入るものも又繩階子不足と推して推續して出てあつた又只甲夜の噂をうへ威磯九郎の悼
 ひのそ中よ小文吾の信るべとどらども那醉狂を占めて趕ひて來ぬ甲斐わがと嘆息
 外よりと次圍太とと慰めて先見虚かゆれば本意をくもいふも今ゆふ又何もま死
 他つ家の食客を親胞兄弟も妻もなれば歎息を送る蓋靴の亡骸の俺香
 華院基とと勿論れも枉死のせいで相川の村長も告て古例不儘を後難推らる
 千谷の旅舎還らせや自餘の人々の俺と與ふは權且亡骸を成すか入る俣のいれと辭せ
 多部やん走るとせ折らぬ龜村も須本太郎の甲夜小宿所送る牛裁判們共
 侶の獲轡を巾の小文吾の跡を趕て走ると這里來よなれ小文吾軀を立對てその親
 切に旁に次圍太とと入ると招き近づく引會して却磯九郎が枉死のよと報て亡骸を視て
 須本太のら後に来つる牛裁判們もさる胆を流しと嘆息の勝返るぬと云云と云

出く食後悔せしと次園太亦歎息し他が枉死に各々位の教諭を聴く鬼物の醉狂
自業自得といひまゝ乾父乾児の好む小可い又一層不便の事あらねど然と歎くも又
益む快相川の長小報て允一のいひにて又立去んとて須本太郎推察してその義を
らへる身みまら那里赴き及相川の村長に老拙と親類の當主給用とて老拙を
き後見して事あるは差配せり老拙は徳は明且宜く沙汰す且亡骸を引執り埋葬せ
る肝要なるといひて次園太異議お及ぼせり便に上をい後證のいふまゝは這竹槍ふ
血の凍る賊が磯九郎と刺るるん又初と細糾の麻索の磯九郎が檐小用し那強盗
が銭と縮と奪きてこれを棄てるまゝといひ死す預の措て後々も穿數金の照驗おせし
まは只官憑まらぬのそ那盜賊の二人を一個のまの脱し夜視をけれ性不認定む
後々一個もみ拭て深くも面を單まゝおそれ安定おし易くねと眼圓お鼻高く身長
五六五寸六尺も近す一おの毛もあらぬ又磯九郎を受て痰の痰の右の脛より裏を

機子一介所と呪ふ十々滅と刺すのそと母須本太郎の領は嗟嘆とをのそ貝具お
あろぬらけか甚麽る凶目より俺牛鼻鼻けて幾千萬の人の息割るるを幸ゆて
大田の大人の助力およびをそおけりておのそおのそおのそおのそおのそおのそ
るりも原はと推せば俺家より起りておのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそ
おのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそ
文吾慰めて禍福の糾は繩の如に仁義をそとて火害お遇る例もあらねど况ん磯九郎の
人の教諭も聴て死地お入りするのれが誰ぞも老死を思ひに俺は徳を思ひに誰か
園太亦慰て但小可か當惑の今相川の村長許しおとらるも亡骸を這依る遣
おのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそおのそ
いへ里不到りて求るとも速に救果るもわらぬ俺は這権頼大田の大人を乗せまわせんと
もて吊して手おければ這里らるる小千谷も路次幾もあつたが大人お用捨と願
ひまゝえん快とこれお亡骸を斂めて送らせぬとていふ小文五吾感嘆とてその美宣定おま

下綴あるのありは。俺のくしと轎子の馳まを受て還らぬ。この次園太不樂一けふ。
 その辱はさき。尚已時を轎子と亡骸斂めを垂まきせん。最惜一かをたふそ。この須本
 太郎もあまをい亦要きた遠慮之時の用お鼻でも熱く轎子一箇と何ぞ思はん快々
 斂めぬと。論へと轎夫の不絆修々と吟吟で。僮僕輩中も傳せ却磯九
 郎の亡骸と件の轎子の斂めり。徳而又須本太郎の僮僕輩西之右と謀て遣え
 とのひ牛裁判們も小千谷まで送らんと。身を起こ志。小文吾も次園太も推禁を
 固辞て。竟おの美小後を轎夫們を勞ひて。燈一張借るの。然れども須本太
 郎の衆人。おと千隈河を津口まで送らて別れて。虫亀村へ還らる。夜河の三更を限り
 船より。寅時まで。船を出さず。相川の村役も。兼方須本太郎を送るも。た
 ぬ。誘へられ。件の津小障り。一個の當師起て。小文吾們を船に乗せて前
 岸へ渡らる。介程。次園太。小文吾と共。侶の轎子と昇らる。暁を宿所へ入りて。

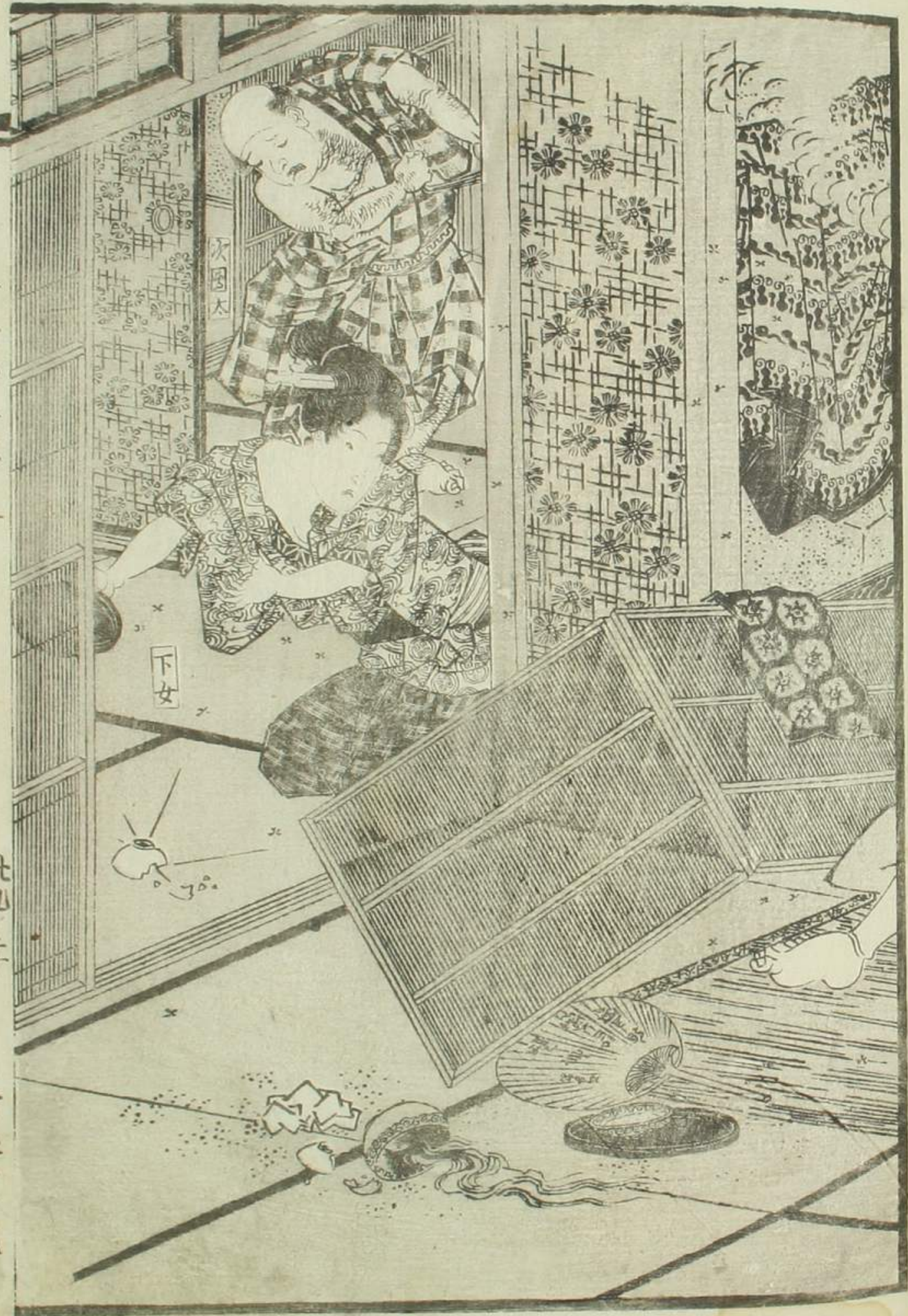
妻小の奴婢中も。悠々と磯九郎が枉死のよと。報知せぬ。酒を飲せ飯
 も喫せ。錢を取せ。虫亀村へ還ら遣。却磯九郎の亡骸の桶に斂め。那轎子に
 乗して。香華院へ送ら。華りける。あまは。枉死の。里正。許寺僧。報て。萬吉。法
 度。後。い。と。は。詩。と。言。省。て。具。あ。せ。看。官。宜。く。察。し。下。却。説。大。田。小。文
 吾。の。這。里。亦。要。あ。る。は。な。る。磯。九。郎。の。枉。死。よ。り。て。主。人。の。吉。文。の。言。を。聞。て。慰。め。せ。せ。ゆ
 捨て。出。て。お。ん。い。さ。の。か。ま。あ。ま。も。似。せ。三。四。日。と。る。又。返。留。せ。程。の。眼。中。猛。可。小。疾。痛。死
 覚て。日。と。麻。止。る。隨。ま。甚。く。物。と。る。正。は。る。さ。び。な。り。け。り。あ。ま。の。年。渡。海。折。風。波。の。暴。に。推
 流。さ。れ。て。伊。豆。の。大。嶋。三。宅。嶋。の。月。屋。蜀。を。経。け。れ。八。重。の。潮。風。面。を。撲。れ。熱。い。魚。肉。の。脾
 肝。と。損。ね。て。今。這。病。病。の。發。り。ま。ん。御。も。恙。あ。り。け。り。津。國。有。馬。の。湯。治。ま。り。と。
 瘡。の。あ。り。と。あ。ま。の。餘。毒。の。耗。び。あ。り。け。那。四。大。士。別。れ。り。今。お。至。り。て。環。り。も。會
 せ。單。節。の。往。方。い。ち。へ。任。親。兵。衛。が。生。死。存。亡。大。坂。毛。野。の。在。処。ま。り。知。り。し。

る免さう入小盲目小きういふとこの宿望と遂安の女より玉水小寫く文字中似たて
 化一世化一俺の物思ひ苦いなり病病小とと獨つらく過去を懐ひて七日と弥れ
 次園太の正首小。這里の眼某那里の洗劑とて日毎小鷹めさるまき。醫師も診せざると
 療養等用形さげけや五月初旬より比小文五五眼中の疼痛ハ中々癒るのりならず
 權且も眼を閉じ物とせんと欲され亦復疼て堪がかりの故小夜と夜と日とく無聲にて
 身を次園太の慰みて辭敵さるまき此の身の経営人のうも此彼とく拘連して宿
 野小在る日の稀なり是より先小須本太郎の使と小千谷遣と磯九郎が與小目置を
 次園太小餽りけり。折小文五五眼病の大なるぬと知りて訪んとあ程小この
 身も益可類中風の病病度とて行歩克まらち臥るとゆえが是より病と年と歴て
 竟小むるるり。とを後々のるる。筆次小寫まの。虫亀村のるる。下小話る。小
 程小降とぬと。檐の玉水音とを聞く。五月中旬よりけり。然而有二百次園太の例のい

宿所小をいふ。その夕つて小かへ来て小文五五徒然と訊慰める語の次小眼病小肩癖の
 凝りも起るといふ按摩もその效あるべし。此より一個の鼓音女の齡四十許るが黄氏
 毎小笛吹鳴りて這邊を過らるる日稀と這御出昔より七女按摩のるる。一
 他何処より来るやん人々小朝勝がられて療治の評判をここ。這里小宿投る旅客の
 召よせて肩癖と拍せるも。此より大人も今宵ハ那鼓音女小肩まれ腰まれ麻のいひ
 然るる効のあはるも寂然とて只の獨りまま小優柔と。小文五五領て按摩
 素より好まひも療治の為出數べら。その鼓音女来る刀口の小利やまを。試
 てん。次園太のるる。辞と納戸へ退り。然而も小饌果と點燈時候より。く
 宿の婢妾事件の鼓音女のみを板を俱とまら小文五五ら對して。齋小主人のまら
 ま。按摩刀小柄をすまわぬと。小文五五ら。然るる療治を。馮む。俺も亦のぬ
 月より眼病不便之女中。這里按摩とて。此月の方坐りね。との小婢妾のるる。

件の鼓音女と小文五の後方おどろ推居て要時あはは遽いけ小庵溜のく三退りり當
 下鼓音女小文五冷熱と演安否と誤れて目の病着の逆上おどろて世も當はとされ
 且肩より接和らげて介後阿鍼まおら下許させぬと差寄て撃肩癖の子拍子
 修羅の鼓あわねも噫危然と小文五命りる時風前を燈燭もも異るに詎知
 る死這鼓音女是實是の亡目あはれ其るものと原は亦那賊婦船虫を船虫といぬ
 比二十村を聞牛と親もなる折憶も稠の中よりと遠小文五と入て二つは怖れが
 愁ふあるお拭れがそれとる小彼此と人お尋ねて小千谷を石亀屋の返留の客るよと云
 女ありて小千谷を徘徊り人の奥の按摩と執けりこれよりと石亀屋の宿投り旅客肩
 癖を撃るるとも面三番まで及ぶ小文五眼病を物をもてるこのゆるりゆりさ旅舎の噂
 知て既十二分の喜悅あり便りもかねとる程今計らるも吸いられ最輒と大田が身

連お近づくまゝなるれも小文五の目届届より疼痛小懲りて眼を開る夜は殊更の燈燭の
 光を厭ふての燈を近く置せぬ折られ侍も他と見せぬれは知るるあぬのか
 船虫又俺が声音と聴覚もともやと必し言宣奉小と肩を麻らう背を推まを透透流
 の懐る木天竺丸と抜中へ背と刺串し押して頸を搔く足状と腹を回し腹を合すい
 る輒くも下と全然と悟るよもね大田が身少那靈玉の擁護行なぐもあはれ推
 摩の指頭皮肉の答て疼と堪えられければあはれも声もしてや今少許寛をせ慈推
 されての堪がさりのとを船虫うち笑ひて妻が指おちるるれとより経絡の後より穴所不
 當れに通るるこもさうそがぬある稱のぞい緩う致まもいと自かりと答る間お懐る短刀を
 潜と抜中へ左より肩を摩らう右より柄を握合て抜放さるとも程小文五狂
 可お胸を騒がて吃とと声の忽地耳より心ふく疑念おて按摩を休むも優
 とあつと尋思と又推林示めて已ぬ然も痛ら翌の夜も又憑む大田が身



と勞ふる。弊の下船虫の短刀見たりと引板を左に小楚と小文五郎衣領極柄を引
着て咄を撥んと閃めたる刀の光の目も見え小文五郎透きぬ船虫の利を丁と捕止る
まていこや。海者も暗に足も若く斬く敷く備えんや。と馬のつ引被せ
肩を越すと面前へ助斗を拍と投伏せり。這响曉の次園太の駭れまゝ走り来てこれ大
田組布れる女按摩の假説者也。小短刀を抜き合はれ問でもある賊之なり。とあり人を
情由もく皮を辟未掛る擔索を取て大田代りて船虫とぞ轉々と細めけり。登
時後まゝ走り取れ。妻のゆるり奴婢們も怖ま舌を掉すも。或は其の兇惡
憎て捷よ敵けよと。いさ言品く罵りて次園太は叱林下り。恙るる小文五郎を
祝と且その眼病中不便な折の劃勁と口官感と已げりけり。畢竟今小文五郎
船虫を生拘と後の話説甚麼を。そ又這次の巻の解分法を聽孫か。
里見八犬傳第八輯卷之一終

南總里見八犬傳第八輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第七十回 庚申堂の俠者賊婦を囚ふ 廢毀院は義任船虫を送る

却説石龜屋次園太の細ゆる船虫と且縁頼身柱不敷れて他が所持せし短刀を
會抗つ左見右見て鞋を斂めて小文五郎の身邊に措て却り。小可い那賊婦の假説女
るしと知らざるも。愁々大人小童の疎忽の事と争何せん。宜奈危るるは是亦世に這
短刀の焼刃の大曇りあり。近屬人を斫るの秋是も亦知るべし。ゆゑに那賊婦の
必是旅客の枕搜の類にあらず。水滸の母夜叉母大虫に似る強盗を死秋とて。主人の
為にお身を狙撃さんとする。刺客のめいりん。只い當らせぬ。とある秋甚麼を。と問
ふを小文五郎ちてのり。趣寔より。俺の亦然りあり。と朽をくも。その今ゆ

自由なる所れ正可ふらひけれも那奴声の武藏を鷓鴣の並四郎と喚做たる奸賊と妻
あり。船虫の似る所あり故の箇様も今より五稔前の秋那並四郎が小文吾を宿所留
めその夜又殺して盤纏を奪取んと計較する癖の趣楽事件の並四郎が小文吾を殺すまじと
船虫の身は詭と此も怨氣色を小文吾と遣りて途を千世宗家の御役を畑上語
路五郎の午と借と擲捕と謀りかとも又小文吾の抄と摘れてその奸計は縁立地
發覺て倒る身と細められ石濱の城牽り折竊の資入人ありて逐電せよと云ふ所
夏の為体又那嵐山の尺八と小篠落葉の刀のまことの崖略と説示と願ふ那假替女
奴のあれ並四郎が妻船虫あり遠く這頭へ流落る俺の旅舎在るも眼病を稍
ひきこれあり。這奴何の間ゆる知て夫の怨を復さんそ遂に今宵既其の状這一
條と除けて仇做を婦女のそと這身取りと記臆る。いふ次團太駭嘆と既
そのあふん今けり疑ふものも那奴の件の船虫を喚と賊婦でいひてんのも又

身と起くと四下と見る小柱は横一條の露拂の小竹杖あり。これ究竟と遠く引提げ船
虫不化と立對ひ疾視してこれ賊婦今大人ののれと云つらん汝の那並四とそんが鬼妻船
虫おそあめ何の比も這頭へ来て何処を宿もするをその身一箇おあひて必支當多
らぬ。懐かき短刀も賊物も近は比人を殺せよとらん出外來歴支當多を問う隨招道
せよ。目も物とせんぞと罵ら杖振り抗て續るお杖徹せの船虫の吐嗟と叫ぶ声苦い
戦とや主事時をも更迭するの何ぞ悪ん且のうと听ゆと悲請を已ざりて次
團太のいもとと權且呵責と止めり。登時船虫の頭を槌吻と息つて喃主事を武藏
る。人の妻のあふんが故郷の則下野を赤岩村の隠れる赤岩一角武藏と喚れ御士の
恥る。妻が良人おのりあふんが良人武藏の年故わの笠山某甲との武藏を
子小園敷をせられたるの過世とて仇と殺され見子一箇もつとせけれ俺身女流はあふん
那笠山が往方と赤岩の良人の怨復んそと決りその日より神の祈の佛の誓ひて縁の便

官願まきやふの夜の夢の良人の宛家の這越路る魚沼の郡のわんと正示現
 心男とて舊里と潜劣辛くも獨這地木あられも由縁の人のあられ亦定め宿
 る一女按麻の形状と變て亡目と名を里人の中及旅客の中彼此近づくことあり甲斐
 計らひ這里の喚入れ初と大人とてける面親半庚声音まで那籠山と一對を不思
 議の首をさひ別人とてさひもつける時由影と現ふ敷果えたりなりふさ中飲
 ぬ大人の大力投伏せられ人没怪の幸ひ細められ折れ又心と屬てはらくとされ實れその人さ
 ぶ那籠山と小髻の内の一す許の舊痍あり又這大人のその痍を性起り折れ其
 首を念入れさう疎忽の幸と元さる短刀の良人の紀念妻の則大村氏あり名
 と窓井と喚れゆる人不知及宿望も俺身の素生もら諦報もさる疑ひ這
 縛の素とる鮮見のれを御縁の仇討の後見とて共侶の宛家と素
 縁のつらあさる縁もさる哀れとて声さく口信を搗鬼の巧いゆ武

藏野のあつとある水の水のわくわく假涙虚泣あり伏沈む次園太をうらむ有
 理と氣色中只顧嘆息あり小文吾呵々と冷笑いで翁上那奴が巧言虚談
 感て実更家聴ゆ他倘是刺女也良人の為小雙言敵と較さんと欲者ののれさ
 俺の刃を捉止られて本意を遠送るぬと忽地の胆落して怖る王さるんと投伏せ
 且一時不及び必死と極めりの必死賊心言詰り頭れて細められも羞るも陳る
 と此巧も只その命を惜むる彼紫の朱と奪以破破の玉小混るといふとあるとさる
 俺の一切あるがごとくとられて次園太忽地小曉そ外股うち鳴りて賢察誠おそのり
 あり這奴飽き機微さるいふとて実を吐く死術實を死と嘆いてぬさひ機と立對
 へ船虫ととら流る徳をのひを疑ひ強顔人の恨めやを嗟院と疾視
 ての檻の獸とる一身の今ゆふさるの折り次園太が角力の弟子小泥海土丈二
 百堀鯉三と喚做したる兩個の杜校這里不事の既わく船虫の生拘れる縁由と奴

婢們噂知也。規んもさる。次房のり。方後次園太が船虫を提んてつ。閑座で
 や。喃大哥と喚びて。笠戸の陰より遠く。共侶の立出て。次園太ふらち對ひて。大司這
 奴が大胆なる。刀劍之味せし。又その陳言。趣を搦鬼ると。いつる。その大略を
 記す。現艦艇する。そのまれの責問。そまふ論を。這首も。中も。亦復。酷。藉
 叫びて。ば。その四鄰を。駭え。任る。もの。例も。ある。庚申堂。ひ。あ。神。慮。儘。あ。め。あ。が。を。
 との。へ。次園太。領。は。て。言。足。ふ。の。ま。あ。ま。さ。然。ハ。那。里。お。ろ。あ。て。三。夜。矮。樓。の。辺。米。吊。り。を。宵
 毎。小。鞭。提。る。た。ま。首。伏。せ。る。を。准。備。せ。よ。とい。ふ。せ。と。小。文。五。口。要。時。と。推。林。示。め。神
 慮。儘。と。ら。ふ。ハ。御。向。も。ま。づ。さ。る。ま。の。里。人。の。私。刑。而。て。その。刻。薄。な。過。さ。後。難。あ。り
 争。何。其。願。の。領。主。訴。へ。官。府。沙。汰。あ。ま。り。と。い。ふ。次園太。夢。あ。ま。地。方。の。風。儀。と。知。り。あ
 れ。任。官。其。理。り。た。れ。も。然。れ。の。不。便。の。ま。ま。ら。當。所。の。前。内。官。領。長。尾。判。官。京。春。封
 内。忠。主。の。近。曾。上。も。白。井。の。城。在。也。又。當。圖。中。春。日。山。長。尾。家。の。城。あり。とい。ふ。路

遠けれ。訴。訟。人。們。の。往。還。不。日。敷。し。費。を。の。ま。主。在。さ。の。謙。劣。小。動。も。其。非。理。の。裁。許
 あり。是。の。不。便。の。ま。ま。又。這。里。より。程。遠。く。ぬ。三。嶋。郡。片。貝。長。尾。家。の。別。館。あり。其
 首。領。主。の。乳。母。君。服。の。大。刀。自。と。喚。れ。ぬ。が。年。来。住。せ。ぬ。み。づ。を。政。事。受。け。亦。是。女
 後の。臆。劣。也。見。眉。の。沙。汰。も。勘。も。な。若。談。衢。説。し。た。り。是。の。不。便。の。ま。ま。三。日
 さ。費。ま。ま。ま。と。勞。り。も。功。有。た。り。領。主。の。廳。ま。わ。ん。より。神。慮。儘。に。優。ま。り。あ。は。此。地
 方。の。私。刑。を。い。へ。昔。より。い。た。る。の。ま。の。領。主。も。あ。ま。り。免。許。と。稟。し。よ。ま。ま。を。こ。後
 難。あ。り。ぬ。や。お。ち。任。ぬ。ひ。の。と。あ。ら。う。の。白。子。説。示。し。け。却。社。校。們。小。船。虫。を。牽。立。て。共。侶。の
 張。燈。引。提。き。遠。く。里。盡。処。を。庚。申。の。荒。廢。堂。投。て。出。し。け。り。悠。而。ち。夜。支。中。の。比。次
 園。太。一。箇。か。ら。來。て。小。文。五。口。報。る。を。那。賊。婦。奴。の。形。と。て。庚。申。堂。一。章。の。ま。ま。て。懸。燈
 樓。の。梁。の。吊。り。で。土。夫。三。船。工。們。小。竹。を。執。り。鞭。提。し。て。幾。番。と。き。責。問。ひ。し。よ。ま。ま。と。り
 心。大。に。癖。者。な。れ。の。提。り。毎。小。叫。び。の。ま。ま。招。道。せ。れ。ぬ。翌。由。明。後。も。三。夜。の。間。那。首。

八代傳八陣卷二 文藝堂藏

由はく責懲一を竟不哀とて実と吐くべし。と主丈二鯉二の倅倅とあるゆゑに途
 より宿所へかゝり。他們の年来小可多。用力の弟子でいへば翌の夜も又のえとのいふ。這里
 として荒廢堂を約十町許あり。人家を離れて奥まゐる。蕃山の腰でいへば白晝でも人の往
 還罕多。非如那里。西のりあり。賊婦が梁を吊られんとするとも憐れ。て資るのりひつて
 這頭の人の並て威神慮儘と知るのり。神慮儘せむるのり。五人多と知れば柳件の庚
 申堂。年々の闘戦。荒果一より人の詣らぬ。神像まよとる。今い必要は荒廢堂を
 ども毀もゆきを依ふ。ち捨置。神慮儘の私刑よとて這御のり。徘徊せられ。然れば
 件の賊婦奴。詭りて陳さるとも。三夜及び死をもあふ。千隈河。推論め。地方の害を
 除くべ。と只大人の與のり。とて這御人們の爲れ。といふ。小文五。ちちて。のり。え
 たれども。那假鼓女。強盜。然れども。刺客。ある。と。只。是。推。量。多。い。き。招。道。致。さ
 る。食。餌。を。與。へ。苦。痛。を。緩。め。賺。し。て。問。ふ。可。い。べ。し。然。る。と。三。夜。を。限。り。と。て。喘。び。て。殺

さび不仁の似る。後悔ありとも。甲斐多。ち恨り。のり。倅。暗。殺。す。他。と。る。と。自。由。な。ら。ぬ。が。る。月
 疑ひを釋し。由る。就て。這短刀。のり。假。鼓。女。が。東。西。と。い。へ。と。焼。刀。の。冒。雲。の。三。母。堂。言。ふ。な。ら。ぬ。
 人と。砍。る。の。り。似。て。の。り。と。い。ふ。と。又。と。い。ふ。と。御。高。殿。九。郎。と。殺。し。る。那。次。盜。賊。も。あ。れ。ち。を。り。く。
 照驗とる。と。も。あ。ら。ん。飲。見。も。亦。知。ら。ぬ。然。れ。ば。這短刀。のり。和。主。權。且。預。め。措。て。那。穿。數。金
 ども。あ。ら。ぬ。か。と。い。は。れ。て。次。國。太。異。議。及。び。先。小。文。五。の。身。邊。を。那。短。刀。を。拵。抗。て。真。趣。定。ま。ふ。
 小可預り措く。夜のとほ既深。初ら快々睡る。あひか。と。告。別。し。短。刀。を。引。提。て。奥。へ
 退。り。のり。小。程。小。文。五。の。睡。れ。ぬ。隨。通。宵。身。の。病。着。と。草。枕。旅。宿。の。憂。苦。を。遣。り。難。で。
 獨。は。り。之。思。惟。す。倦。ふ。風。眼。も。早。晚。と。子。餘。日。あ。り。な。り。然。し。も。主。人。の。親。切。な。醫。治。賣。
 茶。甲。と。わ。く。蘆。の。み。任。し。て。取。替。引。易。久。し。う。用。ひ。ら。れ。ば。も。只。疼。痛。を。退。て。物。と。る。と。克。見
 る。のり。便。さ。る。草。根。木。皮。の。効。る。と。又。神。佛。の。真。助。よ。と。て。世。の。難。病。の。瘥。は。

の亦もこれも一つのまたた然らんがともあれば往つたらんが身ま石は濱の城内に在りし時に馬加大記が邪計を
 毒類をれんがけんとも折の言をりしとも年来所蔵の靈王とも口を合とり玉波の奇特なりと
 腹痛を思ひ不思議な事をりしも亦神佛の冥助をりし憶さりし疎る事も亦靈王の
 奇特な祈の醫む時の雲も袂霧もち拂れ天日を瞻る心願わん身守思ひを遠
 枕邊遣の身を起しと夜日も肌膚を放さす身護囊の匂解被る玉を取出つ
 祈念と幾番とも眼包を拍れ撫るまく銷然と眼内の邪熱退冷て心地清爽まりし
 けりと目試み枕邊遠く措たる行燈を徐と引きと戸共に掲げてち對し自厭むもわれ
 ろりと憶を忘れ念と獨笑と是則靈王の妙心奇特な疑ひを任ます冥驗灼然と神
 室と身を付きと千餘日禱もりし他所不共と未ありの恥ひを子とち忘れて人の抱る梅
 見るも羨む不似すけりかも疎る俺が怠慢を許さる念と亦復眼包を拍まり
 物とりし初め初め枕を被る微塵まり夜視中も鮮明をりけり歡びも勇て起るに

風ぬと那荒廢堂へ兜へ假替女とりしの折れし船虫秋船虫に依り檢定て疑ひ
 其首の氷解け推量とり只の管の人を任と身を為る人を執行とり鳴呼を胸に
 の心のそれを首の夜を今宵の尚生憎の明を丑三の鐘响けし雲時睡眠の
 就けの不題詔表大川莊の義任の裏小山道節共伴申斐州旅宿とり石
 未の御の片邊を指月院の宿投り夜料も大法師と登崎士郎照文の面會
 ちて裏の行德とありの天江親兵衛のうへもちら哀歡とももく權且還望
 たりしと又道節と商量と迭代東北諸州をち巡とり又大塚大飼大田并小生
 死存亡の知まとり親兵衛のうへも素來死んと大照文の任とちりと説示
 ちて莊の去歲の如月獨指月院を立た武藏不到り下総を赴り行德の里人大田
 父子のを向ひし小文吾の故郷遠らしの故に文五兵衛八住の孰也家を佳り市川に
 妙真と共伴小安房の親族許赴りとの次の年の春也のけ世とまり免とりし

夫がら。あつちの如く。疑念の胸安らぐ。然るも。小文吾の。曳子。軍節。と。おろく。
 此の如く。這行徳の。還る。と。何れ。何れ。身。を。寄。せ。け。ら。れ。る。と。云。ふ。の。う。え。
 と。又。里。人。の。向。へ。と。正。可。知。ら。ず。あ。ら。ね。ば。不。成。に。な。り。て。真。回。國。府。基。ま。で。か。て。來。り。
 更。不。常。陸。不。赴。於。秋。の。比。も。玉。鉾。の。陸。奥。旅。宿。す。今。茲。の。春。ま。那。地。の。あり。五。十。四。
 郡。と。徧。歴。り。卒。都。の。濱。ま。で。漏。れ。足。信。と。涉。獵。す。か。も。あ。ら。ん。人。の。遇。後。
 中。を。な。く。歩。以。捨。て。越。路。と。投。ぐ。程。の。春。過。て。夏。も。な。五。月。中。旬。の。ま。け。の。素。衣。の。急。か。ぬ。
 逆。旅。多。大。八。の。大。江。親。兵。衛。の。神。躰。と。な。の。の。性。方。知。れ。ど。や。え。い。山。の。遇。へ。の。峰。の。登。り。
 谷。の。臨。め。の。峻。岨。不。立。て。身。の。危。を。の。も。ま。ま。の。故。又。目。簪。と。經。り。越。後。州。魚。沼。郡。山。
 里。と。過。る。折。其。邊。の。蕃。山。嶺。山。も。漏。れ。杖。と。曳。け。り。の。日。山。路。の。暮。暮。小。千。
 谷。の。御。へ。十。町。許。も。あ。ら。ん。と。程。の。夜。の。多。初。更。の。中。刻。ま。り。り。ち。も。續。け。五。月。雨。天。
 珍。く。雲。吞。見。り。て。十八。日。月。鮮。明。山。峽。も。升。り。る。前。路。も。高。山。の。小山。の。其。首。故。の。佛。

堂。え。の。登。時。社。小。あ。ま。左。右。も。宿。投。後。れ。今。宵。の。露。宿。不。曉。を。も。必。倍。と。
 疲。勞。る。足。も。休。め。を。件。の。堂。ま。ま。ら。ん。軀。を。朽。る。板。縁。不。死。も。ち。掛。面。膝。擦。り。
 却。堂。内。と。か。つ。不。柱。傾。れ。破。れ。檐。不。庚。申。堂。と。寫。し。る。徧。額。を。得。あ。ら。ん。も。蟾。見。の。
 網。の。包。れ。素。紗。の。臨。み。飛。鳥。似。う。四。壁。の。風。雨。洗。れ。不。破。の。因。屋。の。廂。も。ね。と。渡。る。月。影。の。
 隈。も。さ。れ。猶。彼。此。と。看。て。知。り。高。座。破。落。て。神。像。在。ま。板。席。苗。と。生。て。狐。兔。跡。を。
 印。し。る。這。堂。三。回。四。方。ま。大。厦。も。ね。と。矮。樓。あり。土。木。初。工。と。盡。と。磨。建。去。の。あ。ら。ん。信。
 ち。も。頽。破。不。及。び。と。雪。も。風。も。覆。れ。ま。有。名。嘉。吉。心。仁。の。年。間。より。て。都。鄙。不。聞。戦。絶。
 され。神。社。佛。閣。も。大。々。兵。火。の。焼。れ。乱。妨。不。毀。れ。蹟。を。ち。り。も。も。れ。是。も。亦。その。類。を。
 今。より。五。稔。前。の。秋。文。明。十。年。七。月。二。日。俺。身。武。藏。の。大。塚。小。在。り。と。東。人。の。仇。と。較。り。る。軍。木。卒。
 川。簸。上。們。不。誣。ら。れ。て。死。刑。の。場。不。臨。り。折。も。ひ。わ。く。大。塚。們。那。三。大。士。不。極。れ。地。名。の。庚。
 申。塚。も。た。れ。武。藏。の。豊。嶋。郡。這。里。の。越。後。の。魚。沼。郡。那。三。大。士。素。未。て。遇。ぬ。憾。を。



八代傳八再卷三

大塚寺



八代傳八再卷三

大塚寺

名の庚申堂未惣へとも離合の時あり有為轉世の去住の苦は是より倍濃不赴
 死々那里でも有る偶去一ト甲斐かかりあはれ大山生と替るべしと思ふも去歳の春より
 如千の州を巡りて吉左右ありて大山小俣々在り一州の名の甲斐多ためと思はれんいせせり
 と胆向心むとち慰難て悵然として照る月も兼時眺る折もあれ這荒廢堂の樓
 上人の呻吟く声せせり杜介駭然且訝りて吐裏小出せ荒言堂舎夜を雨て人處
 るを怪けれ若是家るは山賊賊者々い妖怪山鬼の俺が剛臆を銚えを猛可声を
 たるるん要てをあれと尋思せり徐不裡面不找を今朽て歩台間遠るる階子不携
 きて樓上小降りてそれ月光の下屋よりよくあへりて残る隈を明りける怪は一個の女
 人の年齢八十許面貌醜くぬる取も敗糸く細られぬ糸吊られてありけり思ふも似ぬ
 糸も非小騷る氣色もきくち對ひて熟視ておれ汝は何物も人あつて変化るる那元
 人の小説小見れとゆえ亦紅孩児の類也その赤躬肥の姿を示し七慢の俺を戲く似而

非麻鬼行小てあつてめ身許多きまを冷は夫の女人いよち泣く然る直い之神を賊
 立女妖怪變化小あつて這里より一程遠くぬ小十谷の御客店小月屬仕下りの小はり
 晝裏小良人の身まらるる貧賤兄小寓居く幼劣小音をまらるる人小仕今口の入身の
 皮ま小拵んと尋思せり兄小ゆも止て那客店へまらり今茲三月の初旬より小主る人
 早晩小薄情や賤妾小眷想しく打々夜跋く口説れ此も侍せき辱めて逐返す心
 小箱硯小容置る粒銀一顆失ふると目取味をあく小牙齧金を果は賤妾小濡
 衣を被せ件粒銀を竊らるとり理も非も分が捷つ毆たりの鮮くともこの解せ
 ぬ殘忍邪慳主の威光と耀しく身動さぬ縛縛繩僮僕非車小の多傳しくけ小黄昏の
 比の心這せ丸廢御堂小牽の之あつ人ぬえられ樓上の梁ま吊りてさるる此の
 隨小鞭撻て羽の夜も又明後の夜も竹を當てるは死をぞ甘盧筆貫卷小と千隈の
 河へ推論めんとて出るとる半時を前より死はれ賤妾小冤屈の罪小屠所の羊と

夢のたう方幾九死おしと一生ひらんとすの事いふと旅ゆく刀袷とをさせたま方
さあ小遇まりの奈落如く。弥陀の御光を拜む似たり。猶も小説りあふつ小名
たは弥彦の神の御四訓を稟まつらん。願ふ事疑ひも。這細も解卸す口の宿所へ
送らるるその再生の御恩よりの噫堪え苦やと身と戦て血走。眼も林難なる紅淚樹
間の雨と降はく凋る花と真なり。誠なる口説はけり。在公れをうち多て。年来大田
小文吾も仇も。賊婦船虫も。神もぬ身の知るより。きられ。あはも嗟嘆して。まがやえし
人の不仁の薄命憐れ。家兄の宿所ハ何処を。その姓名ハ何と。と問へ船虫涙を
禁ちて。兄の宿所の這地方より半里も。りもゆるり。片山里も。獨戸も。名と酒願二と喚れ
ゆの隣疎に孤屋。おの食くはれも。使氣おれ。乾見まる。賊も。女も。厄も。釋助也宿
所へ送り。あつた。さる船杖はゆるん。只ひん慈悲と願ふ。といひ。莊介領はて。その亦自然の道
理へ先解卸してゆせんと。忘て。馳腰刀附。小刀子と。抜會て。左の舟も。船虫を

抱枕の河原。撫る。索と。研葉も。扶節の。雨も。膝げ。その重。索と。解れる。船虫も。
捺の足と。捺り。乱れる。髪と。搔き。推執。な。跪き。莊介と。伏拜。又。伏かみ。出たり
る。是れ。慈善。何の世。ふら。忘る。是れ。足。さ。皮肉。疼。こ。る。難。義。あ。の。ゆ。れ。も。馳。れ。ま。つ。ん。ん
憚りあり。徐におも。て。退るん。いで。送。り。さ。め。ひ。き。る。舟。の。う。の。御。恩。不。と。満。心。む。ま。莊。介。推
辞。難。て。い。る。越。餘。美。も。宿。投。後。れ。折。り。路。の。便。具。左。も。右。も。宿。所。へ。送。届。け。ぬ。さ
せ。徐。に。階。子。を。踏。へ。り。降。り。て。船。虫。又。伏。拜。す。て。大。か。さ。ら。ぬ。御。洪。恩。也。と。い。兄。も。感。心。し。て
今宵の宿。を。ま。え。り。允。さ。せ。あ。と。も。膝。小。掛。て。ま。が。り。身。と。起。ま。せ。莊。介。に。る。舟。勅。り。て
扶。け。て。俣。樓。上。も。降。り。て。外。面。の。空。時。壞。れ。壁。の。鏝。卷。竹。の。太。奇。る。を。推。折。り。船
虫。取。り。て。船。虫。に。受。戴。て。杖。と。突。て。迫。る。も。莊。介。と。共。侶。の。夜。の。山路。を。熟。り。さ。如。く。ゆ。く
二約。半。里。許。童子。竹。隔。子。酒。願。二。隱。宅。へ。ま。ぐ。ま。り。け。り。這。里。ハ。山。院。の。荒。迹。を。ま。り。處
處。礎。あり。只。松。柏。の。老。さ。り。か。彼。此。繁。立。る。見。長。限。の。外。家。を。然。と。も。酒。願。二。が

隠家。原山院の庫裡より。荒る。隨小廣。坐席の二房。三房。この。這
 夜件の酒顛。二の支黨の悪棍。十五名相聚へ。酒を喫く。船虫。然
 と知る。俺詭り。趣を。良人。小具。報。這。旅客。と。對面。折。答。不。都合。る
 べ。と。多。お。けれ。社。小。要。時。門。頭。小。立。置。で。遠。く。門。の。戸。を。推。開。又。引。開。て。因。り。裡
 面。找。入。り。酒。顛。二。及。支。黨。由。灯。光。子。見。る。声。を。け。て。今。宵。の。奈。を。遅。る。今。の
 今。と。て。丙。丁。と。噂。する。ま。で。等。入。り。と。い。ふ。船。虫。を。抗。て。推。禁。め。又。外。面。指。し。七。酒。顛
 二。の。身。邊。小。距。居。て。恠。々。と。今。宵。の。首。尾。を。其。く。酒。顛。二。合。せ。大。多。く。幾。番。と。り。領
 だ。て。却。回。悪。の。甲。乙。の。其。以。續。して。箇。様。々。と。多。く。あ。ら。る。る。存。下。の。を。依。俱。身。身。找。起
 きて。奥。へ。躲。る。の。身。を。残。る。の。才。小。一。兩。石。吹。散。せ。一。盃。盤。を。威。辟。下。小。片。寄。り。其。頭。を。席
 儲。り。小。程。小。莊。人。の。憶。は。船。虫。を。送。り。來。て。目。門。頭。小。鵠。立。る。折。り。月。の。雲。入。り。く
 這。四。下。に。光。景。を。巨。細。ゆ。ま。ゆ。ま。を。碎。の。趣。意。外。小。出。り。訝。か。ら。ば。の。め。る。非。如。王。人

獵戶。も。信。る。地方。に。住。做。せ。り。要。る。ゆ。え。や。應。心。に。裡。面。の。容。子。を。と。後。に。這。疑。ひ。を。釋
 ち。あ。ん。と。い。ふ。阿。容。を。氣。色。も。ね。主人。の。案内。を。俟。す。と。裡。面。より。一。個。の。支。黨。が。邊
 へ。立。ち。出。り。莊。人。の。對。ひ。に。誘。を。馳。せ。案内。を。ま。れ。莊。人。引。き。隨。草。鞋。の。勿。解。格。で
 儲。の。席。小。着。程。小。酒。顛。二。も。亦。身。を。起。七。找。と。對。ひ。町。寧。小。且。を。長。途。を。勞。ひ。小。可
 則。當。家。の。主人。酒。顛。二。と。喚。ぶ。の。女。弟。の。必。死。と。極。き。あ。い。御。洪。恩。の。趣。は。目。今。他。が。報
 たい。具。小。美。知。仕。の。ぬ。兒。身。の。何。州。の。方。さ。ぬ。と。獨。行。と。ま。の。願。ふ。名。告。を。せ。あ。か
 尚。武。家。方。の。主。用。也。只。管。路。を。急。せ。あ。か。脚。力。の。あ。ら。と。問。ひ。莊。人。頭。を。掉。て。否。其
 東。國。の。浪。人。姓。名。大。川。莊。人。と。喚。做。ま。の。で。い。は。れ。比。り。故。あ。り。と。友。を。索。て。彼。此。を。提。摩。正
 一。檢。小。及。い。る。小。今。宵。憶。は。山路。の。荒。廢。堂。未。憩。ひ。折。那。樓。上。小。令。妹。の。綁。縛。せ
 ら。れ。為。体。を。る。刀。ひ。ま。の。故。を。ゆ。け。冤。屈。の。阿。責。小。似。る。宜。不。便。の。あ。れ。已。工。を
 ゆ。を。解。卸。と。請。り。隨。小。夜。と。共。送。届。け。俺。們。も。安心。の。を。ま。よ。り。今。宵。羊。夕。止。宿

奉公の原
官麻の原
後世傳
市中に在る
坂橋の原
奉公の原
坂橋の原
市中に在る
後世傳
官麻の原
奉公の原

致まも不測の縁曉有別と告んのも。其ま管ま且今妹を勅りあといへ酒顛二さひ
女弟の納戸のうら臥さく既將將息の術直あり節骨の疼む処の膏葉と打べとて乾
兒們まそのうと吩咐てひかあろの中掛ぬ他近曾嬭婦ふりしと見子ひちもひつて
去歳より這里召きたれも小可も亦妻子をけれ奉公せんといふ儘と小千谷の御を
客店へ炊妻よと遣せふ又有す死東人の殘忍情態の送恨濡衣を被せ殺さんと
せられぬ死むべし嗚呼憎むべし。あの日異日御長小告てせむかんとひら働さんて
漫々情も洩さんその長りの語で管待の後れり快夕饌もあせん準備せむと急
む悪棍輩のあつてせんせと莊八の遠く推林あてその矢い決て無用身其割
籠の飯の残すと昔の俵あつてその黄昏あたるべし俺們的の欲かば一房を
借りて睡んると推辭と酒顛二強難て小夜深れぬまある東西南北のさけられも然
ていのみ無造作へ尚もさけぬ籠もあれ心なる小鉄ひの盃を薦めまらん甲よし

よ不盤盤碗碗と洗淨めて装易くとのを莊八又林あて不其の生来沙量路の疲
勞のるあわられ只這依か睡のの喫ぬ酒も浮られて後夫を明えより遙か優る
管待まんのの矢と憑まらふかそとられて酒顛二頭と擡て然も固く辞ひぬ。有れ
あろお仕せむの倒て安札かめん急ぎぬの旅るの權且這里お留て古也遊覽を多か
折角小可御導と致ま。管待まはら夜とを既深れば就寝のあゆもふ。這里の
名も雪國なれば蚊と蠅と稀なれも。微雨の比屋棟裡より夜の只煙の落るありより
蚊帳を用い社校輩と南向の八席房小臥簟を舖て案内をせと吩咐て兩個は客黨
ろめてをる処蚊帳を無て枕と臥座と蒲團とより牛馬を莊八に誘を案内も考程
莊八の酒顛二歡び演刀と引提。馳て臥房入りまけり。

第七十七回 衆賊を盡して酒顛旅舎を脅き 内命を傳へて由元二客を招く

却説莊介義任の獨枕不就（あきらまじ）れども又身と起（おこ）て（た）要時（まじ）も睡（ね）む手（て）と又頭（あたま）と低（ひ）く吐（つ）裏（うら）も（も）這里（こゝ）の主人（あつち）の面魂（おもたま）一癖（ひとくせ）あべくええ（え）る小乾見（こせんみ）と唱（な）へ（い）二両名（にりやうな）も又獵戸（りやうこ）の模（も）様（さま）あわ（わ）の短席（みづか）上（かみ）ま（ま）り（り）一盃（ひとまい）碗（わん）の二箇（ふたつかん）とて具足（ぐそく）せ（せ）た（た）碓（うす）子（こ）入（い）唐山（たんざん）舶来（はくらい）の宣徳（せんとく）製（せい）の如（ごと）く（く）折敷（せしき）の刺（さ）り（り）會津（えつづ）盆（ぼん）東西（とうざい）皆（みな）輕重（けいちゆう）巧拙（かうせつ）の（の）あ（あ）た（た）も（も）疑（うたが）へ（へ）た（た）家の（い）寺（てら）院（いん）の庫（くら）裡（うち）不（ふ）似（に）く（く）在（あ）俗（ぞく）の住（すま）ひ（ひ）あ（あ）の（の）柱（はしら）斜（しや）に（に）壁（かべ）壞（こ）れて（て）檐（えん）も（も）夜半（よるぢゆう）の月（つき）ハ漏（も）れ（れ）る（る）酒肉（しゆにく）不（ふ）奢（しゃ）れる（る）為（な）体（たい）那人（にん）柄（がら）相（あ）忘（わ）れ（れ）今（いま）亦（また）臥房（ふしやう）入（い）り（り）て（て）る（る）小敷帳（こしきぢやう）ハ則（すな）ち（ち）萌葱（もうちゆう）の紗（しゃ）之（の）裙（く）縁（えん）子（こ）紅（べに）絹（きぬ）と用（もち）ひ（ひ）る（る）亦是（また）微賤（ゑせん）の東西（とうざい）不（ふ）似（に）く（く）蒲團（ふとん）も四布（しふ）の絹（きぬ）多（おほ）く（く）臥（ふ）草（くさ）極（ごく）老（らう）鹿物（しかもの）老（らう）枕（まくら）ハ古材（こざい）の所（ところ）株（か）あ（あ）れ（れ）ら（ら）あ（あ）ま（ま）り（り）推量（おしりやう）る（る）那（な）酒（しゆ）顛（てん）ハ山賊（さんてき）也（なり）兩個（ふたご）の乾見（けんみ）ハ支黨（しとう）を（を）ん（ん）向（むか）主人（しゆじん）ハ俺（おれ）と相（あ）く（く）武家（ぶけ）の主用（しゆよう）ハ路（ぢ）と急（いそ）ぐ（ぐ）脚力（きゃくりき）予（よし）哉（や）と問（と）ひ（ひ）時（とき）い（い）ま（ま）心（こゝろ）の（の）つ（つ）る（る）今（いま）又（また）以（も）つ（つ）俺（おれ）ハ懐（なつか）ふ（ふ）要金（えうきん）ある（る）故（ゆゑ）と竊引（せういん）る（る）ん（ん）此（こゝ）も亦（また）疑（うたが）へ（へ）た（た）女弟（によてい）と唱（な）へ（い）る（る）も必（かな）ず（ず）是（こゝ）賊婦（てきふ）老（らう）人の（の）為（ため）ハ生拘（なまが）れ（れ）那（な）荒廢（あらい）堂（どう）の樓（ろう）上（かみ）ハ敷（しき）き（き）れ（れ）て（て）あ（あ）れ（れ）ん（ん）俺（おれ）ハ思（おも）ひ（ひ）足（あ）ら（ら）む（む）。

他（た）ハ巧言（かうげん）と直事（ぢくじ）と听（き）く（く）慈善（じぜん）ハ仇（あ）と（と）思（おも）ふ（ふ）機萌（きも）ハ越（こ）え（え）頭（あたま）れ（れ）る（る）密（ひそ）に（に）所當（しよたう）を（を）由（よし）勤（きん）ら（ら）る（る）今宵（こんしゆう）の旅（りょ）舎（しゃ）口（くち）用心（しんしん）ハ優（あ）と（と）思（おも）ふ（ふ）と尋思（じんし）とハ四下（しよげ）を（を）小縁（せうえん）頼（た）の戸（かど）ハ足（あ）ら（ら）む（む）半（はん）分（ぶん）ハ圍（い）ま（ま）り（り）れ（れ）子（こ）刻（とき）比（ひ）の月（つき）光障（こうぢやう）子（こ）照（て）る（る）庭面（ていめん）ハ高（たか）く（く）歌（うた）女（によめ）の（の）声（こゑ）走（は）り（り）折（せ）進（しん）退（たい）好（こう）出（で）る（る）ハ便（べん）牙（が）と（と）思（おも）ふ（ふ）又（また）後方（ごかう）と（と）思（おも）ふ（ふ）短（たん）槍（しやう）竹（たけ）槍（しやう）桿（かん）棒（ぼう）を（を）の（の）ま（ま）く（く）美塵（みぢん）不（ふ）掛（か）く（く）わ（わ）の（の）邊（へ）ハ辛（から）い（い）事（こと）たる（る）裂衣（れつゐ）織（お）の（の）草鞋（くさじや）の（の）緒（いと）と融（と）け（け）て（て）い（い）ま（ま）る（る）折（せ）る（る）奥（おく）人（ひと）許（ゆる）さ（さ）る（る）譚（たん）ハ声（こゑ）と（と）れ（れ）れ（れ）莊（しやう）介（け）耳（みみ）と側（かた）へ（へ）俺（おれ）ハ不（ふ）信（しん）と（と）思（おも）ふ（ふ）他（た）們（ら）も亦（また）由（よし）勤（きん）せ（せ）て（て）閑（かん）規（ぎ）と（と）思（おも）ふ（ふ）熟（じゆく）睡（ね）む（む）方（かた）如（ごと）く（く）あ（あ）ぐ（ぐ）臥（ふ）く（く）字（じ）と（と）思（おも）ふ（ふ）枕（まくら）不就（あきらまじ）ハ介（け）程（ぢやう）ハ酒（しゆ）顛（てん）ハ席（せき）首（くび）ハ奥（おく）不（ふ）到（たう）て（て）御（ご）不（ふ）願（げん）れ（れ）る（る）支黨（しとう）と圍（い）居（ゐ）る（る）船（ふね）虫（むし）ハ酒（しゆ）と飲（の）み（み）と（と）思（おも）ふ（ふ）那（な）荒廢（あらい）堂（どう）ハ細（こ）め（め）ら（ら）れ（れ）る（る）縁（えん）故（こゝろ）を（を）尋（たず）ね（ね）る（る）船（ふね）虫（むし）ハ声（こゑ）と潜（ひそ）り（り）て（て）身（み）を（を）報（う）へ（へ）る（る）奴家（やつが）ハ若（わか）者（もの）日（ひ）毎（まい）々（々）ハ不（ふ）辨（べん）ハ假（かり）托（たく）と（と）思（おも）ふ（ふ）外（とち）ハ平（へい）ハ（は）雙（ふた）言（ご）と（と）思（おも）ふ（ふ）と（と）思（おも）ふ（ふ）故（ゆゑ）ハ箇（こ）様（さま）々（々）と（と）思（おも）ふ（ふ）裏（うら）ハ近（ちか）御（ご）下（げ）村（むら）多（おほ）く（く）聞（き）生（なま）と（と）思（おも）ふ（ふ）現（いま）つ（つ）折（せ）大（おほ）田（た）小（こ）文（ぶん）五（ご）と（と）思（おも）ふ（ふ）閑（かん）窺（のぞ）む（む）折（せ）の（の）趣（そ）と（と）思（おも）ふ（ふ）初（はつ）と（と）思（おも）ふ（ふ）小文（こぶん）五（ご）と（と）思（おも）ふ（ふ）比（ひ）より（より）小千（こせん）谷（や）多（おほ）く（く）客店（きゃくぢやん）の石（いし）龜（かめ）屋（や）次（つぎ）圖（ず）太（た）許（ゆる）逗（と）留（りゆう）。

去々風眼と患て無算にさうと其後撈りて。あれより船虫の假替女と做り
 按摩を執りて小千谷を徘徊せし程小文吾も召入られて近づく。近づく
 其示しと奴家を武藏小在り時故夫鷗尻の並西王那小文吾奴殺されり。その折
 奴家も捕縛され石濱の城牽り夜女不測入の資余より那地脱去りたる
 あり此五輪已前のるへ今余の折那奴と闕穴規より一より昔怨も不堪
 且ハ撃果して故夫の怨と復さんと必ありと身小報る快く取所あり昔怨
 厚くて新し情義薄とせられ初よりとて却余後とあはくは瞋昏
 小文吾も近づく他肩癖と敵と久かかれも那奴の皆目とえられ奴家と
 此も知る奥の便と召され懐刀と抜出し頭と搔んとする小幸も那奴も利を
 捉られて投伏せられて支成る折主入次園太が相計と神慮任小做さんと両個の乾
 児も侍せ奴家と馳入煙盡処る庚申堂幸と去て梁小吊り三人と出の随小

鞭責て翌の夜も天明後の夜も鞭責る。死を半隈河推論め罵誇り出で
 由の論勿論那小文吾奴もその身小記憶る。奴家と船虫もん欲と疑を主目の
 見えぬと便のよも。那儘と二夜を呵責小遇死。折申と那旅客
 其首小憩ひて半られ初め妖怪と。斬りけり。奴家と妙小の購め送られ
 かのまるとあれも没怪の事。那次園太小千谷の先俠御の杆城と做まの。蠟の塔
 よ塘崩れて這隠宅と観着られ。後の出。争何せ。用心あるか。酒顛
 ち多て眼と睜と巻と接りて。その安。椿事と石亀屋奴。俺知る。あ
 ども御史口と利。い。先。人。征。後。亦。自
 然の勢。温内。所。要。あ。塚。の。山。遣。遠。の。来。れ。他。の。火。家。這。里。小
 在。今。宵。那。里。推。蒐。て。小。文。吾。及。園。太。の。奴。們。慶。不。推。家。の。與。不。然。成
 復。ん。大。家。夜。入。の。准。備。と。敦。圍。悍。罵。船。虫。急。不。推。禁。を。愉。快。た。

其のさす随ふ酒類二なる下小きて春の比より這里もその日塚の山所用の
 正今朝未明よりなる原次曾のあわれ倒夜行を便利とて深夜かきまらる
 酒類三初ハ單身よりハ船虫と妻あせより又堂屋をなぐ取を囁ては大勢なかり
 とその間話休題酒類二折もよ方絶温内かたりとて遠く吸折つてや温内
 猝急なれ觀望意中と盡す違ふとて俺ハ今より大家と俱み小千谷夜今赴く亦
 俺がそをぬと現ハ仇のあつた飲料なり和郎の素より才覚あり心も悍たのれ今宵の
 留守と未なる事情を知りて後ハ船虫と云れり種子嶋の小鳥銃を懐きと
 出て這炮銃ハ北国ハ今宵稀る東西をれ俺年来秘藏と利をぬくと勘く
 今宵これを送り置て權且和郎は預て仇入來ぬとて火蓋を披て敷る留と辭
 甘く説示とてその鳥銃を遞与たま温内ハもあつたぬといふ隨ふ心とて言
 趣りゆめり言ふふれハ幾人ハ國ハ足ハ楯をな流らる安か不れよと云酒類二領

又船虫の信と留守の用心をのめ示しとて進め同惡と先ハ立しと出てハ船
 虫ハ温内と共祝と目送りのけ却説大川社ハ是より先ハ臥房也與酒類二領
 密談と聴くと約半响許間違ハ隔れハ護身囊を收めハ那靈玉の奇特なりけ
 船虫們ハ今宵その懐ハ御音く如く譬ハ五十瀬ハ御音石の人語を根未異る
 言詳ふゆえハ或ハ驚ハ或ハ歡ハ獨竊ハ也と俺ハ推量違ふと酒類二領
 賊の頭梁又俺ハ今宵送届けハ船虫ハハ妖狐奴ハその女房であつたを欺れぬ鈍
 ちゆハ然るとも小文五ハ當日故御還らると這地ハ旅宿するに必その故多ハ五
 稔以未索ても過さるハ大士の随一人ハ梯頃ハ這里より程遠くハ小千谷の御
 石龜屋次團太とハ客店ハ久ハ逗留考らる及風眼ハよるて王の克ハと云
 まも賊婦の口より洩せて今宵初て知るとなるハ奇ハ妙なるハ什麼ハくハせん衆
 賊ハ今より那里を襲撃ハ眼疾不便ハ大田の窮厄十ハ九ハ免ハるハか

かた下然ハ之俺身ハ目今那首潛寄之酒顛ニと船虫と揮舞ハ做するハ残
るハ鳥合の小嘍囉咸立地逃亡々大田ハ厄ハ釋ハれるハ不知案内ハ賊果ハ主客
勢ハ既ハ異ハ前後許ノ敵ハ受テ利を沁ハるハ亦ハ危ハ臨ハるハ所詮
竊ハ退シテ他ハ出テ折ハ紛レテ共ハ小千谷ハ到ラ向テ石龜ノ宿所ヲ知
ハ易クハ任テ那里ノ門頭ニ名告テ酒顛ニと數ハ捕ラ主人次團太四隣ノ市人志
ハ社仗ハ走出相援ケテ衆賊ハ俱ハ敷ルハ恁ハ做セト小文五ノ大厄ハ釋ルハ
ハ賊ノ根ハ斷葉ト枯レテ地方ノ害ヲ除クハ叶ハズト肚裏ハ分別既ハ決リ
潛身ハ起テ柱ハ掛テ草鞋ヲ取卸ハ穿締テ又兼塵ヲ九尺ノ短鎗ノを宜
ハ擇取テ小篠ノ両口ハ由現騒々早ハ劍刀身衣ハ縁頼ト出テ一及ハ
程ハ竹藪ハ躲ク衆賊ハ這果俟々ハ介程ハ酒顛ハ鎧短衣手申脚申鉄打
顛卷ハ脩刀ハ跨テ右ハ短鎗ハ挾テ器械合テ十四五石ノ支黨ハ後ハ從ハ先

ハ火急ノ隊配ハ大家急ハと逸足出テ走ル跡ハ其ハ鎧引提テ隊ハ紛レ
共侶ハ走リ折々五月ノ天ハ驟雲壓月ハ隱レ膝腕ハ酒顛ニ自餘ノ賊
音ハ莊公ト認ビテ只是火家ノ一人ト疑ハ此ハ疑ハるハ後而童子藩子
酒顛ハ石龜屋次團太ノ門頭ハ推寄来ツ門ノ戸烈ク敲カテ主人次團太快ハ
這里ハ宿セ他郷ノ旅人ハ小文五ハ死ハ復讐ノ為来ツ命惜ク小文五
索被テ推サ異議及テ圍宅ノ奴們一人ハ漏テ斫盡ス這里開テ諸声立
勢ハ猛ク呼ツ間近ハ臥テ奴婢輩ハ駭覺ツ吐嗟トテ怖レ答ハるハ登時主人
次團太ハ覺テ奥ヨリ走り来テ且戸節ノ間ヨリ来ツものハ現カ面魂皆猛惡者
通テ十六七名短鎗竹槍脩刀ハ余リ異形ノ打扮ハ緑林錦楓ノ儔ヲ
及テければ原來那假替女ノ同類ハ少知レ襲来ツ疑ハるハ俺ハ大田ハ
病眼ハ敵ハ争何セテ背門ヨリ落シテ尋思トテ音ハ絶テ縞ノ踵ハ旋テ大田ハ

八代傳ノ轉巻三



庄介

庄介



賊隊を紛れて庄介
衆賊を殺戮す

庄介

臥房不赴なり。然れば四隣の里人の共ニ驚愕するもあらず。賊徒の勢は害怖れて憊る折
 あり一人とて援あるもの多かり。既而外面より酒類二頻り不焦燥して憊るも心もせ
 り。逃げた欲寝惚れ彼戸を打破て稠入る。緩一と罵る。声共程は一個の意當准
 備の塩槍を振抗て門の戸を粉砕し打推して走入ると程必ひりきる。隊より大川莊小
 頭れ来て大喝一声閃光を鎗の刃尖に地上の電光瞬間に件の賊の腹下を突伏せて裡面は知
 らず。高安の犬田の主も驚く。大川莊小頭あり。面亭の賊は俺威殺さず。皆門は用心せ
 か。両三番喚りと駭噪。小嘯囉。又両三名突仆。勢は死猛虎を駭て群羊を屠る。不
 似る。向ま前を武勇の剽姚克くもあられ。賊徒は怖れて辟易。あれと云ふ。小嘯囉
 らのそぎる。ひかりける。光景は酒類二も亦驚愕。怒る声も響り立て。原来甲夜の
 逆旅武人。奴の同謀者。せありける。不意に撃た。故小を聊勝。小無ら。故と云ふ。言交れ
 知れる。狐客の鎗頭。いさむ。はと云ふ。快推包。て撃。留よ。と罵。將。され。支。當。然。又。莊。小。と

撃。ん。を。半。分。の。裡。面。に。稠。入。り。小。文。吾。の。次。圍。太。と。俱。力。を。ち。振。り。て。先。進。近。つ。賊。を。破。
 靡。け。難。休。せ。ぎ。逃。び。透。き。趕。立。々。々。門。頭。を。先。に。戦。ふ。る。の。向。ま。前。を。酒。類。二。と。鎗。を。闘。
 きて。一。上。下。と。樹。を。重。重。と。犬。士。の。武。勇。小。草。賊。の。當。り。う。も。あ。れ。酒。類。二。竟。不。腕。を。怯。む。
 ぬ。り。莊。小。の。鎗。を。反。揚。て。オ。ツ。と。嘯。て。是。を。刃。尖。の。牙。酒。類。二。吭。と。刺。串。れ。仰。反。
 仆。れ。死。せ。け。残。る。賊。徒。は。立。足。も。な。し。逃。る。小。文。吾。次。圍。太。們。又。莊。小。も。共。侶。に。這。首。小。趕。詰。那。
 首。を。撃。つ。留。最。も。烈。く。攻。め。け。れ。賊。の。屍。の。算。と。茶。糸。と。太。く。な。る。後。撃。た。れる。中。辛。く。と。
 脱。れ。廢。毀。院。の。隱。宅。走。か。り。小。嘯。囉。ハ。二。兩。名。不。過。け。け。の。登。時。大。田。小。文。吾。の。莊。小。も。声。
 かけ。絶。て。久。く。大。川。生。什。麼。い。ふ。七。俺。危。難。を。知。り。援。め。ひ。け。只。是。不。勝。の。勢。ひ。る。た。こ。
 の。又。莊。小。の。そ。く。走。り。近。つ。て。俺。が。來。歴。一。朝。小。説。書。と。云。ふ。小。文。吾。和。殿。の。頃。日。風。眼。を。さ。る。
 三。自。由。に。出。れ。無。電。で。在。る。と。云。ふ。由。も。似。せ。い。と。め。て。了。ら。れ。て。小。文。吾。は。い。ふ。小。生。は。い。は。い。
 也。も。酷。く。目。病。煩。は。茶。餌。の。效。も。な。り。し。や。な。く。心。づ。く。よ。わ。り。て。甲。夜。も。秘。藏。の。玉。取。出。す。

ね 念と病眼を拍ると半响小と目昏退死一皆小と明ると島夜小燈燭とる所か如く
 受ひき主人も報る違のわさる小夜盗大勢推鬼来と云とを尻起去主人と俱の草
 賊們を聊討捕ひたを答る間小次園太も処小立聚合て却其小名告すと其小飲び成
 演で又小争う定小由小敵也衆賊の夜小準備小毛加梅小客人小病て皆
 目小えあわね小い小もせ小必死の覚期小い小豈小大田の大人の眼病夜中小小
 可小進退自由のさう小友友達の折小此地小旅宿小も小賊小滅小裕云
 恰と小秋小壁言小小の小を柱小少小をこの口誼小姑小措て小小緊要の一説小
 其小料小甲夜小焦々の山路小荒廢堂小憩小折那船小公賊婦の梁小吊
 られ小半小誚小小の故と誚ね小那奴巧小賊小箇様小と小その細を解
 知小乞小隨小他小宿所小送遣小宿所小故小孤屋小廢院の跡小似小且船小
 兄小詭小賊の頭梁小酒顛小と喚做小其初小れを知小那里小止宿小

那當黒の密山設と具小渡り小疑心小氷解と那船虫小當初武藏小何佐
 谷の奸賊並四郎と妻をり小并小件の並四郎小大田生小敷小れ小這回又船中を假小
 女打扮と怨と復えと甘の漏を听小懐る靈玉小加護るんか徳而賊首
 酒顛二の這首一夜敷を推寄と妻船中新舊兩度の死と一時復えと護と既小
 急登時其也小不知案内小這所小賊と敷を欲えと他們と俱小千谷小
 到て石亀屋の門頭と猛可起と拉と賊首と殺一目か小と尋思と箇様小
 計と俱小を酒顛二又支黨も討捕小賊婦船虫小媪内小
 一個の賊と俱小留守と那首小方純酒顛二を敷小れ小必逃去と那
 奴の前度度まで草賊と夫婦小毒惡竊盜と大田生と害小と
 前後兩度小借る罪人小蛇と殺と頭と推小後
 患と送と似と這里小賊巢小半里許と誘と天も明小船虫を屠と

べ。や。快。多。と。の。と。の。山。屋。略。と。報。一。次。國。太。の。少。も。且。救。駕。且。感。下。類。の。耳。を。傾。け。り。就。中。小。文。吾。の。所。夕。毎。感。嘆。七。通。徹。妙。大。川。生。敵。と。知。り。已。に。知。成。る。進。退。の。度。不。當。ら。ぬ。是。兵。法。の。貴。い。所。計。略。感。ず。る。ま。あ。る。あ。ら。う。如。く。船。虫。の。俺。身。の。仇。の。ま。あ。る。大。辟。不。赦。の。罪。人。之。抵。言。て。那。奴。を。殺。志。し。只。御。道。を。通。む。の。ま。あ。る。辨。い。し。記。ら。れ。又。那。土。丈。二。卿。三。師。匠。多。り。石。龜。屋。強。盜。入。り。ぬ。と。傳。言。て。同。志。の。社。仗。十。名。多。り。と。敵。起。し。駈。催。し。六。尺。棒。と。突。立。々。々。天。の。明。る。比。来。ま。け。れ。次。國。太。小。文。吾。と。俱。ふ。土。丈。二。卿。を。勞。ふ。て。正。の。趣。之。説。示。し。和。郎。們。の。過。半。の。在。り。屋。の。人。々。と。共。侶。ふ。よ。と。御。長。の。報。指。揮。し。儘。く。衆。賊。の。尸。骸。ま。も。か。も。せ。俺。の。這。方。に。建。て。賊。の。隱。宅。へ。趕。敷。も。く。その。根。と。鋤。ん。と。思。ふ。の。ま。あ。る。と。論。し。と。裡。面。に。ま。り。入。り。逃。躲。れ。る。女。房。鳴。呼。善。井。の。婢。們。を。喚。出。し。又。示。ま。さ。上。の。如。く。多。配。送。も。多。り。り。介。間。小。文。吾。の。社。仗。と。先。立。と。賊。巢。へ。い。そ。く。少。次。國。太。の。卿。三。と。社。仗。五。六。名。と。て。會。後。作。り。と。二。天。土。跡。を。跟。て。走。り。け。り。有。徳。一。程。の。

廢。毀。院。の。酒。顛。二。隱。宅。の。淵。六。穴。と。喚。做。す。兩。個。の。小。嘍。囉。能。か。り。來。て。酒。顛。二。百。そ。の。他。の。もの。大。川。大。田。兩。勇。士。十。數。果。ま。れ。絆。の。趣。苗。様。々。と。報。一。船。虫。も。媪。内。も。只。眉。子。火。の。焦。る。と。駭。噪。起。て。立。て。居。て。居。て。計。の。所。所。と。知。り。走。る。不。如。と。尋。思。て。身。装。衣。の。臂。近。る。金。錢。衣。裳。腰。に。着。背。馳。走。り。共。侶。小。立。去。ん。と。は。折。船。虫。の。淵。六。と。穴。八。ま。ら。ち。對。ひ。俺。丈。夫。の。運。竭。て。火。家。の。人。々。と。共。侶。果。敢。を。數。す。ま。あ。る。と。數。け。ば。と。今。の。益。多。し。顧。み。大。田。と。大。川。奴。が。里。人。を。駈。催。し。と。多。く。あ。へ。推。し。上。ま。る。然。然。と。石。龜。屋。次。國。太。の。行。貝。殿。別。館。へ。許。て。馳。走。り。捕。ま。り。向。ら。る。べ。居。た。細。と。受。ん。と。媪。内。と。お。て。投。ま。り。落。て。ゆ。ん。と。思。ふ。汝。連。も。宜。に。東。西。を。馳。走。り。死。限。の。擔。造。り。て。家。火。を。放。煙。紛。々。何。処。へ。も。影。を。懸。け。ぬ。迹。を。通。む。の。ま。あ。る。種。子。多。く。慌。し。く。東。と。投。り。出。し。ゆ。後。邊。邊。後。媪。内。大。に。驚。り。袂。裏。に。懸。け。馳。走。り。種。子。多。く。鳴。の。鳥。銃。と。推。り。て。趕。の。あ。ら。ぬ。數。を。留。め。て。眼。を。配。る。不。敵。の。退。際。今。より。後。の。胸。首。

用もあつ合ぬ殺多柱の算盤絞と類草二轉變草急の一時退散五倍死引
残る二人連樂去て苦の世界九死如苦六瀾六と穴八算小告別明く天を不樂
は木樹の下層の路も死路と討めていそ死けり姑くしと彼此の茂林を離る鳥の声山
鼻遠くあつ引東の暗れ微雨の朝日向合社介小文吾と共侶小賊巢木近
三町あまの小亭り一時小文吾とええりて那媪内より奴の酒顛二預ける鳥銃を持
るらち入るとたま心へ竹筒面を立たると小文吾あつていそ去来忽然と自焼の
煙立并りて尾刺をさす喜まふ小文吾を信じて原來を船虫們が自焼と逃去
と穴八も取るに東西と皆擔造りて拾半の隱宅火を放ち却退して疑措る件の
重荷を擔い抗んとせし程小初の折れ擔索も断て東西皆滾出する火粉忽地燃
徒と焼失ぬくええりて二賊吐唾と狼狽謀引せんとあつ折二天士走の近づく那為

体小此百猶豫甘草賊等と喚破る声お驚鳴瀾穴八とさる小後後既と猛火
遮ら行て一歩も退くとさる前二天士立塞りて脱るやあつ此彼存一跪は
許さるあつち倍話ると二天士馳て蹴倒して解る擔索と檢合はる名數珠數系
細めて且風殺し牽りと退れ船虫と媪内們が往方と駁系と責問ふ二賊答て船虫媪
内もあつち早く東の方へ落亡る小可們の又箇様々と跡小送り一緯の趣あつち隨
首伏せ二天士三れをうちてその朽惜はる他賊は左も右もあれ那船虫を走さし能
殺と胆と採る憾何を異身死遠くいも下趕鬼と俱に敦圍死罵の折ら次
困るの卿王と自餘の社校們を従て走り着る二天士船虫們を逃るやと報知
あつ部とあつ趕鬼けりの中小社介の弟と這果も一個の社校小索と執七又瀾六と
穴八を責めて酒顛二船虫們が来歴素生と問か二賊の隠を正と説傳はる趣を逃
る招道者るはる日とあつち船虫酒顛二相計と破九郎と殺せりも又船虫が信

濃路より流落る酒頭三と夫婦多り一山内へ他郷を主小傷け盤纏を奪奪せ
亡命するものありも總て具頭れけ介程小文吾次團太卿云各々里の仕伎二面を後へて
る之方小立別れ船虫門の程さけ小権路熊徑岐道まよ山野の草木の隈のを食何地
のたけん程も泊着るまも早飯もたうべれ大家餓てから来りけの當下莊介又酒六が招道
あ御酒酒頭二船虫が計を磯九郎と殺せり井は温内が来歴も初て知れ縁由小文
吾次團太の報り大家の駭嘆とて送恨小堪さけ就中次團太の今船虫と獲せと
のま磯九郎の仇發覺て之入身酒頭二莊介も殺せれ是切りめりて又改めて莊介の
その飲びと瀧より徳而あるまあられ小文吾莊介次團太の生拘の賊團六元と卿三門の
牽一午の貝吹く比及小千谷の宿所へ還りけの抑件の團六と元八も年尚二十二あるべし團
六も身長高く面色白く小文吾も似る所あり元八も色薄黒くて身長高きれども
筋骨の逞しけそらり所何まき莊介も似らば夫燕石の玉も似る物牛の手は羊小似る

は物と相似てその體異人知陽虎の孔子に似るも又山猿の顔延之と何尚之に似るも只
是外面のそとと内心何と異なるが故に但貌よりて人と取れ聖といふも必謬那團六
と元八の天田大川より似るも亦比て知るは同語休頭再説次團太も小文吾莊介も相
似と小千谷の宿所さるる先二天士は饑と養の不便を薦めその管待大なる形井に生
丈二卿三門の仕伎のこの晩より這里より那首を赴ける發名も酒と飲飯と啖と留
守の首尾も向る然し士丈二門の晩より西隣の人々と共侶まき御長も報知の時程
まき件の始末と領主の陣屋を告訴せり有司速に到来と尸骸の實檢更記の賊頭
梁童子備子酒頭二の支黨も至りて鳥首と一と宣披る有頭末と糾問せり衆賊を
殺るる武勇の旅人天川莊介小文吾の帰來を宣く御沙汰あるを稟出よと見下知
あのと安らふるの事果て方纒還らせあはれと報る小次團太終て衆人の勞ひ又二天士を
件のよしと徳々と褒え知りてみづる御長の宿所は赴て二天士を束ねるよと又二天士を

隠宅之。瀧六八と云ふ二小賊と生物あり。趣を留様とて源述して這も許さるべしと
 憑てかき不比屋を市人許立ちて公堂を旁らた。快び演る。煩雜の事もあつりけり。
 余間小文吾の病後の浴湯剃梳して莊介と俱中安房あり。會話の數々ある。申す。單節即
 度之趣。又並四郎船中馬加日記常武。必忠許計あり。次の年五月。身と石濱に
 城内に禁錮される事。頭末并大坂毛野の。復讐の智略勇敢を折毛野の資力
 よと石濱と逃去り。依介の父文五兵衛と送言の。又親兵衛の。莊介も昭文の
 伊呂波嶋に光月を送る。浪華便船。國地。有馬の湯治。這地の
 遊歴二十村。閑生折原。牛と特め。小角力。磯丸。醉狂。狂死。身は眼病。靈玉。江
 妙心奇特の。も次第。本末。説。示。其。莊介。耳。傾。け。頻。く。不。感。嘆。の。声。絶。は。果。て
 又その身は去來荒茅山と離散の折大山道節と共侶の大塚大銅の往方と事にて

四國小渡り九州の赴京。棋五畿内。とら巡り。甲斐文州。折石米の。指月。とら道
 場也。大法師。名。の。あ。い。登。崎。照。文。小。面。會。ある。を。ら。は。始。と。莊。介。去。處。に
 春。不。又。四。天。士。と。索。んと。獨。指。月。院。と。武。藏。小。赴。下。總。と。徧。歴。と。行。徳。に
 里。入。大。田。の。今。末。の。り。の。文。五。兵。衛。の。安。房。州。也。身。ま。り。あ。は。と。知。り。て。常。陸。下。野。陸。奥。出
 羽。と。長。旅。宿。と。三。稔。の。光。月。と。過。せ。鳥。其。苦。の。頭。末。乃。若。這。地。小。來。つ。れ。も。多。四。天。士。塚
 大。塚。大。銅。大。の。遇。ま。の。甲。斐。の。石。米。に。來。り。て。又。道。節。と。替。り。と。思。ひ。に。れ。紋。り。と。暗。譚。時。と。相
 此。過。か。り。と。思。ひ。出。す。く。小。就。て。も。痛。す。と。西。郎。音。音。忠。死。義。没。身。の。單。節。と。薄。命
 存。亡。又。親。兵。衛。と。美。ま。く。有。や。や。と。思。ひ。耐。難。共。侶。の。嘆。息。の。外。き。ら。け。の。姑。と。莊
 介。又。小。文。吾。小。の。對。て。送。り。苦。行。の。甲。斐。と。和。殿。小。環。會。か。俱。る。石。米。か。の。面。で。
 大山。快。せ。又。出。る。不。と。大。塚。の。大。主。と。索。ぬ。べ。と。小。文。吾。領。て。の。議。定。の。あ。り。然
 る。老。の。ゆ。年。里。田。川。の。頭。も。果。敢。と。別。れ。大。坂。毛。野。の。亦。俺。們。と。同。因。同。果。の。過。世。あ。り。後

料りがさる。那折の辨急も、俺も、おぼろのあ。又相似る玉も持ると、辨向の違わりの
 まで、今や、送懐けれ、備後々まで、縁盡き、再會と候へる。と、長々、閑談、夏、日
 る。け、さる。短、と、横、日、影、下、晡、ま、あ、け、り。浩、然、と、次、固、太、い、遠、く、走、り、ま、る。三、大、士、小、ら、ち
 對、ひ、て、目、今、片、貝、多、御、別、館、も、執、事、の、老、臣、稻、戸、津、衛、由、元、大、人、の、使、者、と、て、杖、野、井、三、郎
 と、名、生、ま、る。一、個、の、若、黨、雜、兵、十、名、あ、り、の、後、で、轎、子、二、挺、と、吊、り、客、人、連、の、迎、へ、光、臨、の
 と、御、長、も、告、知、さ、れ、て、快、々、准、備、と、ま、あ、り。と、三、大、士、小、ら、ち、又、要、あ、る。と、俺
 們、初、も、異、姓、の、兄、弟、と、あ、り、相、別、れ、ら、る。往、方、を、知、ら、ぬ。と、西、面、三、名、あ、り、の、尋、ね、あ、り、欲
 せ、折、へ、何、の、未、だ、所、あ、り、領、主、の、執、事、と、對、面、し、て、互、々、推、辞、あ、り、と、の、辨、明、も、話、ら、ざ、件、の
 杖、野、井、三、郎、の、御、長、の、案、内、と、て、あ、り、と、あ、り、ま、あ、り、三、大、士、小、ら、ち、已、ま、ら、ぬ。と、杖、野、井、三、郎、對
 面、を、登、時、杖、野、井、三、郎、の、執、事、由、元、の、使、者、と、迎、へ、ま、る。口、狀、と、の、態、勢、演、ず、る。と、三、大、士、小、ら、ち、
 初、の、ど、辨、明、と、美、も、引、き、り、と、三、郎、聽、き、推、返、し、と、の、美、を、ま、れ、右、も、あ、り、と、由、元、が、私、の、使

あ、の、の、主、領、主、長、尾、殿、の、お、母、君、膝、服、の、大、刀、自、御、前、の、内、命、よ、て、御、長、心、の、美、と、奉、り、と、三、大、士、
 准、備、も、い、へ、姑、く、時、宜、し、後、で、那、首、小、村、に、あ、り、ん、と、公、私、の、秋、の、今、中、の、辭、退、と、及、ん
 と、三、大、士、推、辞、難、と、ま、る。俺、們、の、行、装、の、禮、服、も、明、日、衣、裳、と、敷、上、て、是、よ
 と、推、參、致、ま、す。と、三、郎、答、あ、り、と、の、美、も、由、元、豫、も、あ、り、と、三、大、士、小、ら、ち、あ、り、と、
 と、心、で、後、方、と、え、れ、兩、個、の、雜、兵、あ、り、と、精、好、の、袴、二、領、と、柳、箱、の、蓋、と、ち、載、て、茶、
 と、ま、り、と、三、大、士、ま、薦、る。お、井、小、文、吾、も、信、ま、る。と、懇、切、に、那、老、臣、の、招、待、と、返、
 へ、禮、を、い、へ、と、三、大、士、先、の、物、び、述、て、聊、退、り、候、件、の、袴、と、衣、を、刀、引、提、て、ま、り、と、三、郎、
 轎、子、二、挺、と、檐、下、に、早、寄、り、と、快、々、兼、せ、と、の、美、も、三、大、士、の、後、に、俺、們、の、千、里、獨、行、旅、と、
 旅、も、熟、考、の、の、然、と、る。も、美、路、の、程、と、這、轎、子、の、要、を、と、ま、り、と、三、大、士、小、ら、ち、あ、り、と、
 云、と、三、大、士、小、ら、ち、三、大、士、小、ら、ち、轎、子、ま、り、と、三、大、士、小、ら、ち、あ、り、と、三、大、士、小、ら、ち、あ、り、と、
 右、小、後、ひ、て、后、見、と、投、て、い、れ、と、の、當、下、杖、野、井、三、郎、の、生、拘、の、小、賊、瀬、六、次、八、面、名、の、細、め、と、る、候



九六

片貝の別館
 二大士捕
 捉
 らくやまの船



藤兼乗七跡より稲戸殿(初)て来よと雜兵四五名送り置て存才の跡に轎子此後小跟々たる
程の途より日暮る候而莊小文吾の片貝小刻り時那別館の門前を轎子より
出て引て老臣稲戸津衛の宿所を赴たる津衛の大家在家宰也威權あり死のされ宅
地いと廣多也後類も勘らば老僕若黨三四名も燭を秉て天士を玄關へ出迎てを依書
院(案内)も香茶の礼訖り時稲戸津衛由元ハ萩野井三郎と後へ出て天士對面
をその功を褒め武勇と稱且内命せし演て不盡に産ある主客の辞讓言果て津衛の嘗
献の爲と之稍も抗り上裏を忽地機と擲て寄れ兵共を喚り声の共廊下を貫き陰
より頭を捕り方三三名走草の後より組むる莊小文吾の何れを擧馬を牽く極
捕り投退々々雲葉時俱に挑りかゝる大勢をいれもせき弥々折果と押へ索と獄の
けり畢竟津衛の理不盡の天士之細ゆる事情の甚廢をそ次巻の解分を聽後か
里見八犬傳第八輯卷之二終

南總里見八犬傳第八輯卷之三

東都 曲亭主人編次

第七十回 北母自賞罰を恣ふを 東使雙を首級を賜ふ

復説莊小文吾の天士功あり賞と云は稲戸津衛の謀られて矢庭の榻捕られ
か俱小怒る声高き津衛は執吏由元俺們尙罪ある先よりと詮議して禁獄せ
るるの一言葉又句もその多き誑引を執りてとて甚麻なる故を武士不似げ
に鄙怯の舉動その情由ゆゑの教團に罵る勇士の憤激乱る長髪逆立て縛
縛の索もあつらふゆゑの眼光飛ぶ鬼と力士の舌を掉ひ糸綱小怖れての索を
取縮ら登時津衛由元ハ憶も嘆息の貌を改め恭しく天士より對して事情を正
げれば怨もゆるり理りぬるある其の本意ある便是官券君景春の父母公儀殿の處

分かれ。先ぞその意を説示え怒と治めて听ねり。抑寡君景春公二箇の女
 女弟中。比目足籠大刀自御前の女腹を御鍾愛候へ。第一の女弟武蔵州
 豊嶋郡大塚の。大石左衛門尉憲儀主。其妻を大塚殿と稱へ。長尾
 白石大石小幡の原憲実管領の四家老也。其角の勢あり。又その次の女弟を
 州同郡石濱の城主の千重介自瀧主の内室也。船場殿と稱ら。寡君の女弟より
 兩管領。船場殿と不和の後大石千葉の両雄も。志を運れて當家三の御方と
 今年前和殿の大塚中。法場と聞中折大石殿の家臣も。軍本五倍二殿上社平卒川
 菴八と初とて敷され雜兵助も。刺戸田河の頭也。陣番丁田進也。戦役の
 折属役仁田山平五が敷も捕ら。風声あり。大士の通て假首級也。実力二尺八
 喚做した。使者弟兄をけるも。當時大石殿より報あり。大刀自御前。知食
 又只六のは。大田生。次の年石濱の城内也。且開野より。假少女千葉の

家臣馬加大記の子鞍弥吾徒類也。采邑皆敷され。夜々竊小且開野と相資
 俱の逐電をす。這義も亦船場殿より。父母公任々と。現消息あり。く
 這里もゆえ。今も今番和殿們。小千谷の御多客店也。酒類二と喚做
 夜の強盗支黨も。一箇も漏さ。敷も捕ら。その癖。那御長が。ゆえ。佳
 而件の訴状。大刀自御前の商。這大田小文吾。浪人の。武蔵の大塚
 也。同惡のの。両三名と共。大石家の陣番。役幾名。射て殺。額藏。以罪を
 奪去。癖者。余後。又石濱也。馬加大記。敷も折。悪少年。相資。逐電。也
 の。又這大川。莊介。旅人の。必件の。額藏。ん。御高。大石殿。使。仁田山平
 五。來。折。那。大士。唱。悪黨。の。説。普。五。那。罪。人。額。藏。を。當。目
 同類の。資。助。と。法。度。と。犯。と。逃。る。後。大。川。莊。介。と。姓。名。を。更。め。諸。国。を。徧。歴
 去。つ。世。の。風。声。を。下。が。折。折。敷。も。同。類。れ。大。塚。犬。飼。大。田。を。と。

喚做まののひのまカ二尺八寸兄弟の俠客のひのま其頭の穿敷金の届く鼻首の
 名字相違せぬ主君の外と蒙りて面目を喪ひぬ是より後那奴們跡見れるが
 えおびて搦捕まき思ふ今に至りて便りなむの朽すくひを思ひて庄介の額藏を
 疑ひる一任れ他他們が強盗を敷く一の功をなすなむその苟且の小事に彼他
 借らざるも這里より捕まを遣りて搦捕まを難くせん庄介小文吾のその身の盤
 纏を奪れと大奮敷まある當夜の拵に領主の與せしむるが非如舊悪あはる
 賞る不足ぬぬのそが況況逆の罪人なるを其の美ふもて許さぬ速召捕て小文吾と石
 濱へ庄介の大塚へ牽渡遣りて那首の法度不儘一為唱両箇の愛婿の家風正
 く武威耀び隣国までも怕れぬ忽諸ふと走らせむ後悔其首小立かた快々
 準備せよと亦他古もき仰り某諫め稟まう御説のひも那額藏を喚れ
 小斯(東人)其登六夫婦の仇なる所敷上軍本と敷く一介の軍本五倍二の薄瘼ゆ
 當坐不死るその身の私曲とろくへ箴上宮六の弟社平并平川菴八們と謀
 合ふ額藏を派遣んと証を陣番下町進の箴上軍本を肩負ふより虚実の
 分明なるその故額藏の冤屈の罪不洗されて既不死刑を決りて那額藏の義
 兄弟大塚大飼大里と喚做ま勇士西三名を頼るその美を知らず憤れも許し
 ければ已とせ法場を開と必死の友を極ひり世の風声不聞えりあつて箴上軍本
 黨下由さ不敷れ奸曲邪知見致す所自業自得と云ふ故の年御主君大石殿
 在鎌倉をられたるの美も亦分明とせ玉石を辨むるのこれらに及ばぬ又日雨野
 いひ甘苗樂大坂毛野胤智と喚做ま智勇の少年他則千毒の老黨栗飯原
 首胤度が妾腹の獨子也胤度一家讒死の後相摸州足柄郡大坂村を生れ
 とも人ありて正可なり然るに大坂毛野が馬加一家を敷く果せし親の為胞
 兄弟の為怨を復せし又那馬加常武則千葉家逆臣とて城當時あるを發

當坐不死るその身の私曲とろくへ箴上宮六の弟社平并平川菴八們と謀
 合ふ額藏を派遣んと証を陣番下町進の箴上軍本を肩負ふより虚実の
 分明なるその故額藏の冤屈の罪不洗されて既不死刑を決りて那額藏の義
 兄弟大塚大飼大里と喚做ま勇士西三名を頼るその美を知らず憤れも許し
 ければ已とせ法場を開と必死の友を極ひり世の風声不聞えりあつて箴上軍本
 黨下由さ不敷れ奸曲邪知見致す所自業自得と云ふ故の年御主君大石殿
 在鎌倉をられたるの美も亦分明とせ玉石を辨むるのこれらに及ばぬ又日雨野
 いひ甘苗樂大坂毛野胤智と喚做ま智勇の少年他則千毒の老黨栗飯原
 首胤度が妾腹の獨子也胤度一家讒死の後相摸州足柄郡大坂村を生れ
 とも人ありて正可なり然るに大坂毛野が馬加一家を敷く果せし親の為胞
 兄弟の為怨を復せし又那馬加常武則千葉家逆臣とて城當時あるを發

何の事も稟まて御説は儘く二天士を捕捕てまゐらせ。され共小文吾の萬夫無當の
 勇士大勢をとり向ふも敷きまの言かへ下との美い仕りと直せば大刀自沈吟と智
 者の千慮も哄索術を。他們が衆賊を敷捕り功を賞め招寄せて帷幕の内力士
 伏置死不意に起て拵を捕捕ると易かかん努力浪しとせよと送る方き示さるる其
 此を奉り宿所退るる配りも。後のも謀りも大刀自前に向ふ雄々を。封内の訥訟を
 聴く政事多々今初めとせよ。這義もあててその理不稱を。且沙汰をせよとも某の家
 臣とて君と共茂方方きければ非法と知る。詭の計行ひ景春當所在る。絆徳海
 さかたえん。俺諫言も容れて罪もなき勇士を誅す。誹謗を免れぬ。合期せよと各
 位の只是幸多のさるる當家の與の不幸。這里より密使をせよと。主君に呈稟
 せよ。景春の母君大孝の事。はま今向ふ。這説を制めて各位に助と仰せよ。あ
 るが。左ても右ても勇士を微運救ふ由もなき。大厄難と争何せ。只是まの命運をた

此の諦めぬ。下と理の迫る。浪浪の尉難。理非明辨。疑ふ心操。俱まら。天士
 恨も解けて今向ふ。嘆息の外なき。姑と共介小文吾。是く大田何と。長あふ。腹腹の
 謙謝の公道を。まあれ。婦人の稀る。勇敢智計の。年来長尾殿の。鋒は強。一世の風石も
 搗鬼のあふ。けり。それも。優て有る。死執事の。忠信理義。明亮感。も。不餘。あ。武士に
 知る。ぬ。為。死。俺。們。既。執。事。知。ら。れ。罪。不。あ。は。れ。と。解。れ。も。聴。れ。ら。し。便
 是天を命する。又何の争も。死。候。の外。あ。ら。ず。と。小。文。吾。頭。て。い。る。趣。宣。介。の
 俺。們。不。幸。薄。命。や。性。と。あ。と。と。奸。人。の。為。不。這。身。を。危。う。せ。れ。て。一。日。中。安。ん。と。い。ふ。大。阪。毛
 の。外。の。外。の。燒。不。這。里。執。事。也。今。善。人。の。死。は。是。切。て。い。る。も。憾。所。大。塚。犬
 飼。兩。個。の。義。兄。弟。小。環。も。あ。ら。且。親。兵。衛。と。曳。中。單。節。が。存。亡。ま。知。り。も。大。山。生。也
 再。會。身。で。刀。下。の。鬼。と。戦。ん。と。過。世。甚。麻。多。業。報。を。心。か。ら。ぬ。わ。れ。れ。と。歎。ふ。思
 痴。る。覺。期。極。め。ぬ。と。覺。て。俱。臆。さ。る。色。を。由。元。ら。ち。對。て。言。う。け。る。教。諭。の。趣

具不兼知はるぬ十室の邑も忠信の執事ゆゑに知已なる豫より俺們が與不克枉と釋
まもその甲斐あり今さらふ又然むは由も多し多し頭を刎ぬに不測の植偶也の此に齊一
答てゆさびはる共眼を困てさ由元をさうちて嗟嘆不堪左見右見て通微妙は勇
士の覺期世の志氣あるめい誹も信をあらはれ今示せし俺が私密談多し洩しぬる權且
その身と禁獄と重上上の御沙汰の依り逢ふまは初てけを限りの別とらん惜ひしと
繰返して後方侍り。荻野井三郎とえうらそ罪人莊介小文五只兩葉時一室に閉籠置て
その時々不俺身みづら獄舎送る遣え和郎の殿兵共侶不緊し那身と成るべと
最嚴不吩咐て腹の殿兵兩名を留めて天士とち成らそ餘の力士の要きと身の
暇を取らふ大家退り出まけ。却説さる詰朝縮戸津衛由元は母のぞと出仕て。則
籠大刀自負昨夜天士と搦捕て獄舎不敷置るよと具にゆえわが大刀自負の
斜をたその配と稱功と譽てあふ件の罪人們の生拘る俣大塚と右濱の城を牽

去遣して那首で刑罰致させんとは必しも路遠ければ又容易く做ら加先度の
ぞ。又同類がゆきまて途絶大奪取する中へ外聞実義と喪つて這里でも誅戮し
首級と兩所遣走。快々首を刎る。と火急の下知由元此も推辞と氣色なく仰る
なりなり首級ぬき。餽らさるあ計いと愛す。あれども正五九月の異邦唐の武徳年
よ。佛者の説に因循せられて屠殺と禁さす。われ罪人を誅戮せ當家もこの義に
後ひいて約這二箇月の御先代より死刑のめと誅をゆいひん今五月の六次の月
まは候せぬ。林獄せられ何時まで置せるふと囚去つてえんか。居る時
障り小いかと告示と大刀自りちて宣示その受と忘れ然る具候人の折々獄舎
うち巡らして非常と威や。と攻を曲る老夫人の指揮の後由元ある果てを退
ける。目元の後由元のみが獄舎をうち巡らして罪人の病着ある。其茶と與る。と
中。小文五只。殊更不憐とて獄卒を威ける。莊介も小文五も初より呵責を受る。

たびの食も物足りて死囚牢中おるも他の罪人と一所不措れど苦いと必ふりなれば獄
 舎入りたる日より兩人共声喧れり。ののろまらさればその身はら獄卒們も病痾の
 所お欲とゆふぞと執事ゆえあて醫醫師と招き湯劑を與へて病息は雨多うかども
 茶餌の效驗あまなく。ののろまらさればその身はら獄卒們も病痾の
 勝どきおけり。時は関東より女塔建より。暑中訪問の使者到来して岳母娘大刀自各
 各土且の人情あり大塚より大石家より。今番の使者お立られし是義平戸田河の水中央力
 二尺八寸敷まれる陣采申田町進の弟とゆえ。丁由畔五郎豊実と喚做はぬ。又石濱より
 千葉家の使者馬加大記常武の妻戸牧の姪も馬加蠅六郎御武をありはる御武
 原千原氏也。自瀧の扈從多けり。常武一家敷かれ後才由縁はぬ。その只這杜校
 のまのりければ。常武の由縁お立られ馬加氏と目さす。是那禄半分ありて。近習
 頭おるされり。當時常武の没後お及てその逆意ありけり。と宣まめるはあらねど。他と一

味ののほろろれ今ゆふ馬加の苗跡を立ぬる。孝胤主の御沙汰を願ひせりと頻
 下傾け直せり。自瀧遂已とゆふ老臣們と評議の後千原蠅六郎御武。即便常
 武の迹とてその格式を并されり。那常武の下總より千葉孝胤の近習より。主小務行正
 あり。走を石濱の城におる千葉の城の爲体。詳に演説して仕へんとて。宣せり。漸々龍
 用されて竟小権臣おる。然れ件の奸黨。その苗跡を絶ぬ。孝胤主も大にと票
 せらる。故に現小人の過と飾りて。賢とま。自瀧是非の問お惑ひ。を。悔辯を受容る。
 智略もさす。と知る。人の問話休。程小籠大分。自大塚石濱兩所の使者。丁由畔五
 郎豊実と馬加蠅六郎御武を身邊近く。召寄て。兩個の息女達より。まおる。消息
 亦。那里の安否を。語り。却大川莊小。大甲小文吾。捕捕。符の趣箇様々。と
 送る。説示して。那莊小。大塚。莊官。甚。六。年。ん。か。悪。僕。也。あ。る。罪。人。多。う。畔。五
 郎。も。知。り。て。あ。る。小。文。吾。の。同。類。也。件。の。額。藏。と。奪。り。も。又。且。開。野。を。り。假。少。女。と



八尋人詳

八尋人詳



訪問起居東
使謁北母時
歡借公道復
私怨

八尋人詳

八尋人詳

竊小資^{ひそかに}けて馬加^{まが}大記^{おほい}親子^{おやこ}後類^{ごるい}と較^{くら}せりも他^{ほか}が所^{ところ}為^なる事^{こと}あり。あの日^{そのひ}當日^{とうじつ}蠅^{あぶら}六郎^{りくろ}がもつもせとある。今^{いま}は具^ぐの所^{ところ}も及^{およ}ぶ。他^{ほか}が連^{つれ}立^たて這^こ地^ちを來^きりて天^{あま}の冥^{みやう}なる。罰^{ばつ}のつら細^こか入^いりて之^{その}執^と事^じ稻^い戸^と津^つ衛^ゑは密^{ひそ}意^いと示^しし奇^き計^{けい}と旋^{まわ}ら。捕^{とら}捕^{とら}し最^も緊^{きん}系^{けい}。獄^{ごく}全^{ぜん}日^{じつ}不^ふ敷^しせしむ。前^{まへ}月^{げつ}廿^{にじゅう}日^{にち}の曉^{あけ}をうらた疎^その他^{ほか}們^らを活^かち。大^{おほ}塚^{づか}石^{いし}濱^{はま}の兩^{りゆう}城^{じやう}内^{うち}幸^{さい}處^{ちよ}とえん。路^{みち}遠^{とほ}かる尚^{なほ}中^{ちゆう}途^と也^{なり}。支^さの末^{すえ}をいふ。悔^{くわい}も及^{およ}ぶ。死^しを首^{くび}と刑^{けい}とて首^{くび}級^{きゆう}と魄^{はく}の優^{ゆう}とあり。尋^{たづ}思^しと易^{やす}くも五^ご月^{げつ}の間^{のま}に有^あり。以^{もつ}て昨日^{けふ}今^{いま}を黙^{もく}止^とする折^{せり}は汝^{なんぢ}連^{つれ}が主^{しゆ}の使^{つか}とて使^{つか}同^{どう}日^{じつ}ふあまけり。時^{とき}且^{かつ}延^{のび}せ申^{まを}奉^{ほう}あり。汝^{なんぢ}うもふれとられて勇^{ゆう}曲^{まが}豊^{とよ}実^{じつ}柳^{やなぎ}武^ぶの俱^{とも}は雀^{すずめ}躍^{たが}して有^あり。計^{けい}は大^{おほ}塚^{づか}石^{いし}濱^{はま}兩^{りゆう}主^{しゆ}君^{きみ}の美^みと傳^{つた}へり。一^{ひと}まはし七^{しち}飲^のびぬ。身^み許^{ゆる}かす。件^{けん}の額^{がく}藏^{ざう}小^{せう}文^{ぶん}吾^{われ}を主^{しゆ}君^{きみ}の法^{はふ}度^どと犯^{とが}す。罪^{つみ}戾^{とが}のこもい。在^あ下^{した}們^ら先^{せん}代^{だい}の與^{とも}も共^{とも}に遣^{つか}さま。能^{あた}難^{たが}言^{げん}敵^{てき}は。然^{しか}も知^しる。折^{せり}は。死^し使^{つか}ま。首^{くび}級^{きゆう}とあり。面^{おもて}を起^たす。奇^き妙^{めう}の家^{いへ}裏^{うら}今^{いま}初^{はつ}

ぬのさ。御^ご女^{にょ}儀^ぎは稀^{まれ}を武^ぶ邊^{へん}の御^ご差^さ配^{はい}千^{せん}萬^{まん}金^{ごん}の御^ご恩^{おん}も倍^{ばい}に感^{かん}戴^{たい}仕^しぬ。重^{おも}珍^{ちん}と稱^{なづ}へ齊^{せい}一^{いつ}額^{がく}とあり。汝^{なんぢ}の演^{えん}は。大^{おほ}刀^{たう}自^じ由^{ゆう}と。女^{にょ}木^ぎの善^{ぜん}言^{げん}を急^{いそ}げと世^よ話^わも。汝^{なんぢ}の汝^{なんぢ}の太^た義^ぎを。翌^{あした}の朝^{あさ}用^{もち}當^{あた}所^{ところ}と退^ひりて。東^{あづ}武^ぶ深^{ふか}れ。既^{すで}にその美^みと傳^{つた}へり。稻^い戸^と津^つ衛^ゑは。今^{いま}幸^{さい}時^じ這^こ里^{こゝ}侍^{さむら}と津^つ衛^ゑが。等^らと。當^{あた}所^{ところ}と。魚^{いさな}と。左^{ひだり}右^{みぎ}を。女^{にょ}房^{ぼう}の茶^{ちや}を。有^あり。世^よ果^{くわ}子^こま。存^{ぞん}一^{いつ}賜^{たま}ひ。恩^{おん}御^ご食^{じき}太^たを。汝^{なんぢ}の浩^{こう}祭^{さい}一^{いつ}個^この女^{にょ}房^{ぼう}目^め今^{いま}津^つ衛^ゑが。出^で仕^しと。次^{つぎ}房^{ぼう}の。倍^{ばい}に。大^{おほ}刀^{たう}自^じ由^{ゆう}の領^{りやう}を。俵^{はたけ}不^ふ樂^{らく}を。快^{かつ}召^{めい}れと。俵^{はたけ}と。喉^{のど}續^{つづ}の濱^{はま}を。浪^{なみ}の禰^ねの襖^{あはせ}引^ひ用^{もち}て。稻^い戸^と津^つ衛^ゑ由^{よし}元^{もと}が。生^な平^{へい}の替^かり。出^で仕^しの礼^{れい}服^{ふく}肩^{かた}衣^い袴^{はかま}の飛^と驛^{えき}信^{しん}の。濃^{のう}越^{えつ}後^ご名^な高^{たか}良^ら智^ちの入^い品^{ひん}。年^{とし}の齡^{ねい}八^{はち}百^{ひやく}也^{なり}。上^{うへ}に。七^{しち}ッ。八^{はち}の土^{つち}主^{しゆ}の回^{まわ}り。過^あり。死^し前^{まへ}遙^{とほ}は。同^{どう}候^{こう}也^{なり}。大^{おほ}刀^{たう}自^じ招^{まう}近^{ちか}づく。津^つ衛^ゑ後^ご御^ご察^{さつ}吟^{げん}有^あり。井^い小^{せう}文^{ぶん}吾^{われ}を。折^{せり}も。東^{あづ}武^ぶの。兩^{りゆう}箇^ごの堀^{ほり}連^{つれ}の使^{つか}到^{たう}着^{ちやく}。倍^{ばい}に。便^{べん}宜^いな。件^{けん}の首^{くび}級^{きゆう}と。齋^{さい}と。遣^{つか}り

好家裏るん快実檢入れよう。よそざされても介氣きさし仰は儘しく大川莊介大田
 小文吾両名の獄舎より牽出りて既に誅戮仕り然るが首級と御覽に入れ心で
 後方ぞえられ次房子侍りて西三個の童屋後あるは携出那二大士の首函不
 袂包と合は添く。由元九の左のふもどろ措て退ける登時能大刀自の件の首函と
 つらそを喃津衛備身今その面箇の首級とえられとも豫上の面と認りてのめろねど
 真偽を茲不定めり。その先丁田畔五郎と馬加蠅六郎とえせり。這人々の初より認
 りてはあらんぞ。いれりてあろをゆる。畔五郎豊実の執事由元九うち對且その所役以
 勞いで目今御前の仰のぞ。其の五ヶ年已前兄町進が額藏と拷問の折遭際七瀬窺
 志とゆへ聊認りていへり。蠅六郎御武も亦由元九うち對して其とも小文吾ののい
 といふけれども先代大記が宿所也。那假少女且兩野の舞舞る當晚小文吾も席上在り
 志とゆへり。遠外外と夜視多。今も忘れぬ。いへり由元九微は夫と其最宜死

證人へ各内覽と真偽をまう。あけのひ。とやそ西箇の首函と誘きとて終差
 寄られ豊実の大川莊介と牌付るを受取り御武小文吾の首函引る共侶益と檢
 遣り左見右見て寔是は記憶の那莊介小疑ひ。是は正しく大田小文吾。眉毛鼻
 梁年歳まで。曩も人々此も違ひ。句。畔五郎殿。蠅六殿。御邊も。咱們も。整
 定。句。錯誤のなれも。同是證據。よ。這們が所持は東西ある東武還りと披露の折の
 便宜いへ。然様々思意も同前。句。稲戸殿。這をその行裏より。東西の
 ひ。と。同。由。元。備。多。袂。包。と。ち。用。は。然。莊。介。小。文。吾。の。單。身。逆。旅。を。あ。り。包。裏。の
 有。り。や。知。れ。ぬ。と。介。る。所。望。の。あ。ん。様。と。あ。り。と。推。し。則。他。們。が。西。刀。且。た。多。と。合。出。り。て
 遞。与。ま。と。受。取。る。豊。実。御。武。の。れ。も。付。方。紙。小。牌。と。も。送。不。彼。此。と。取。り。て。共。侶。を。認。り。て
 約。半。响。を。り。御。武。の。り。膝。うち。鳴。り。と。奇。多。な。這。大。川。莊。介。と。牌。子。寫。され。西。刀。の。裏
 君。自。留。の。秘。藏。を。あ。り。小。條。落。葉。の。大。小。刀。の。表。装。寸。尺。些。も。違。ひ。今。より。十七。八。年。の。昔

寛正六年の冬十月粟飯原首胤度が嵯山逸東太を斬り折る中途に盗見あり
 嵐山の尺八と小篠落葉の両刀を奪去せり。當年其の十四五歳に冬ふり重扈
 従であつた。この二口の名刀を幾番と目も知らぬも觸るや、あれは今に至るまで
 但刀尖此の疵ありとの受り記憶の事ども、この小篠落葉の両刀千葉家相傳の東西あり
 あり、寛正五年の比あり、件の粟飯原胤度が鎌倉使に折那地を購求めて寡
 君おちわさる。これをもて人を破るは秋の成りともその四下る木の葉あつて、後さるあり、壁言ハ
 那村兩の名刀の抜けその刀尖より水氣出るといふ、似れ小篠落葉と名ける、小篠落葉の則刀の
 既、是金の雪條あり、落葉の件の特、おちわさる。これをもて人を破るは秋の成りともその四下る木の葉あつて、後さるあり、壁言ハ
 夕の安定る、ねとその他、證迹分明あり、額藏の社入、この西刀を竊取る、那盜賊の子なりや
 あり、首級と共賜と石濱殿、おちわさる。これをもて人を破るは秋の成りともその四下る木の葉あつて、後さるあり、壁言ハ
 なる來歴、演説、上坐あり、對しての執、言、豊実も亦小文吾の両刀を合抗て

大分と打
 大分と腰
 大分と物
 同、かた
 俗稱、後
 以て、見
 小、か
 録、り

合、大分と打、後方、由元、事、執事、知、御前、造刀、亦、内、小文
 吾、額藏の社入、奪、畏、逃、折、他、社、平、大、刀、職、分
 表、社、總、初、銀、蛇、鐸、上、字、同、彫、在、下、當、年、件、の、社、平、と、職、分
 同、僚、是、生、平、所、分、亦、小、文、吾、那、折、竊、取、年、來、嘗、か
 帶、る、ん、裕、と、云、住、ま、平、死、證、据、大、刀、も、真、賜、と、披、露、ま、及、主、君、の、執
 此、の、御、許、容、あ、れ、か、と、る、白、請、票、大、刀、自、領、此、彼、共、要、刀、さ
 昔、の、主、正、可、知、れ、出、処、分、明、と、疑、い、中、お、社、入、兩、刀、自、胤
 主、の、秘、藏、東、西、と、傳、い、不、測、の、會、計、首、級、と、俱、三、口、の、刀、天、塚、石、濱、の、兩、城、内、へ
 遣、さん、と、勿、論、津、衛、も、這、義、と、指、教、不、由、元、額、と、仰、け、お、倍
 三、口、の、刀、來、歴、あ、見、れ、恐、ろ、君、連、御、深、志、と、屈、せ、れ、最、も、愛、た、く、い、へ、
 首、級、の、厚、暑、の、比、れ、小、瓶、飲、酒、浸、と、流、与、さ、腐、爛、と、成、倘、道、中、宅、那、同

此を疑ひて。実事をとらんと。必中。駒と片貝。走らば。此彼と探問ける。その果して
 橋鬼。その件。の杜。小文吾。の大塚。大石。殿。千葉。殿。子。舊。悪。ある。の。事。
 片貝。殿。自。を。の。憎。ま。せ。り。て。坪。君。達。の。死。與。不。徳。地。崇。む。性。命。有。ち。か。ら。ん。と。い。ふ。
 此。の。由。を。あ。ら。わ。す。の。故。馬。を。ま。く。直。愛。ひ。て。その。嘆。息。を。う。た。へ。妻。の。嗚。呼。善。ま。し。と。報。て。
 士。大。二。騎。三。の。六。の。子。品。子。後。と。會。召。聚。て。那。二。天。士。と。救。ひ。と。る。に。衆。議。と。疑。ら。し。便。直。と。
 旋。り。是。より。の。後。密。に。執。事。の。家。子。便。り。と。未。也。若。黨。若。野。井。三。郎。們。の。方。を。あ。ら。る。届。
 役。中。の。人。情。と。言。ふ。小。文。吾。杜。小。罪。過。の。謝。ぬ。と。輕。せ。れ。ん。と。い。ふ。只。管。子。備。と。い。ふ。も。
 執。事。稻。戸。由。元。の。心。を。あ。ら。る。方。正。と。萬。支。私。あ。ら。る。に。け。れ。次。圍。大。が。人。情。と。叱。り。退。け。て。此。も。
 受。志。れ。ら。れ。若。野。井。們。の。属。役。も。各。々。の。職。を。守。り。て。賄。賂。の。路。と。ぬ。れ。次。圍。大。が。准。備。
 相。違。と。徒。事。と。あ。ら。る。切。て。獄。舎。食。餌。と。餽。と。二。天。士。を。薦。入。と。て。又。之。の。准。備。と。せ。れ。ん。と。
 杜。小。と。小。文。吾。の。死。囚。軍。と。名。け。る。監。獄。に。獄。舎。を。敷。設。せ。し。親。子。妻。妾。と。い。ふ。と。食。

餌。と。遺。棄。と。稱。せ。し。親。對。面。夢。中。の。許。され。け。れ。次。圍。大。音。術。計。喝。く。獨。頻。
 了。ま。隻。煉。の。も。必。中。日。屬。と。経。た。六。月。の。某。日。那。二。天。士。首。と。刎。れ。折。り。武。藏。の。
 大。塚。と。石。濱。と。あ。ら。る。兩。個。の。死。使。丁。田。畔。五。郎。豊。實。馬。加。蠅。六。郎。御。武。と。喚。做。せ。し。執。
 事。の。若。黨。若。野。井。三。郎。と。副。り。て。件。の。首。級。と。大。石。千。葉。の。兩。家。へ。贈。送。せ。し。と。て。丁。田。
 馬。加。の。若。野。井。と。共。侶。と。す。の。片。貝。と。辭。去。て。既。而。帰。東。と。赴。け。報。せ。り。と。い。ふ。次。圍。
 大。塚。馬。加。且。ち。歎。け。て。然。る。も。那。二。天。士。の。武。藝。勇。力。心。術。を。世。に。又。は。傳。言。と。し。後。傳。と。
 賞。と。功。あり。と。賞。と。給。せ。り。と。片。貝。領。主。の。姻。者。の。與。に。舊。罪。科。め。と。雙。て。首。刎。れ。し。
 片。貝。殿。の。死。計。の。執。念。深。に。女。伎。の。僻。事。と。ん。好。渡。莫。兩。所。の。使。者。の。迹。と。跟。趕。鬼。と。い。ふ。
 首。級。と。奪。取。て。死。後。の。恥。辱。と。雪。む。の。倫。豈。快。者。と。い。ふ。と。要。と。あ。れ。と。深。念。と。ん。士。大。二。
 駒。三。門。裁。名。秋。腹。心。の。杜。依。と。猛。可。と。衆。合。謀。一。合。と。大。塚。石。濱。兩。所。の。使。者。の。去。向。
 尋。ね。趕。數。と。し。首。級。と。奪。と。議。考。程。を。忽。地。障。り。と。い。ふ。と。本。日。と。空。を。消。せ。し。と。い。ふ。

既わく二日後れり。且火家の中異同ありて。衆議亦一決せり。一密山謀竟不救正也。中も似せり。案下某生再説。楢戸津衛由元。大石千世。両家の使者の萩野井三郎と連立て伴當。爲て東路。辞去り。その夜。女志念。それごと。妻子も奴婢も皆。睡り。獨家廟。坐。童子。更。聞。る。者。経。の。声。肅。然。と。せ。え。り。抑。由。元。が。家。廟。下。壇。の。方。一。間。の。板。席。の。又。その。下。の。土。窖。中。で。深。六。尺。許。多。へ。重。篋。を。て。造。り。此。水。氣。の。入。る。と。火。災。の。火。を。佛。器。を。斂。る。爲。し。生。平。に。用。の。所。は。あ。れ。外。より。出。入。の。の。ゆ。え。妻。子。の。外。の。奴。婢。們。な。も。れ。と。知。り。の。稀。なる。間。話。休。頓。然。由。元。の。夜。女。丑。三。の。比。及。子。圍。宅。の。め。威。熟。睡。を。る。と。現。知。り。竊。の。件。の。板。席。を。推。抗。し。令。除。去。す。框。を。と。り。と。敲。り。と。暗。跡。を。不。土。窖。より。階。子。を。登。り。推。續。す。兩。個。の。社。仗。出。る。是。足。則。別。人。を。大。川。莊。小。義。任。と。大。田。小。文。吾。悌。順。と。看。官。莊。小。文。吾。の。既。の。死。刑。に。引。れ。首。級。を。東。武。齋。せ。今。又。這。里。ま。の。人。の。と。の。あ。を。原。を。由。元。の。初。も。這。二。天。士。

義氣胆勇。その進止。とて。猜。ま。る。非。道。と。做。ま。た。り。の。あ。わ。は。異。義。武。藏。の。在。り。時。那。君。小。の。憎。れ。領。主。の。法。度。を。犯。す。是。已。に。と。ら。る。の。故。也。を。罪。ま。わ。る。之。故。を。引。合。て。矢。庭。に。擲。捕。せ。し。爲。獄。舎。に。遣。は。ま。す。於。一。室。小。利。籠。置。て。爲。又。思。慮。を。旋。ま。今。朝。二。天。士。の。生。拘。る。酒。顛。を。下。と。す。六。九。八。と。喚。做。去。小。嘍。囉。の。面。影。を。身。材。年。庚。終。に。莊。小。文。吾。の。室。も。違。は。ま。り。片。れ。に。竊。の。件。の。兩。賊。の。面。影。を。飲。一。声。と。喚。く。却。二。天。士。の。單。衣。を。被。せ。る。曉。々。の。死。囚。牢。に。遣。は。ま。り。獄。卒。們。の。六。九。八。を。二。天。士。と。名。も。る。亦。由。六。九。八。と。詰。目。す。聊。の。の。こと。を。い。ふ。只。是。病。病。の。野。爲。る。ん。を。茶。と。し。て。飲。せ。し。も。その。声。の。く。喚。果。て。馬。脚。を。露。去。破。隙。を。れ。真。偽。を。知。り。の。る。り。後。而。六。月。の。中。況。ま。ま。と。大。石。千。世。の。使。者。豊。實。と。御。武。各。主。君。の。使。と。く。同。日。の。あ。を。大。刀。自。則。由。元。と。二。天。士。と。斬。れ。下。知。せ。を。

由元の辞をきくと、馳て園六九八と獄舎より牽出さして、即便頸を刎てけり。只その機密を
 知るもの、若黨、荻野井三郎と腹心の老兵、西右衛門過、これらも、小文吾の誓言を聞き
 きて、緊く口を封じ、後々も洩さざりけり。然れども、由元、那豊実と御武が疑ふに、
 わん夜と、思ふも、庄介、小文吾が両刀を添て、実檢の備へし。豈憶んや、庄介が晋
 刀、昔年、粟飯原、胤度が、麓山、縁連、を敷き、折並、四郎と、船乗、馬加、大記の、密意を
 宣して、大奪田、各て、逃亡したる。小篠、落葉、の名刀、又、小文吾が、帶る、刀、庚申、塚の、法場、を
 犬飼、現、分、捕、る、籠、上、社、平、が、大、刀、を、現、れ、を、庄、介、小、文、吾、の、親、の、記、を、
 雪、修、條、の、刀、葉、の、西、刀、を、と、る、る、一、久、則、れ、を、信、乃、の、讓、り、ぬ、介、後、五、大、士、
 又、荒、芽、山、を、立、退、く、折、信、乃、亦、これ、を、小、文、吾、に、贈、與、し、り、り、小、文、吾、これ、を、腰、に、放、
 きた。その、刀、を、搦、捕、られ、夜、艾、庄、介、が、兩、刀、と、共、由、元、の、身、を、落、て、絆、の、み、及、ぶ、然、と、
 知らぬ、豊、実、も、御、武、の、件、の、刀、を、各、記、憶、あ、り、と、些、許、執、疑、の、心、も、那、假、首、級、を、直、大、と

ある。その、監、定、の、請、で、由、元、が、謀、り、所、十、二、分、の、行、れ、大、川、大、田、の、西、男、士、の、萬、死、と、い、く、一、
 生、を、保、ち、て、這、首、を、願、れ、と、り、由、元、が、賢、く、愛、と、竊、み、の、君、の、非、を、補、ひ、誠、心、の、致、す、所、
 の、い、も、あ、る、と、い、ふ、由、元、の、初、も、家、廟、の、供、ぎ、茶、頭、飯、菜、及、住、持、物、の、果、子、ま、も、日、毎、の、寄、内、へ、
 餽、下、し、と、二、天、士、之、類、い、れ、ば、庄、介、も、小、文、吾、も、二十、餘、日、お、及、ぶ、と、い、ふ、只、這、勤、の、
 る、土、害、の、席、と、重、布、で、火、盤、あ、る、茶、器、も、あ、り、炭、の、折、々、袋、を、斂、と、密、々、餽、り、と、二、天、士、の、精、
 久、く、土、害、在、る、之、地、氣、と、受、む、介、も、盛、夏、の、折、れ、土、中、の、樹、清、涼、老、暑、熱、と、忘、る、可、れ、
 此、も、恙、あ、る、と、い、ふ、安、ら、く、身、を、有、ち、り、あ、ち、是、作、者、の、自、注、也、庄、介、小、文、吾、が、死、し、復、世、の、
 見、る、禍、福、凶、吉、説、く、と、都、て、右、の、如、く、看、官、善、惡、忠、報、の、違、ら、う、と、い、ふ、一、間、話、已、訖、紹、
 前、説、庄、介、小、文、吾、俱、の、害、内、より、去、り、由、元、より、對、ひ、今、日、之、恩、再、生、の、報、を、演、
 示、し、今、の、心、安、れ、大、石、千、葉、家、の、西、東、使、の、鐘、櫃、を、首、級、と、藏、め、け、小、文、吾、が、立、去、り、
 示、し、今、の、心、安、れ、大、石、千、葉、家、の、西、東、使、の、鐘、櫃、を、首、級、と、藏、め、け、小、文、吾、が、立、去、り、

去向ハ信濃路を歩み御邊の潛出快投を赴かば柳今番其の秘計の御邊の
 與のるに俺が老丈人の死辭事竊小あは補ひて幸なる勇士を殺すと逆あふまうて
 昔者唐山東海の孝女の如く宛枉に誅戮せられ三檢早殿の祟あつた然してあれ賢
 宛げきまされ殺まされ天神地祇俱に怒りて吾國禍を降せ和漢先蹤最まら今
 何れ数ふ不逞を處へ其這を多ふも竊御邊を救ひて知他余厚く主
 君の忠を後世評するはあん致す由元を知りては賢を宛は幸の幸恥
 此を殺まされ君の過を補ふ忠も義も是某職分され俺が私を行公道を
 喪ふ小の疑惑の一條あり大田生の腰刀大石殿の家臣より簸上社平は刀を丁
 田畔五郎豊実が認めと信々といへるを那社平と殺され折分捕さる小あんと猜はる
 猜せかとも大川生の両刀昔年千番の家臣とせ栗飯原首胤度が笠山逸東太は為
 枉折盗見あを竊去る自胤主の秘藏の副佩小藤落葉と名けられるその大小の刀は

十八九年己前胤度鎌倉を購求せ自胤まらせよその美もの大川生のをを
 今も腰不跨ひしに付麻傳來とまらしと問れは小生を両刀亡父大川衛
 士則任が記之父則伊豆人の堀越神所の莊官より諫書とせり外は自ら目殺
 多る軀を家財を籍られて當日没官せられその折件は兩刀も那籍中にある官物
 ろのあはれ小後母ののれれ小耳を留めて記憶す父が枉死の晩生五六歳の時や七才
 ろのけの比母の旅宿せよとて晩生大塚を莊官甚六の小廝せられて年来那
 家仕へると東人甚六夫婦の仇を報上宮を殺果せると禁獄せられ首を刎
 られんとする折大田とて異姓の兄弟甲乙を極取られて死をうると折折身寸
 鐵をけれ大塚信乃成孝が晩生とて讓られ兩刀の父の送愛を寸尺表杜衣家の紋刀
 尖ふ此の疵ありは縁せ不違はれ秋に受て五年来一日も腰不跨をるその回を傳

舊義素懐の慙ふ不勝の欽ひ察しぬと其の橋ありし大川の深き情の渡津
 衛道て別々八百日也越の長濱長く夜天を明る惜とけり莊介のたごとく少佐
 坐る感涙の進む眼包とあつたる原來執事の拙父の弟子でまはし三親の世とまぢり
 比の才寒暑を覚見ぬその弟子も朋友も少知るるありし家傳の刀は來歴る
 不測の執事は素生を説諦され亡親を再會見し心地く舊故の情も堪さ然
 依舊縁の中にも執事の徳誼の高は唐山漢の高祖の時季布と久く金藏と
 竟る漢の良臣不做を朱家も優まは錦の上は花と添る心操を有さけれ晩生
 尚幸の良ま仕て一軍の大將と奉り料らる長尾殿と鋒と交るる中へ為る三舎を退
 く伊豆の三嶋箱根権現當國を弥彦の神も捨去照臨あれ這義お甘く
 りぞと推言勇士の心の誠小文吾も亦感激して小生只次因太と使者きたる
 執事其の言葉使る折にあつた俺身も初お倍と憑く泰くそいれぬと公由元

額と拍て二兄の賞美の分は過らる某のそ當らぬ跡て又一議あり向も既の亦せり如く
 各の両方の首級不添て老夫人の実檢不備へ那豊実と御武傳來と演證据は
 為るまゝ賜りての長夜只返され大田生の甲刀のそ這里在り大川生の両刀と是先
 考の記さるそ最惜と以ぬ世の常言も所感空の身の差替と不中得失は皆
 時とて諦めぬり十萬金の刀力も命も易く東西あるとのひは袂の包に四口の刀を
 取半く這三刀の新刃も鋭味は皆見ぬ願ふれと受收も跨て竊に立退の亦薄
 義の心も這一包は黄金十兩盤纏の為不贈りまわさるで笑納あるか這他其預
 置る兩箇の行装も這首おありあろ徐に身装束と曉るけり此の門戸の夜中不通氣
 とも曉七鼓より木夾あれ入るもゆるいと易く木夾も亦這首おあり留別の不中甲夜より
 竊に準備とあら酒菜もとも復遇が別惜む寸志おそとひのちも匣の内
 上の盃銚子兩三種の館も共取半く酒中を薦めける登時莊介小文五只刀を受る



夏歩むればまことの
水うみ 氷くゆき
と風と波は
かゝる

大正八年八月

九

文楽堂蔵



大正八年八月

文楽堂蔵

大正八年八月

大正八年八月

金と取り送る曲多由元の心配りの故に寧ろ演説りて其介が又のける貴教の
 ぞ。那両刀の親の記でいへ。這身を俱に惜けぬ。既に入るも渡りて今も香入る。備折を
 ぬ。那両刀の復をわ。便り不跡で這刀を返す。まうんとを以てこれをもあふく。し
 金を賜ふ。あふく。よ。小文吾も亦さう。小生們のその裏の内貯祿の盤費あり。且小
 生が腰刀の箆上社平が大刀を惜けぬ。足取東西を大川の刀と共に。賊物せられ。ハ
 送恨る。あふく。武運竭去。又那刀のあふく。金子の推辞。あふく。由元が
 あふく。頭と左をうち掉りて。幽金の交り受る。授る時宜に依る。介意あり。後ま
 快らばあふく。枉てあふく。受あふく。官薦めて已ざれば。二天士竟に推辞。受戴
 共侶は行裏中。修めけ。徳而孟遣替。既の敷献。及程。鶏鳴。忍地。曉を報
 別。促を。由元。潜と立。縁頼。隠措。二其。管笠。雙。草鞋。其。小文吾。流。草
 せ。二天士。感佩。述別。生。而。刀。跨。行。裏。駄。以。一。縁。頼。立。草

鞋の切も。多。締。び。那。木。夾。右。不。合。左。不。甘。官。立。引。提。て。庭。門。其。由。元。ハ
 唯々。憐々。と。各。異。と。祝。と。目。送。り。け。り。介。程。の。廿。介。小。文。五。只。那。木。夾。を。て。二。の。城。戸。と。障。の
 正。と。出。て。程。の。天。の。の。と。明。け。り。あ。至。る。野。鳥。の。籠。と。を。れ。心。地。と。由。元。の。鴻。恩。徳
 義。と。且。感。且。走。程。の。而。入。竊。小。相。譚。を。稻。戸。執。事。の。慈。善。を。二。個。の。頭。と。續。き
 と。武。士。の。の。の。而。刀。と。仇。の。為。不。奪。れ。賊。物。を。と。り。て。死。を。ま。た。ず。恥。辱。を。那。兩。東。使
 丁。田。豆。実。馬。加。御。武。と。の。奴。の。の。朝。片。見。と。立。去。り。あ。れ。と。一。宿。の。遲。速。之。夜。言
 續。て。趕。鬼。の。途。を。遭。ぬ。と。や。あ。伴。當。共。不。敷。留。て。俺。們。の。而。刀。と。復。と。後。ま。そ。甲
 斐。の。石。木。赴。く。べ。れ。他。們。を。去。向。信。濃。路。を。ん。と。れ。れ。と。あ。の。と。誘。い。を。べ。い。そ。ん。全。示
 合。し。う。饑。う。雁。鳥。立。鳥。と。一。勢。以。老。齊。一。走。る。壯。夫。が。汗。を。汗。六。月。の。炎。暑。を。撲。ぬ。血。氣。れ
 早。約。の。日。の。大。道。三。十。六。町。一。里。十五。六。里。と。飛。ぶ。が。如。く。不。趕。う。け。話。分。兩。頭。信。濃。路。岐。嶺。高。峰。の
 雲。を。た。て。あ。ら。ん。人。と。か。分。を。旅。宿。の。幾。夜。勢。事。の。廿。と。今。は。話。續。け。の。傳。へ。夏。寒。の。諷

訪の太潮風渡る。浮寝の鳥と尾と相ら。羽も枯と世と不樂の世も棄れ。野の
この道里は雨個のとも見あり。路の傍の塘隈の下木枝折背く。伏小屋の徳家は世欲門
田の高来秋水草織做。菰簾甚屏風。合壁現浅き。虫の父とも鳴き。木は
帯の中も悟負。那寒山子拾得。似て非人。人不知。知られ。中五個の乞馬。年齡を
四十許。藁の一足。あねも。故疾多。一足跛。さ。鎌倉寒見と喚。做。たり。又一人。少
年。之。襪。襪。多。の。夏。衣。麻。秋。生。須。須。蟬。の。羽。素。肌。の。衣。通。り。身。の。皮。醜。く。相
摸。小。猴。子。と。踊。り。憐。而。は。這。西。個。の。見。見。這。里。と。徂。徠。の。旅。客。と。諏。訪。の。社。に。詣。り。入。の。神。お
ん。と。候。程。不。這。日。も。既。不。往。還。稀。多。土。旺。半。分。の。日。午。臥。疲。倦。言。ふ。鎌。倉。寒。見。と。是。處
壁。どう。ち。敲。き。や。喃。鄰。の。相。摸。小。猴。子。よ。午。あ。り。一。不。東。西。欲。く。ま。や。け。ん。と。朝。も。申。る
く。世。ひ。錢。と。父。餅。も。買。て。啖。ま。く。足。が。立。六。例。の。如。く。里。へ。折。折。憑。む。と。公。小
猴。子。の。點。頭。て。を。あ。る。は。く。ま。け。れ。尚。五。六。文。拵。ゆ。ね。各。飯。料。不。足。ぬ。人。你。の。全。身。肥。満

膝膊で病氣もさく。腰の立板。甚る。故七角力の怪我。秋蛭見の神と祈り。過せ
去。出。示。飲。と。向。け。呵。々。と。ち。せ。大。へ。鎌。倉。寒。見。見。の。舌。ち。鳴。り。く。噫。又。打。誦。て。賜。る。よ
俺も初。鎌倉。あ。て。油。を。流。せ。米。町。多。某。甲。屋。の。小。官。人。阿。乳。母。日。金。七。百。育。れ。懐。多
老。て。く。一。た。癩。が。失。れ。高。賣。の。精。進。物。も。嫌。ひ。と。十。六。七。の。春。秋。も。大。磯。か。ら。化。粧。阪。雞
足。蛋。の。四。角。と。月。の。歩。晦。知。る。の。嫖。蕩。遊。樂。五。間。と。口。の。庫。布。傾。く。ま。ま。春。り。の。使。ひ。も。足
ら。ぬ。又。不。賭。鈔。と。耽。り。親。の。東。西。他。の。東。西。と。借。倒。し。身。又。倒。し。音。あ。亡。命。久。離。せ
られ。彼。此。と。二。宿。寓。り。の。歌。舟。也。先。毎。衝。流。され。磯。も。着。志。山。拵。は。相。根。で。雲。介。志
た。折。薄。情。之。便。毒。踏。出。骨。膝。と。長。樞。を。昇。れ。を。瘡。か。生。ま。歩。ぬ。二。足。三。文。の
錢。も。金。も。憎。れ。坐。行。を。見。ま。り。親。の。四。割。を。子。で。子。小。あ。血。と。甲。斐
を。ま。れ。汗。蟲。汗。小。針。ま。り。身。の。垢。脂。の。草。津。湯。治。か。さ。下。の。這。里。雨。居。の。山。住。以。伴
ふ。の。の。篋。卷。薦。小。猴。子。と。俺。と。只。二。名。經。讀。む。志。も。あ。れ。心。細。け。は。憐。愍。と。往。還。死。る

袖小乞ふ行状仍て件の如く却又和郎のいづる故小宿るとまをりふる年の二八。十五計
 正七十九文揮取小まをも賣かぬ谷止も醜く金指も磨給て美服被せて人肉經紀宗
 太小を奪て六梅橋九牧と名づく箱根で遊姑王鞍馬で遊那王僧正坊でも辨慶でも観文も
 標致もあらまゝ然とて鮮せぬ奴龍陽もこれ口説ても情も老糠も釘きと七元も
 生ハ奈何と向ハ小猴子ハ冷笑して俗も軽口不系足は連者であるるハ男子二足ある可
 急終浮世は陝布のむかひ合々竹柱狗見の産室も異るぬ寐物語も身の懺悔の益
 るたるがらう後まといふ谷河の流れを共飲むる暑熱を凌ぐ相宿那の二樹の蔭も他
 生の縁入のうけあふるのふせて七癖八歳見も痛積九よりも七奉公とちい香ふ名も身
 於俺昔里小田原老年期猴子初も小銭竊ま買啖ひ使のふ子湯のふ由園子黠
 焚蠟薩摩羊飯鮓醴酒柿密柑大福ら論健吹老何で四文と摺購盡了夜拾
 舗公常花主と名れ義理救動もまが高手小鬼と搦做ひ日毎東人主實目視

醫羽め捕入む吉貝御錢の置所校袂と共侶を遊びけり。日來の横着有俱吟味より備
 輩の猛可子尻と割禪と結着方一分金刺縫緑棉衣の松坂も伊勢より以り得也。這
 身這儘脱糸宮同病相憐む。友連誘引て食の用端五十三驛六十日百會押
 是及管立立ハ益を安の同約三名叱り親も東入るの已隨多腰戰飯ハ柄杓一本刺
 薦一苞餅ふてあまかりる雨還り後れて野計先公をて端を赦免は漏れ俊寛
 似る艱苦心より信濃二東流落て露宿宿明走袖の縁起ハ通て日足すと噫鈍すや
 虚々と口を咤目してあま腹ハ北山南の町走一末と東西吹ん錢をかくね餅買て東有
 秋ある秋と毎薦の間よりまを差出せ六鎌倉寒見の遠くハ白梅桶を傾けて金も憑む
 と七八文徳とまを受取の相模小猴子ハ南を投てをけり休題再説大石千葉兩家の
 使丁田畔五郎豊実馬加蠅六郎御武ハ長尾家より添られる枝野井三郎と共侶ハ夏
 別館と立たて歸路を赴けり日より那假大士兩箇の首級ハ箱戸由充の助言の隨深

の趕着る一宿の後、諸士以上、俺們的執事、謀の若黨、肩を比て、この這
里まで来たれば、後安ら、折る酷暑の、日午、更、有、敷、系、疲、勞、の、事、あ、ら、な、い、且、俺、們、伴、當
も、後、れ、る、が、よ、ろ、れ、ば、雨、時、湖、水、の、頭、を、汗、を、納、め、も、よ、め、れ、ら、し、譚、ひ、も、程、果、一、湖
水、向、ひ、る、塘、隄、の、頭、に、茶、屋、あ、り、る、遮、日、の、葎、笠、を、折、続、り、る、内、中、も、外、中、も、登、見、あ、る
の、茶、博、士、六、昏、飯、た、る、宿、所、か、か、る、あ、ら、な、い、寂、寞、と、守、る、人、な、ら、な、い、豊、実、も、御、武、も、却、已
べ、あ、ら、な、い、共、侶、不、找、入、り、て、登、見、一、尻、ご、ち、掛、け、有、一、湖、水、を、眺、め、ら、し、這、時、ま、の、後、ま、を
あ、ら、な、い、あ、ら、な、い、伴、當、馬、加、の、若、黨、と、二、領、の、鎧、櫃、を、擔、び、る、奴、隸、続、て、石、の、三、這、們、か、ら、
か、茶、を、汲、と、り、主、中、の、唐、め、の、身、も、喫、て、割、笠、を、披、ひ、て、啖、み、あ、り、け、り、當、下、馬、加、御、武、を、跨
た、る、刀、の、柄、を、拵、て、丁、田、生、の、這、名、刀、を、何、と、よ、め、ら、し、ひ、ぬ、日、片、貝、殿、の、御、前、也、其、已、小、京
せ、り、如、く、小、竹、條、ハ、甌、小、雪、竹、條、あ、り、波、浪、葉、け、刀、ハ、人、ハ、研、り、と、四、下、の、樹、葉、を、あ、ら、な、い、零、る、ま、り
と、或、人、の、い、ふ、に、這、義、ハ、官、券、君、千、葉、殿、也、知、名、さ、る、ま、り、一、を、唐、在、実、と、試、て、然、亦、奇、特、の

あ、ら、な、い、歸、り、ま、り、て、任、意、と、京、と、御、威、を、預、る、は、銚、物、の、目、易、り、ま、り、と、狗、子、を、研、る、も
要、る、一、送、憾、に、這、支、の、も、の、ハ、豊、実、領、に、て、あ、ら、な、い、咱、們、願、い、け、れ、灰、の、傳、聞、さ、り、那
村、雨、の、刀、に、ぞ、刀、小、鮮、血、を、流、す、と、樹、の、葉、を、零、ら、ら、し、名、刀、折、る、四、下、の、夏、樹、植、這
里、の、老、る、椎、も、あ、り、銚、し、て、ま、り、の、ま、り、と、の、遠、木、を、生、て、彼、御、臨、見、せ、り、馬、加、刀、祢、那
首、の、塘、隄、の、葎、屋、の、内、に、い、り、臥、る、乞、見、あ、り、他、們、も、素、も、好、人、を、な、し、積、悪、の
業、報、也、家、を、逐、れ、世、の、垂、れ、て、野、せ、ら、ま、り、ま、り、め、あ、ら、な、い、每、這、世、の、暇、を、取、る、も
是、一、功、德、然、ハ、思、さ、ま、り、と、ま、り、の、せ、御、武、然、身、を、起、し、て、ま、り、の、海、を、舟、と、て、適、意、な、り、
非、人、の、全、身、足、踏、さ、り、と、ま、り、の、骨、逞、く、肉、肥、れ、ば、銚、物、の、穴、九、竟、入、彼、牽、出、せ、と、性、急
る、指、揮、後、若、黨、奴、隸、を、承、り、ぬ、と、心、も、果、敢、皆、散、動、さ、り、と、小、塘、隄、の、頭、へ、走、り
ぬ、葎、屋、推、倒、し、鎌、倉、寒、寒、見、の、項、上、を、檣、杭、を、引、起、し、て、ま、り、非、人、奴、快、出、し、已、們、
老爺、の、御、用、あ、り、快、々、坐、り、と、諸、声、の、最、も、奇、鏡、を、罵、り、け、り、浩、処、中、南、の、町、も、稍、か、ら、ま、り



八代傳人傳卷三

廿五

文溪堂藏



八代傳人傳卷三

三十一

相摸小猴子、這為体と違て驚かす。此もせむ。竊歩を近着て、椎の樹蔭に
 網窺より、小程の鎌倉寒見の、さうけり。旅ゆく武士の伴當、細ききりて、胆を
 走つ戦慄れ、眼を睜り、声討つ。さうけり。刀袷連、憚りある甚き御用、知らぬも、這身
 犯せし過へ、いそぎ、踏寒走、一歩走も、運びさか、許さぬとの、甘も、果は、大家の、
 声ゆり立ち、坐行も、あれ、死脚解、でも、中下と、いそぎ、出さぬ、已んや、快々、本よ、と、左右より、
 て、と、手、押して、あう、つる、ちやみせ、不ち、ち、え、か、す、あ、その、上、に、ち、う、り、さ、と
 めを、握り、腰を、推立、宙、吊り、茶店、の、頭へ、を、伏、撲、地、と、推居、さう、登、時、馬、加、御
 武、大、刀、の、緒、解、く、袴、小、を、野、袴、の、袴、結、き、落、葉、の、刀、を、引、提、く、豊、実、と、共、侶、の
 登、見、を、放、ち、立、出、く、詰、と、睨、へ、は、面、兎、も、向、でも、ある、死、屍、骨、殺、の、准、備、小、然、心、も、怕
 け、鎌、倉、寒、見、の、意、已、身、小、漆、の、吐、嗟、と、叫、く、平、張、り、畢、竟、馬、加、御、武、落
 葉、の、刀、を、銚、き、否、と、亦、次、の、卷、の、首、小、解、分、は、を、聽、絲、か、し。
 里見八犬傳第八輯卷之三終

南總里見八犬傳第八輯卷之四上套

東都 曲亭主人編次

第八十回 殘仇を斬る毛野莊介と戦ふ 傳來を舒て小文吾兩雄を和ぐ

復説馬加蠅六郎御武、落葉の刀を引提て、寒見と立ち、鎌倉寒見より、
 對、勢、以、凄、し、かり、けれ、寒、見、の、之、駭、怕、れ、吐、嗟、と、叫、ぶ、と、左、右、より、若、黨、奴、隸、を、手、合、入、
 項、を、抓、て、勤、甚、登、時、御、武、聲、高、さ、る、を、巧、奴、今、い、ち、叫、び、さ、る、を、許、さ、ぬ、然、と、も
 故、り、て、汝、が、首、を、刎、ら、れ、先、や、末、期、の、引、道、を、説、示、さ、し、听、ね、が、抑、儂、が、這、兩、刀、小、橋
 落、葉、と、命、け、る、世、の、ま、ら、ぬ、重、宝、就、中、落、葉、の、刀、の、銳、光、と、莫、邪、の、異、る、を、さ、る、を、七、人、を
 斬、る、と、死、の、時、を、ぞ、く、四、下、る、木、葉、忽、地、零、る、と、あり、因、り、落、葉、と、命、け、ら、は、壁、の、故、管
 領、家、持、氏、主、の、名、刀、を、り、け、村、雨、丸、と、相、似、る、奇、特、あ、る、或、の、ひ、を、銚、き、と、る、と、

りけれ。主君の御座をあげがら。東武へ帰城の路次を。銚物ふるの。東西わかれか。ゆふ
 折料を。汝を。ゆふの。絆の。あ。及。左。右。も。世。不。具。の。
 乞。巧。身。の。業。報。回。も。ある。天。罰。也。然。死。の。悪。業。を。盡。され。る。
 痛。も。死。れ。ぬ。一。般。を。殺。む。武。士。の。慈。善。を。曉。し。謀。を。思。ふ。覚。期。極。め。合。堂。を。苦。
 痛。も。ま。る。こ。の。中。に。あ。る。飲。と。身。勝。を。並。立。て。誇。良。論。せ。丁。田。豊。実。も。找。り。て。乞。
 巧。對。て。寒。見。ゆ。汝。の。果。報。也。目。今。主。の。死。を。樂。し。め。死。か。死。の。命。根。を。
 一。刀。断。る。は。是。幸。也。況。品。も。裂。く。名。高。落。葉。の。名。刀。也。苦。痛。も。覺。は。性。善。の。
 後。の。世。に。安。ん。で。然。れ。ば。身。を。銚。され。木。葉。も。落。け。奇。特。也。是。主。君。の。御。感。の。
 預。の。祿。も。増。き。ま。ふ。余。の。汝。が。與。法。師。と。取。衣。經。と。讀。ま。追。薦。佛。竟。く。の。願。の。
 寓。る。龜。の。浮。木。も。遇。る。か。大。檀。那。の。遭。ひ。の。造。化。の。妙。也。稟。さ。る。命。を。
 惜。む。白。物。之。迷。と。醒。せ。曉。也。理。の。と。打。り。合。槌。胸。を。苦。に。鎌。倉。寒。見。の。戦。れ。る。膝。は。

て。權。且。息。と。鳴。る。龜。の。項。と。稍。鶴。と。眼。と。眸。と。左。見。右。見。て。刀。祿。達。の。端。を。あ。る。
 冥。趣。の。身。取。り。の。理。の。欲。知。な。も。已。に。一。切。あ。る。か。約。生。と。活。物。朝。生。と。

夕。死。も。野。也。命。の。惜。む。も。乞。巧。の。殺。す。も。然。る。の。あ。る。身。の。野。曝。山。家。も。

足。踏。も。腫。も。苦。も。あ。れ。樂。も。あ。れ。世。の。常。情。を。日。毎。携。る。竹。杖。も。千。載。の。

齡。也。美。夜。も。宿。る。松。蔭。も。萬。代。も。あ。る。心。も。知。を。誇。良。論。は。薄。情。也。恩。也。

る。恩。も。被。け。る。か。刀。の。奇。特。と。試。え。命。を。取。り。過。い。死。と。千。歳。を。厭。し。

ら。生。る。一。日。の。優。れ。も。こ。の。世。も。あ。る。這。里。不。往。還。の。人。を。俟。つ。右。左。の。袖。を。

一。か。刀。の。内。を。御。法。捨。の。御。用。宗。旨。違。ひ。通。さ。ぬ。の。世。の。敢。は。御。武。の。眼。を。

瞪。ら。一。声。苛。立。て。這。奴。甚。大。胆。之。屠。所。の。羊。も。あ。る。今。の。命。を。惜。め。て。助。け。ら。

ら。觀。念。也。馬。也。豐。實。も。亦。冷。笑。也。佳。也。因。果。も。哺。也。も。悟。ら。ぬ。愚。

物。の。本。性。常。言。の。驢。耳。彈。琴。益。る。回。答。時。を。移。ら。快。も。銚。也。と。の。慌。る。鎌。

葉の面刃と遞りし俱より受よと罵詈する少年の形は實に勇
 言名告る考足らば隨一大阪毛野流智浮世世潛假も見這里光明を御の州名
 かくて荷且相摸小猴子と喚れども果敢る身と銚れて終の煙と薪樵る鎌倉寒見の
 似而非猿樂も亦似るものありけり。御武豊実此彼送り目と汗なる中御武
 怯れをせし声高き原東這奴の年舞子化て俺が先代の親子後類さるる撃
 も果して逃亡する大阪毛野でもうけり。汝が仇人も知る只那箇山逸東太縁連も撃もせ
 常武大人の怨もいふ義違ひ用法の用敷く天道も今もあつる身も悪報
 多む。汝が親の東西も汝這方ふ心と成て俺們も仇も罵。似而非廣言只夏虫は火虫等
 是れは斬の自徒死出ゆ又一層是家裏に獲るる是裏に汝と共侶岩濱の城に逃亡する大田
 小文吾悌順近届越路の流落ひと片貝殿の知らせあり。同悪大川柱介と俱も首を刎
 られり。今も首級と這面刃と片貝殿も賜と武藏還る路りて汝が首と相添ま俺が先

代怨と復は是私幸のまら石濱殿は奉與も面と起て武の大功御感も八入増ゆ
 其首を退せと敦圍の合られ腕と振断て首と敷くと見を左の方より豊実も俱小
 刀と引抜きまら斬りし構へ。登時毛野はも懸毛御武も不菅三十一不敷肉を刃は
 飛鳥の如く翔潛。縦横を身する修煉の剽賊瞬く間も薙ぐ刀尖と左へ流と推止る刀を
 丁と抵合て怯むと透き磯と斬る哭の牙小御武も首を地を落て軀も礎と付まけり。
 豊実も少年に武勇の敬驚く豊実も朽惜やと走りぬ走らんもまらるる伴當進先
 と喚りて推合も籠んと主従四名が抜連れる刃の電光競ひ鬼ものもせり。毛野は左右
 受流し前後も當る奮撃も突戦要時もあるま一個の奴隸とむを斬伏せ返走
 刀も若黨の肩に深痕の血滝通漏苦と叫びて一及ぶる走の仆も息絶る伴當二名
 敷られ豊実も心慌て巻も狂る危窮の受天刀毛野ははると踏入思貫ける大刀風も
 走るもわらぬ豊実も心も小影を斬れて吐唾とる一声叫びて逃走を脱す

と趕ふ大阪の後の残る一個の奴隷を敷きんとする刃の光も毛野の身も沈み左へ外
 走至妙の掙は小鳥を捕む若雁鳥の勢ひ當りなげれば奴隷の刃を打落させ痛癢を肩を
 信濃路投ていそぶ這折獨逸速く諏訪の湖水の頭まで來り前向見且せ見
 倚く覗ひる毛野の奴隷を趕捨て又豊実を趕まき性方も知るるり一と逃る外
 那奴們を一箇も漏さぬ敷くたて又いそぎの益あると獨語り單衣の袷折返く刃は鮮
 血を二三遍推拭ひ遺る鞋を合抗ておどめて柳武の屍骸を撈りて小篠の刀を抜
 合らう左見右見て落葉の刀の共お腰を跨々愀然と大甲の息を吐く歎息の外
 走り鬼の刀の端を握り留め引戻せ毛野の引まき伶行足又踏固めてさへ
 此も騷々氣色も冷笑ひ又さうさう汝も敷き馬加丁が伴當る外逃もせぬ其士の伴願
 俺も馬加丁們を趕々這里まで来てくれぬらぬ汝が舉動今那主従三名を敷き東
 不義の利も飽きぬ山豪ある遮莫敷きれ者の與らぬ復す時宜儘
 快返せと罵り又引よき毛野の閃りと振動を面と對し位と疾視て原來は要ある
 奴之年齢を推計し俺が然敵あはれも這両刀を知らぬ心もかゝる那親族敷き
 ぞとも身の分際をわけて慢不事を受てもやと敷圍て見ると引抜く落葉の名刀
 真額臨で敷き刃尖を柱に受て彼此身を反を程もあき又敷き大刀を
 復引外抜合して一上二下と盡す勇士と勇士の烈し大刀响丁々礮と未せ受て

此も騷々氣色も冷笑ひ又さうさう汝も敷き馬加丁が伴當る外逃もせぬ其士の伴願
 俺も馬加丁們を趕々這里まで来てくれぬらぬ汝が舉動今那主従三名を敷き東
 不義の利も飽きぬ山豪ある遮莫敷きれ者の與らぬ復す時宜儘
 快返せと罵り又引よき毛野の閃りと振動を面と對し位と疾視て原來は要ある
 奴之年齢を推計し俺が然敵あはれも這両刀を知らぬ心もかゝる那親族敷き
 ぞとも身の分際をわけて慢不事を受てもやと敷圍て見ると引抜く落葉の名刀
 真額臨で敷き刃尖を柱に受て彼此身を反を程もあき又敷き大刀を
 復引外抜合して一上二下と盡す勇士と勇士の烈し大刀响丁々礮と未せ受て

流去龍の糸風の柳三月月の左右不素素狂へる乱るる武術の精妙二龍雲間不
闘ふ時兩金鱗と零素如く兩虎深谷の争ふ折風黄毛と吹小似て送小疎園はるるけり
浩外小文五の路次草鞋と易ると。どるも莊介の後れく走る諏訪の湖の頭まで
来て追ふれば誰か知るが莊介の牙のさる賤し少年と戦ひ既小園多。小文五の這光景不
駭はるる此も擬議せむ飛が似く不近着て是れは件の少年の認送はせぬ大阪毛野の
何麼のふとさるる又教書はつた一入声のありさるや大川生止りの大阪生も且るね小
文吾もど忘れ飲ひつゝあを聞きと連り不叫びて林平もども毛野莊介のるを熟結びて死
活を争ふ折るれ大田とさるる暇もる。喉林平と耳も櫛けを鏢と削る勢以の止るべもあ
され小文吾の兄術のあもさるる四下とされ茶店の傍小長さるる石榜介の有ける。是
究竟と両も櫛引抜はる一抗て目今毛野と莊介が熟結びる刃の上件の石を櫛
壓す打くをさるる戦ひと制めけり登時毛野莊介の刃と京布れても握持る刃の柄を

放さる俱不估とて茲初て制め人の小文五をりを知りしければ毛野の口願大田旅見力
且感と且歎ひて絶く久し小文五王権がの仇と戦ふ果さんさるる折林めらるる甚
磨る故と問へ小文五合笑く。曩の墨田河の頭を別れ折の緯急せ告る不違る
かりと和君のまに知らるる。是這人の俺が為の過世ありける異姓の弟兄大川莊介義
任と喚做す勇士をいそむ。後然のありとも俺面願て怒と共刃を斂めひひかと諭林めら
又莊介のち對そ喃大川生這少年のる比具の和殿の報知る。孝烈無難の大阪生情
由の知られど争ひと止め和睦をぬね悔のる。と諭せは莊介點頭て原來這少
年の和殿の噂の少知る大阪生でありける。さるる怒のるければ。這人東使主従と名二入
まを敷も果く俺が重代の両刀を奪取る小塘隄のさるる走去んとる折其料は這里
来て那為体と觸窺なまの刀を他も渡さ。と心の悔すの素素より和風は由縁あは
大阪生でありける。神るる及身の知るるも。一舉の雌雄を決せと送小挑戰の危り死



八代傳八軍卷四

文安堂藏

八代傳八軍卷四

文安堂藏

ところ陪話れども毛野の疑ひる鮮き喃犬田生は其のる不這人は名三面と認るるれ
 又是和殿の義兄弟深好のあんと。あはれかき争ひ初と推せ刀の所以の。小條落
 垂木の両刀の原是千葉家の重宝なり。俺が敷れ折偷見ありて奪去りて傳せし
 久くもぬ余るはけし右濱の千葉殿の家臣とせし馬加蠅六郎御武と名告れ。這
 刀と帯て來り相伴ひの大塚の。大石の家臣也。丁田畔五郎豊実と名告る。從者持
 せ鎧櫃小付る牌を知られ。憊而御武豊実の那首の茶店小穂平折那御武が
 幾語け。這落垂木の刀とせし人を斬り四下る。木葉と落を奇特なり。人のいし排と
 又ん誘と馳て這頭也。鎌倉寒見と喚做る乞正の。を伴當們引出させ斬
 垂木。遊戯も支ふ。心憚る那們舉動其の初も。樹蔭も立てる光景を
 見る。堪ぞ走とて矢度小御武主後と。三名まで較り果し。是不慮も鎌倉寒見の
 仇。報ふ似れども。豈あ。御武の則馬加常武の苗跡。とみづ。いん。俺は親

弟兄の寛家の餘類るる。虚実の知らぬ大田生の首級と。其のい誘る
 とあれ。豊実。これ。既小痛瘻を肩す。一個の奴隷共侶。那奴を。逃さ。願
 ふ。這。個。兩。刀。の。原。是。千。葉。殿。の。重。宝。なり。當。年。佐。々。の。美。女。より。遊。我。の。御。所。へ。ま。り。せ
 よ。と。俺。が。父。使。節。を。奉。り。くる。路。決。り。て。枉。死。の。折。紛。失。る。東。西。も。仇。け。屍。骸。と。も
 共。か。ち。垂。木。で。横。ぐ。も。あ。ら。ぬ。の。美。女。の。身。物。情。を。稍。知。る。実。母。氏。の。説。示。され。願。未。と
 思。出。々。方。腕。を。刀。で。れ。送。恨。の。方。方。も。涙。を。進。む。懐。甚。馬。の。腸。を。断。心。の。哀。し。是。苟
 且。の。と。る。ん。や。這。後。も。不。武。運。稱。ひ。て。那。縁。連。を。敷。捕。ら。ち。折。小。七。便。と。討。多。這。兩
 刀。と。千。葉。殿。返。と。し。報。復。さ。親。の。汚。名。雪。む。俺。が。宿。念。も。果。実。足。れ。り。と。思。ひ。め。の
 の。ふ。を。今。は。是。と。大。川。の。家。重。代。の。名。刀。を。た。と。り。て。不。審。け。れ。大。田。生。の。始。り。を。手。を
 あり。あ。る。後。と。向。ふ。小。文。吾。ち。ち。縁。故。と。詳。せ。され。の。疑。ひ。然。る。と。さ。る。兩。刀。大
 川。生。の。亡。親。の。紀。事。も。その。後。亦。他。も。不。渡。と。千。葉。木。家。の。東。西。も。あ。る。も。循。環。て。亦

舊の主の還りては麻生某具不知り言長けれ且く留て大阪和殿に向ふ事ありといひ
 伝ふ事多し裳を寒げく左の股を見して人のを礼する所為るれ也和君も又俺身等
 あり形牡丹に似る痣のその身に内なるも又只その痣のその自然と文字の顯れ
 秘藏の玉のありては這俺們が義兄弟骨肉に優き宿因の最裏の受と向ふべし
 去は鮮急中へ別れる送懐さを今を果せとて此のひらきとせとられ毛野の駭れぬ
 かし然るにいと領は袖巻拵て右の肘に示せ果と二の腕を牡丹に似る痣の當
 下毛野の衣領を撈り某が秘藏の玉の年來這里に奉りて玉の則智字あり其後
 こそ存せしめこれの玉と逆よるのふも識られん奇也々々たるなる不疑に鮮き一也
 莊介はもと合笑々大阪生今何れ何と疑ふ事ある大田玉の傍の字あり又俺玉や
 義の字あり痣の此と衣領寛用を示せとれ是も亦身柱よりと右の之脚相似
 依牡丹花の痣ありけれ毛野のひく駭嘆とせとて故と曉らざる信奇特とぞ知

下あはひとい非なり今よりと俺兄と憑んとあふ和君們の這面刀を惜んやこのふ然ふ
 小文吾莊介あふふと刃を斂め俱あ地を退く長物語の災害を招ふ似る快
 快と薦め論ら小文吾の石を備合相ま毛野莊介の刀を余れ壊と拭て共侶の誘
 とて鞋斂めけり信りか大阪毛野の先を立大川大田と一町あり奥より土塘堤の
 背へ退か七這里の外見の稀る去向を商量ありとふ小文吾莊介あふと心
 法草折布で坐を占けの時毛野の恭く莊介もち對して某眼のあり富土筑波も
 知らず酷くを礼を仕ぬ御向ものいよとて這面刀の俺亡父の故主の東西とせとの知
 らばう一日は是非も和君の重宝あるん留措く死のる今を返す事受取を
 ぬかとのひら軀て両刀を抜合ら差寄すと莊介受を推戻と苦樂を俱而患を分つ
 分頭の交りへ介あふとてあ身の與に要ある刀を親の紀念あると某も亦惜んや勿
 論その刀の齧る雪條の俺家の服章傳來分明とて知れて所要を立れ今より

望む所あり。和君の仇を縁縁連の所在を撈りては。ちのけの飲料の巨かり。このま、お

死のねと推辞と小文吾推辞を返すとの大阪生も受とて。辞大川の義と車とせる
所以され。小意の意を返すも。其もと論議。時厚任と舊主返と自然の
の。大阪生听の。這西刀の来歴の始の。箇様々々終の。徳々々けりとも。大川衛去自役の
折刀と没官せり。又年と歴て小文吾。舊里在り。時件の三刀と購求め。後信乃の
贈り。却。小后大川の家の名刀多し。此。知られ。小の折。信乃が。在。介。返。せ。り。の。
今番の厄片貝あり。又這刀と没官せられ。那假首級と共侶小文吾。刀さへ。石濱大塚
両所の使者の。遞。与。され。と。せ。り。の。稲。戸。津。衛。が。好。意。ゆ。死。を。免。り。て。の。夜。又。竊。め。
異刀を贈り。と。跨。り。那里を。潛。入。り。の。崖。略。を。云。と。辭。短。く。其。さ。せ。せ。毛。野。を。只。
管。歎。賞。し。て。寔。に。東。西。中。離。合。の。刀。と。主。と。凶。吉。福。福。別。き。り。の。意。外。の。奇。談。
感。ず。る。は。餘。り。の。秋。も。て。不。傳。來。の。也。今。退。は。按。さ。る。逆。臣。馬。加。常。武。の。苗

蹟と立一千兼殿。這西刀と返すも。咱們親子の忠信孝義を。あ。り。て。く。も。あ。ら。む。か。況。當
目這西刀と寛家龍山縁連が。竊。取。り。あ。ら。ぶ。れ。が。の。ま。わ。り。と。も。那。所。在。を。知。る。と。は。
あ。ら。む。と。願。う。今。より。大。川。生。這。毛。懸。念。あ。ら。む。刀。を。收。め。ゆ。れ。と。連。り。あ。薦。め。て。已
ま。し。れ。が。在。介。さ。ら。な。く。美。引。く。任。ま。さ。る。厚。く。諭。さ。る。受。さ。る。あ。ら。む。友。友。の。信。誠。知。ら。ぬ
の。不。似。され。今。ゆ。り。固。辞。が。ら。誨。は。後。ひ。ま。ら。ん。が。和。君。の。亦。何。を。て。その。身。の。衛。め。ま。
ゆる。寛。家。と。索。る。年。來。の。准。備。の。い。ふ。ま。ま。や。り。と。問。れ。毛。野。の。荒。介。と。あ。ら。む。その。受。も
心安く。這。西。刀。と。還。さ。す。も。其。の。亦。年。來。竊。め。藏。奔。の。二。刀。あり。且。是。より。そ。を。奪。ま。ん。ん。
と。い。う。懐。を。撈。り。て。な。く。出。ま。し。七。首。を。披。け。玉。散。る。新。月。の。四。下。輝。く。天。晴。各。作。鏡
味。也。と。在。介。小。文。吾。俱。の。感。嘆。を。さ。け。る。當。下。毛。野。の。七。首。を。令。直。鞋。を。斂。め。これ。の。三
ぞ。の。強。敵。を。尚。征。さ。る。足。さ。れ。の。外。大。刀。も。あ。り。餘。細。襲。衣。甲。脚。着。も。甚。な。藏。め。土
中。の。隱。し。七。南。の。塘。隄。の。腰。あ。ら。む。と。い。ふ。と。身。を。起。り。走。り。去。り。件。の。苞。を。引。提。て

鮮用くとあらし。小文吾意を推禁めて。這里を那首へ向近き所。時と程さかぬ
 知れ。進退難義及ぶ。御前某大川の後れ。走りと這方へ。行程は。行装は。一
 個の武士の。小髯の。疾を。肩より。路傍の。憩ひ。其を。喚留め。咱們は。武藏の
 大塚の。大石殿の。家臣。諏訪の。湖水の。頭。癖者。狼藉。せ。か。の。如。く。小。癩。を
 肩ひ。其の。あ。つ。賜。と。請。求。る。あ。る。着。る。と。ま。り。を。跨。る。刀。の。片。貝。を。没。官。す
 まで。俺。腰。刀。を。け。れ。是。る。ん。丁。田。畔。五。郎。豊。実。あ。る。と。猜。た。る。心。勇。ま。し。声。高。ろ。ふ
 原來。汝。の。豊。実。秋。越。路。よ。る。と。汝。們。が。後。と。趕。々。今。來。ぬ。大。田。小。文。吾。を。知。る。所
 や。と。名。上。る。小。駭。く。豊。実。の。訝。り。ま。る。身。を。起。し。七。刀。を。抜。ん。と。け。け。を。抜。し。も。果。む。頭
 顛。敷。も。落。し。と。件。の。刀。を。復。し。易。由。元。の。類。り。刀。を。屍。骸。の。邊。送。り。更。命。走
 して。大。川。の。趕。着。は。う。の。ま。る。と。大。阪。生。ま。再。會。せ。し。と。件。の。豊。実。御。武。門。の。緯。の
 趣。具。知。り。是。と。あ。と。令。復。し。た。刀。を。三。大。小。示。せ。毛。野。も。听。け。笑。坪。の。入。り。さ。る。と。

中。小。井。井。の。感。さ。る。と。大。さ。さ。さ。の。額。と。拍。と。通。徹。妙。計。ひ。ま。る。某。と。も。家。傳。の
 刀。を。大。阪。生。ま。る。と。津。衛。の。刀。の。御。武。の。屍。骸。の。邊。送。り。更。命。走。り。更。命。走
 る。折。備。俺。們。の。両。刀。の。再。も。入。る。と。あ。ら。は。這。換。刀。の。便。就。返。す。ま。る。と。い。つ。る。不
 要。る。は。東。西。と。何。時。も。留。人。是。由。亦。御。武。の。屍。骸。の。邊。送。り。措。け。那。萩。野。井。が。合。合
 抗。越。路。の。と。あ。ら。は。縦。を。美。不。及。ぶ。と。も。李。札。が。挂。徐。國。の。君。の。昔。基。の。劍。と
 又。も。ま。ま。情。深。く。は。稻。戸。の。志。の。致。美。然。り。と。恥。て。件。の。三。刀。を。引。攪。く。争。身。を。起。せ
 毛。野。も。俱。子。と。あ。ら。は。せ。と。小。文。吾。も。よ。と。喚。林。め。り。酷。暑。は。往。還。の。跡。絶。と。も。時。程
 下。る。茶。店。の。主。人。が。茶。村。長。を。報。す。け。ん。余。ら。衆。人。聚。々。と。且。萩。野。井。の。後。は。こ。の。と。も
 今。ま。も。來。ぎ。え。又。逃。亡。す。伴。當。和。君。を。認。り。の。ま。る。と。慢。は。那。里。合。の。危。し。和
 君。の。這。里。と。立。去。り。て。甲。斐。の。ま。ら。赴。は。某。の。大。川。と。俱。小。立。立。て。面。を。隠。し。其。頭。を。過。る
 旅。客。の。似。と。ま。り。と。那。兩。刀。を。送。り。措。け。趕。着。ん。這。義。と。ま。る。と。と。又。井。井。の。



東使と趕て
 萩の野井
 凶変と聴く

八代傳八景

十五

大塚下



小文吾路撃豊實
 こぶんごみちの
 とよきのとら

小文吾



八代傳八景

大塚下

大田の意見その理あり。ちも揃くもい要る。快立退く俺們を程も路も等も。給ふ條も血も巻隠く。や目外られぬ。と論まふ毛野の推辭難く。徳のらほま。甘徳も。某も申非支の。二約の十町の内。干浄処も等。那里も赴たぬ。と。便りく近づく。快引返。ぬねと心も附け。屬ら。毛野の稟苞引提。立別替。諏訪の湖や。上社に伏拜。遥に禱る久後。今も恙のわ。栲の校。秋風戦。樹立涼。青柳の驛路投。い。介程も。小文吾。御武們的。數。邊。時徘徊。絆の動静。現。村長。い。の。二箇も。程遠く。里人と路。の。走違ひ。罵諍。くら。茶店の翁。唇。飯。稍か。折。御武主。後。枉死の骸。初。た。胆。漬。引返。先。絆の趣。祝殿。小告。稟。ま。と。走去。り。と。這里。諏訪の神領。神職の宿所。近。も。程。其。首。入。の。茶

店の主人も在。と。倍。便り。小。倍。一。時。の。權。の。快。心。裏。恥。に。と。小。文。吾。御武の屍骸の邊。送。措。退。又。小。文。吾。其。か。俺。們。假。首。級。六。八。と。喚。做。小。賊。の。頭。顧。る。惜。む。の。縁。も。俺。が。姓。名。を。冒。され。真。首。級。と。一。時。の。權。の。快。心。裏。恥。に。と。小。文。吾。點。頭。その。美。の。亦。某。も。豫。ら。不。掛。り。件。の。首。級。の。御。武。們。が。鎧。櫃。秘。置。よ。と。傳。へ。る。と。引。出。湖。水。の。論。め。走。ら。送。恨。る。と。快。と。思。お。の。や。あ。ん。那。三。郎。の。い。ま。と。後。れ。り。と。音。不。寄。來。と。お。の。那。身。の。苗。言。あ。る。情。深。か。由。充。の。恩。を。仇。り。復。さ。似。を。思。念。を。旋。る。件。の。首。級。の。小。瓶。の。酒。不。浸。と。鎧。櫃。の。秘。措。を。告。ぐ。快。酒。を。捨。く。筒。様。々。不。做。る。是。三。郎。の。越。度。も。知。炎。昇。の。比。る。頭。

みづからその故を問ふ似見介才小身と起して主あつて御武の御小丁田殿と共侶の
 諏訪の湖の頭を茶店の重時時越ひ折落葉の刀を弄びて小塘堤の下るる
 賽乞見と銚斬のまげの折年十六時一個の乞見が走り出て俺東人と扼り矢
 庭の刃と抽取る主は若黨二十平及丁田の奴隷さ比皆敷も果されしはたその為
 体は任るに箇様々々の術者されしは只這之名のそ小あつて丁田殿も疾と肩を逃走の
 ぬ程小在下も亦かの如く左の膝を放られかかあつてもあつて後れて来る備輩のよ
 告んとあつて辛くと引外れ逃て這里まで来なければ痛癢の苦痛も瞑眩して外れ
 且く黒白と覚えさるる今より些一先の程馬加丁田西側の伴當若黨
 奴隷八九名後れて来あつて連立て折よく這里と過りか遠く喚込着けて那
 大變と告知せ身の介抱を瀕すかとも大家駭謀くの主の先途を後小左も
 せん這首の居れとをりの勤るものも湖水のかま直走の走りて一人あつて居る

なま往還稀るも其暮るる知る人あつて命果敢てあつてあつてあつてあつて
 苦し口説くと三郎うち听か駭呆る伴當と遠くさるるを憐る異変を
 から重時時猶豫去るに俺の那里快由の件の容子を檢索せん若們の一面を這
 似見介と肩の被て推續る跡より来よ痛癢もも灸所あつて死ねるうら
 糸も這が東人の不覺の枉死の證據あるべしのかよく勤りねと吩咐か飛が似
 小走去れば一個の若黨鞋奴空ののれと送とどもの餘の伴の後とど喘
 喘を走のける悠而荻野井三郎の御武們が敷きた茶店の追込来てんは既不
 来て地方の役人諏訪の祝の家臣其も深澤の村長下諏訪の驛長も此彼
 とる来會して絆の詮議區々これあつて茶店の主人と御武豊実の伴當の
 後れ這里小あつての那顛末と曾問せし茶店の主人の農夫と折る山田の
 耕作の園宅の男女暇あつて代のねるよも權且店とち空を吞飯たつべ

退る。その間の事、辨の始末を知ると、又御武豊実の伴當、東入
殊更路次と急ぐ。捷徑の走り、大後れ、その路違ひ、遅速ある
故、辨過して、適絶、這里、おそれ、仇と認る、あつた、迷惑、おそれ、
語、一陳、寺の、一箇、も、證入、ある、茶店、と、距る、数十、歩、く、と、巧、と、お、
一個、の、男子、の、胴、斬、せ、れ、あ、つ、た、這、が、所、為、致、と、い、へ、る、又、武、豊、実、も、首、と、敷、な、れ、て、這、里、と、距
ると、五六、町、る、田、畔、に、屍、骸、の、あり、と、地方、の、の、報、け、り、信、れ、が、一人、の、所、為、お、わ、る、と、
なる、お、り、照、驗、を、し、れ、武、豊、実、の、亡、骸、と、も、則、這、里、打、と、あ、つ、と、只、願、衆、議、成、疑、ま
折、々、長、尾、家、の、副、使、る、萩、野、井、三、郎、が、來、つ、た、お、り、那、似、見、介、の、口、状、を、告、げ、及
び、衆、人、の、疑、心、初、く、解、け、り、畢、竟、萩、野、井、三、郎、が、祝、の、家、臣、們、の、對、面、く、相、計、
趣、甚、麼、ぞ、や、と、又、這、下、の、卷、の、鮮、分、を、聽、録、か、し、
里、見、八、犬、傳、第、八、輯、卷、之、四、上、套、終

南總里見八犬傳第八輯卷之四下套

東都 曲亭主人編次

第八十回

萩野井返命

偽刀舊主不還

宿因重て話表

再說萩野井三郎の既、茶店、來會、祝の家臣們、對面、姓名、告
來由、示、其、主君、の、兩、東、使、不、隸、ら、れる、副、使、の、い、ふ、も、今、朝、も、勞、の、お、り、邊、く、旅
舎、と、出、れ、路、の、程、太、く、後、れ、て、辨、の、始、末、を、知、ら、ぬ、の、幸、い、と、證、人、の、故、の、箇、様
箇、様、と、今、來、身、路、の、と、金、倉、人、似、見、介、の、遭、ひ、の、他、の、報、を、趣、と、送、る、演、知、と、
某、任、て、い、は、各、々、心、安、慮、へ、權、且、這、地、の、逗留、と、越、後、と、武、藏、人、を、走、ら、せ、主、君、并、
千、葉、大、名、家、へ、這、凶、變、を、宣、言、し、進、退、の、下、知、由、を、勿、論、炎、景、の、比、を、れ、東、使、
主、從、の、亡、骸、の、柩、の、斂、め、て、程、近、寺、院、に、預、け、措、き、欲、ま、這、義、を、相、計、し、め、ら、れ、り、

大家疑心釋て然るも少年なる一個の乞見の主従四五名皆殺されし意外の事也
 さてもとたつふ見ればそのまゝの浩処の二郎が途に送せ伴當のそ似見介を駈て来り
 ければ二郎則似見介なるや又御武門の殺されざる折の始末を尋ねて那癖者の何ぞ
 といふ名を尋ねると同く似見介頭を拾げとさし那乞見奴をみる名生口
 といふ名を落葉兼刀と信じて父が殺されたる折に紛失せしと信ぜり小篠落葉兼刀
 今初てそのまゝ馬加とも名告れる逆臣大記常武の親族かそをえざるを介
 らぬ是宛家比餘類逃らせと咄せか東へ御武駭怒て原來這奴の身年餘
 子化て俺先代の親子徒類さらせり殺果と逃亡る大阪毛野であらんぞとのれ
 まのぞれども御武駭を俺們も痛痒を肩ふる珍重中庸論語の絶る大妻小
 多の後の心中冥闇を餘の覚ひを但那乞見の年齢十七八あるべからん實れれども
 容止し優竹質を美く女子ありて又まや形貌の似けるは力量劇姓今牛若

ともいつて神変不思議の武藝ありはれ東人の猜せり如く豫噂の噂を耳聞
 野と鉄のい假少女の大阪ありやいんとて大家又駭て思ひも目と合けり登時萩
 野井三郎の祝の家臣うち對して那癖者の支の趣照驗既分相見れ穿徹金を
 是まきまき首奪る程のまゝ小柄ののどを奪ふと備ぬを奪ふと祝の
 家臣の深澤と下の諏方も長と招きて緯徳とと吩咐て却三郎も答を今
 せせあはしく柩のの村長執計せしむる目暮るも成るものあり急忽諸を
 刀傷人の療養養下の諏方の驛長との美をも示しは深を旅亭におたぬ
 那脚力のるまゝの遅滞は及んで便宜あるんあの誤任せあるやと三郎異説
 及ぶその實は便利に左も右も計せんとて深澤を村長と驛長を勞ひ
 けるこれより祝の家臣の件支の趣と茶店の主人故老の社を會通て這里に取合
 の小屍骸を寺に遺すまゝとて成ると生言提て三郎と共侶の躬て茶店を立出

却三郎別告。宿所を投て還りゆめり。當下御武豊実の伴當の舟這外
 留りて主の屍骸を成るもあり。又似見介と茶店の板戸を棄せて元と昇りあり。這地
 御武豊実の両刀を推し鎧櫃と扛擔ひ萩野井三郎を後して旅亭に投てなす。介程
 萩野井三郎下の諷方より驛長が案内せられ路次をのぞいて王僕旅舎より着る
 夏の日哉お首を承ける。金瘡人の療治本驛より醫生が来て似見介を瘡と縫ひ
 さまの時お三郎の豊実と御武の鎧櫃をもちもか。那首級を捨てる故の隨
 ありれ。竊心と安くら。又御武と豊実の腰刀の若黨所持せし。共此彼七口あり
 一箇も紛失せぬのけり。その中お小條落葉の両刀と小文吾の腰刀の兩東使の腰刀
 あり。御武豊実の伴當の三郎是を預り臂近小措らう。され件の三口の
 刀の御宗社小文吾。竊心合替らられ。真の小條落葉ある。ねと三郎の初より件の
 刀をよもな定。又旅路を赴はる。兩東使の思慮推並せり。旅舎を俱せり。

お三郎の真偽を知るより。片目注進杖。首級并の兩東使の伴當の三口の
 刀の別義を志寫らる。有徳か。三郎の次の日。曉ま。その身の俱たる若黨の
 奴隸一名と從と注進の為。越後遣。又豊実と御武の伴當の心利るもの。三名不書
 翰と齋。武藏返と大塚石濱の両城。這凶變を報けり。然。又東使主僕の亡骸の
 當夜深澤の村長と茶店主人。板を斂め。近江寺院遣り。權且那里を寄せ
 あり。茶店より茶店を送り。兩東使の伴當。次の日。下。諷方の聚合。あつて件の
 三郎。其侶。這留。旅宿の徒然介をある。徳而一句をり。歷程。大塚石
 濱の両城より。士卒。此彼。十餘。各々。君命。を從。ひ。御宗。萩野井三郎。遣。り。豊
 実。御武の伴當。お下。の諷方。萩野井。旅亭。を。對面。と。君命。を。演。非常。此。役
 義。を。勞。ひ。て。却。豊。実。御。武。主。僕。の。亡。骸。の。這。地。の。道。場。を。瘞。む。く。恙。を。伴。當。武
 器。行。本。字。を。受。取。て。武。藏。へ。還。ら。ん。と。い。か。と。三。郎。の。す。ま。の。意。を。儘。せ。ば。是。表。を。籠。大。刀。目。より。

豊実御武蔵齋へ二大士の首級の。小篠落葉の名刀と小文五郎及の。筒様
 筒様と説示して今這東西の各位は遞与しあはせて宜からん。不吉の愚意及び
 此の是すの片貝へも自ら注進をり。遠くは左の左右あり且この受は守王
 へと。理を舒て留め久大石千葉の士卒の只得共這道しと。諷方は祝は宿野
 赴は那日御武蔵の枉死の折厄會の預め。飲ひて述てかへる。那深澤の村長許立
 寄りて。則長と案内し。御武豊実主様の柩を寄せ。某院に到り。住持の來
 意を演て伴の主僕を埋葬と死と一旬有餘を歴る。炎暑の亡骸腐爛し。臭
 氣直に向をれば。主僕は瘡を檢考す。及ばず。此に銀を布施し。諏方は旅亭か
 來り。左右を程小片貝へ遣。萩野井二郎が伴當と共に。執事由元は脚力
 到來し。大乃自御前の下知状あり。三郎元を受載して。諱で関き。小豊実御武蔵の
 久の。小文五郎兩箇の首級并は。小篠落葉。名刀の刀。萩野井二郎は預け遣。

御武蔵の
 死の頭を
 一事も漏
 力に重き
 所當時の
 形跡を
 多しを
 看官
 御味

そが。武蔵の。大石千葉贈。這他の。最詳に載れ。三郎
 既の意。千葉大石両家の士卒。伴の。演傳へ。祝の宿野使を遣。武
 蔵赴く。報て。両家の士卒。共。旅亭。出。け。の時。見。介。金。瘡。
 果。杖。携。り。朋。輩。杖。け。れ。辛。く。と。め。め。れ。然。る。不。便。の。わ。り。
 ね。二。大。士。の。假。首。級。の。御。武。蔵。小。文。五。郎。瓶。酒。を。合。葉。で。温。湯。を。入。易。け。ら。し。
 ゆ。で。も。火。星。の。時。ふ。と。初。片。貝。と。出。し。干。日。を。歴。不。れ。漸。々。腐。爛。れ。臭。氣。
 堪。え。ず。路。を。棄。れ。し。猶。を。俵。の。昇。し。三。郎。が。肚。裏。を。穿。り。功。を。た。
 の。と。あ。の。の。那。伴。當。們。を。下。室。に。誠。り。て。連。る。路。次。を。た。七。月。の。初。漸。武。蔵
 洲。豊。嶋。郡。大。塚。の。城。に。來。着。去。る。日。千。葉。士。卒。們。も。王。君。を。穿。え。あ。け。萩。野。井。が。
 待。ん。と。御。武。蔵。が。伴。當。傷。し。石。濱。へ。還。り。け。介。程。萩。野。井。三。郎。大。塚。の。城。に。着。て。
 仁。田。山。晋。五。出。迎。へ。對。面。と。長。途。勞。ふ。歎。待。態。大。か。る。登。時。三。郎。大。刀。自

贈来させ。大川莊公が首級の大田小文吾の君命を演来意と示し、豊
 実御武の枉死の顛末御武が奴隷似見人。口状の箇様々。真小生で又尋常
 片貝殿の沙汰とて伴の首級小瓶を斂め美酒を浸されども路邊不慮の事
 来て滞逗一旬あり。火暑酷し折られ既小腐爛の臭氣を憚る。是より
 ねと主命を保持泰せられの趣左中右も宜く咄えおきせり。と懇懇演説
 首級を斂め一箇の小瓶。那腰刀を恭しく晋五の遞手と又尋常。其の且退りて石
 濱殿へ速小京上を主命われ。此返辞の那首のかさ小兼るべく。其れ自由の至り
 石濱の使者馬加生申。丁田生と共に枉死あり。而所の使と兼て甘奉り。那首
 へも贈り。首級を於遲滞せり。おの天と允させぬか。と尋常五の留難。僅まの
 意は儘せり。三郎の邊。伴當と俱くと石濱の城。赴る家臣猿嶋連の
 就。吾命を演る。と通て前條は異る。首級を斂め一箇の小瓶。那腰刀を合

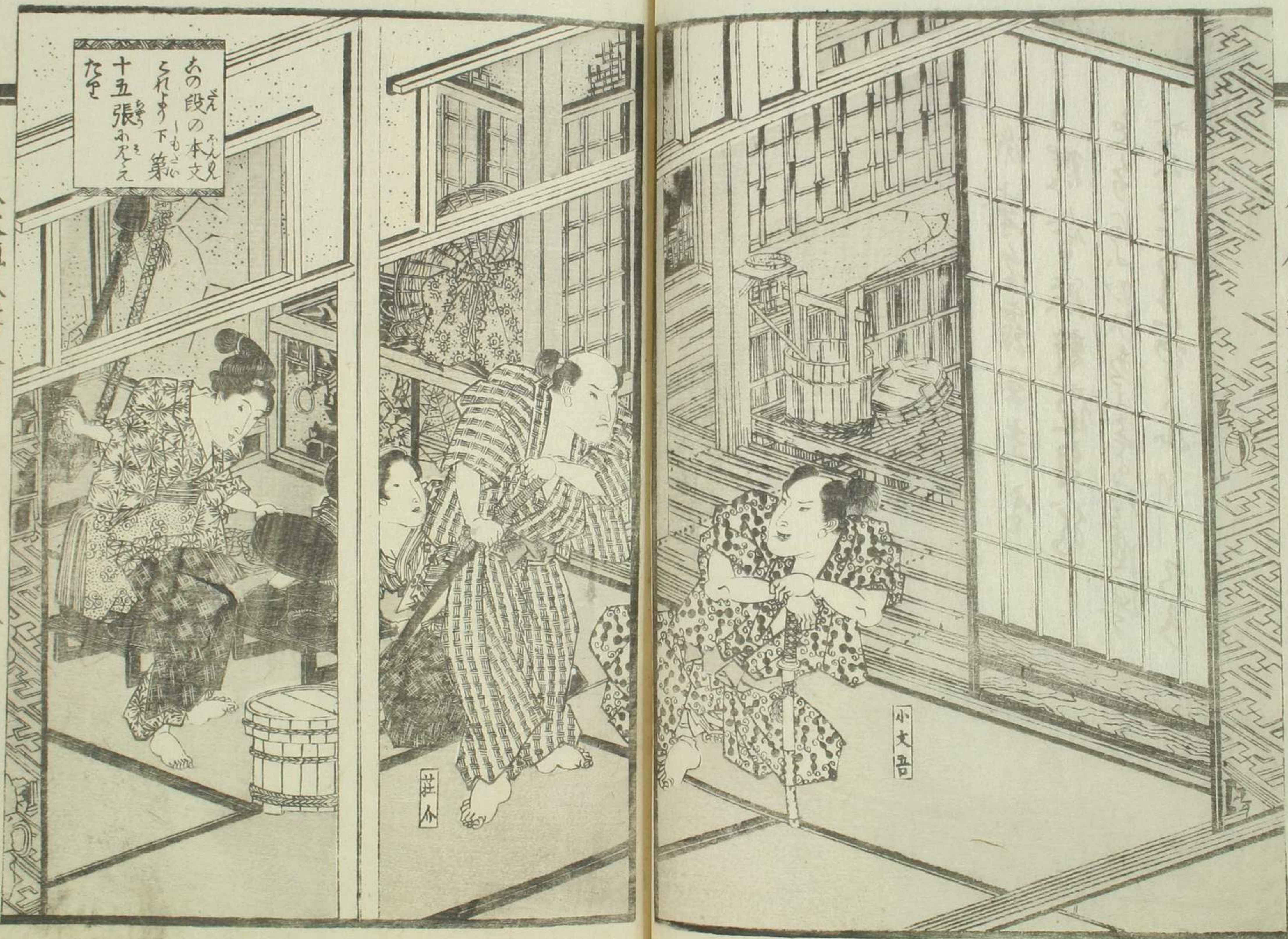
志を於連の遞手とせ。連のこれを受て馬加御武が枉死の折速報れる。快と述
 勞して且休息せんと。猛可旅館に宛行して。隸け酒飯を薦めて。萩野井主僕と
 管待けり。任而萩野井三郎。詰朝正廳に召ま。千葉自胤を見参。原是通
 家の使者を。信と甘儲ける。近習の家臣幾名。主の後方侍り。菅田下
 自胤。先大刀自の安否と諮ね。猿嶋連を。今番岳母御前より。遙に贈
 正の。大田小文吾。悞順の首級。大なる腐爛と。半髑髏。連們が京より
 今や。実檢の沙汰。及伴の件。大田小文吾の。狐の。羊。賊獵の折。る。頭舊の
 正の。必鼻首。遠路。暑氣の折。逆旅。不慮の拒障。て。来て。逗留
 經。如右。使の過失。又贈られ。西刀。昔年。這里。紛
 失。小條。落葉。馬加御武。片貝殿。請。折。斂。定。那
 名。許。年。歷。御武。陳。忽。認。違。因。贈

馬加蠅六郎御
武ノ緊要の使に立たる。故に悲人の為不覺の
所為に那折邊を伴當も後れてその期あるを若黨奴隸も共罪あり。這より異
日沙汰去。帰折邊のよも執事へ通達せられ。遠路の使太美いと懇
勞やく。帰國の暇あるを願う。二口の刀を戻され。任て家臣猿嶋
連們が片目の執事由元へ連署の状と遞し。二郎を受取。又大塚へ赴。小城
主大石兵衛尉憲重の兩管領と長尾景春と和睦の二議あり。乃者五十子城の
在。子息左衛門尉憲儀の聊中身。則仁田山晋五と返答の趣。石濱
より自瀧の口状と異なる。首級酷く腐爛しく。梟首を贈ら。那
刀と。敵上社平が親族多。甲乙を争。社平が力に成。喜慶の趣。刀を
返晋の餘。書中載せられ。執事届け。演て憲儀の自筆。由元小

る。筒一封の刀と遞し。け。三郎の大塚の城。辞去。伴當を。這
夜の蔵。退。這首小宿投。那首の願。則。日。米月の某。越
片目歸着。執事稲戸由元。御武豊実們。枉。願。末。石濱大塚。不。回。報。
言詳。告知。大石憲儀の自筆の筒。千葉の老黨。連署の状。那返。され。
三口の刀。出。由元。遞。與。け。登。時。津。衛。由。元。の。刀。を。現。て。書。翰。を。抵。答。怪。ひ。く。
疑。ふ。然。ら。ぬ。衣。裳。更。り。書。翰。を。携。え。遠。く。在。り。却。若。夫
人。見。參。と。萩。野。井。三。郎。が。り。の。石。濱。井。大。塚。の。刀。を。返。され。緯。の。趣。自。瀧
憲。儀。の。返。答。と。筒。様。々。と。安。ま。あ。は。て。二。通。の。書。翰。を。寄。り。大。刀。自。討。り。参。
津。衛。其。首。を。讀。む。も。讀。く。は。ら。聴。て。首。級。の。父。目。者。傷。れ。是。非。及。及
こ。が。ら。那。刀。之。相。違。と。返。され。本。意。を。顧。み。自。瀧。の。れ。と。那。折。御。武。豊。実。
よ。も。認。り。生。生。堅。定。と。信。う。故。に。曾。々。と。増。進。贈。遣。た。け。と。疎。忽。の。所。行。

多かれん最悔も恥けれ現馬加御武の落葉の刀を試まを見研と見ぬ敷
 其鳥許の白物にけ浮薄の性も知られず豊実とて亦企て那們敷れ為体
 御宮の侍る王孫も後不出る少年のを見大阪野のあは石濱中其頭の詮
 議のまごころ飲ゆるをた向れて由元さし石濱邊の大塚でも御武豊実の枉死
 俱不是不賞の罪あり那折逃る若黨奴隷も後日御沙汰あると仰れ公他
 們的御内の人を左も右もさる下縦那少年身を見大阪野も戦國割居今
 多信濃之東北陸南海隈も多所在と涉備て搦捕せんと難は所行
 多一統て昨今世の風声も傳ゆ御高誅戮せられる大川大田西勇士の真の莊介
 文五郎の武者修行と做せぬ那名を竊とて人欺は渡世の資助もさる一かたは
 故の搦捕られ首を刎れられたる世評もれも忠義の備定る二口の刀に相違を
 由理のゆえと実ま其まなふ誘導せぬ大刀自守の呆果もさる刀の事と莊介の

文五郎も贖物とわける候その風声の外聞とて後そのあは刀口合て向後と佐と後返
 される二口の刀の再臨見も忘る津衛彦も取ま下又萩野井三郎が今番の計の神妙
 ろ然れども勞せの功も争何せん争何せん白井殿の景春より向れ告告ぬあれ
 秘めんと其は示して初由元が諫折用ひざり今ゆふ後悔の色又えおけり佐而由
 元宿所退之獨竊思惟る今番石濱大塚殿より返される二口の刀の俺が
 いた比莊介と小文吾も贈り刀に付麻何の間引替て那二士の其身々々刀取
 下走丹必是御武們の敷れ折三士士の料らも遭際と四下も入便跡で這刀
 刀合も易言飲裏の二大士が別臨之俺們は両方の再入も便跡で這刀
 返もあはせんとけいけい要る言をさしその言と行いと違は違は返され刀の俺亦
 料らも老夫人も賜て復俺が東西もさるけり嗚呼奇なる奇にけり就ても二
 大士の神物あり祐さるの秋九人さるぬと知るはさてもさる小人告ぐはさるぬ



あ段の本^{ほん}文^{ぶん}
これより下^{しも}第^{だい}
十五張^{ごじゅうしやう}ふ^ふえ^え
た^たを

八代傳八輯巻四

文藝堂藏

庄介

小文吾

八代傳八輯巻四

文藝堂藏

只肚は向ひ腹は答て感嘆の外もろけり。案下某生再説毛野莊介小文吾と那日晡
 時の比及ま青柳の驛より歌店宿を投り浴湯一飯をたし果て圓居より過去未
 困談數刻も及び宿の俱まき多旅客もろり小舟の畔一夜の糸を繰は奴
 婢們の暇をけれぬ。又饌果ての寄申來を款待態の疎より止木との與り却て幸ひと
 思ひ。小文吾先毛野の對ひて晝長黒田河史別を折毛野か衆を柴舟子趕着を
 以て。多辰水中の跳入を波濤を凌ぎて酒がが舟快を其音及る。河上より漕を
 弟身別船を身と寓せ料を依介の漕ひ。又市川の行徳の毛野と索て鎌
 倉を赴け。のち介後も又艱苦を経て。後の小舟の旅宿を折莊介の環りあり
 の。次園太并は磯九郎が。泉牛の酒顛二船。且莊介が智勇は梓は酒顛二
 舟より下の衆賊も鹿金もさる。又片貝の大厄難船戸由元が好意を死を免れ支は
 趣千葉大石の兩東使御武豊実が。さへ首の尾も一事も漏さず説示と和君を

亦那折は何処と投て走らした。這信濃路は流落ひら船費竭る故と問ま
 毛野の頭を掉て俺身盤纏もなぬ。その故の成か乞見。形貌を空妻をいひ石
 濱の追捕を免れて親の仇縁連が所在を索ん為る。晝長黒田河の頭を那柴
 舟も無り折風波高く潮快けれ舟を返まらる。及も水際を立し和君は心か
 づる。ふあなれ勢既せ術を流し儘一艦と操り走らる。五里あり羽田の浦
 曲舟と捨て舊里を相摸る。大阪村を赴り願成院と喚做。山寺身住持の僧の
 俺母の叔父をけれ。其里の身と寓せ。艱處ると三松をのの諸國とら巡る。
 宛家と索て敷も果え。心己がかり。住持の允ゆる。空を光明と過せ。去
 歳の十月某の目。住持の遷化をゆい。中陰關。這春のそめ小寺と辞去。京師
 雲時旅宿と。又引返と岐岨路より。諏訪は邊の露宿。く目と弥り。も亦以あり。
 宛家と面と認め。環のあも名告ま。のふ敷と。ん世入力。及び。心哉

盡と神佛の冥助を祈ら成とありんと。是もよて処々の神社佛閣を毎々祈念を凝
 りて。今も小諏訪の片頭を龍山と喚做る村の寛家の姓氏と相似れ。あき途
 東太縁連。苗字の地あり。と。此のまのまの宣旨を諏訪の神祈の權且那果
 在ける。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 又玉との過世の契を知り。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 果の弟兄あり。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 膝の杖の約の八名あり。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 名あり。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 示して。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 あり。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 の山林房と。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。

るまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 と次第不紊の長談佳話。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 日影も。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 嗟嘆も。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。

第八十二回

青柳の歌店の胤智詩歌と題す
 穂北の驟雨の礼儀行裏と喪ふ

登時小文吾又の。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 女伏姫上の臨終も。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 富山の自刃の折光と。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。
 比佐々のゆめより。此のまのまの宣旨を。此のまのまの宣旨を。

本宿願
看官既
知る上
あれど
見は
毎丁
及
説き
おも
の同
いそ
か
亦一
雞助

知忠信孝悌の八人の文字。あつて見れるも。是れ舊里に在りし時、大法師の遊
近とあれは縁故と知りたる伏姫の世と去りありし長禄二年の秋と今茲文明
十四年壬寅の夏と星霜二十四年と歴る。徳は俺們七士の未生以前は
大法師の當初金碗大輔の時伏姫上と妻と義実思食と。披露
及き。長禄元年の秋と伏姫富山入りありて。遂に身まゝの金碗生の姫と
甚日授の為は祝髪と。法名、大と喚做る。園の八州を行脚と失る玉と。素んと。飛
錫の年と。歴る程。今より五十年前文明十年は夏の比大塚信房大飼現八某と俱
三名件の法師と。蛸崎生の料と。名告あり。折、大法師の素玉は俺們が幼稚
時。心得る玉と。皆の玉に見れる。文字と。知れる。又只這玉の玉も。あつて各
の身も。痣あり。形牡丹の似たり。那八房の犬の毛色。類り。と。然れば。あれ
同因果。大士八名あり。伏姫上の大士の與。過世の母も。もう。縁故と。詳説

諦され。世の大諸侯。と。大士の必里見殿。仕。用。緒。明。證。あり。義。實。御。父
子の士。と。賢。と。愛。と。明。君。と。訪。と。安。房。と。相。伴。と。折。大。江。親。兵。衛
と。俱。四。名。の。今。と。這。餘。の。四。大。士。と。索。巡。と。具。足。と。共。安。房。と。赴。里。見。殿。仕
ま。り。其。寬。い。ね。と。辞。ひ。て。後。に。里。見。殿。の。賜。り。と。沙。金。と。三。重。忠。と。ら
這。後。大。山。道。節。と。今。又。和。君。と。は。七。大。士。と。一。人。足。と。大。江。親。兵。衛。と。山。林。と。獨
子。也。四。十。の。秋。七。月。神。隱。と。り。那。身。の。恙。あり。り
其。今。茲。八。才。と。一。這。存。七。と。知。る。一。箇。足。と。一。箇。闕。と。何。の。時。具。足。せ
果。し。世。果。形。旅。宿。の。只。と。與。と。又。莊。介。と。四。下。と。声。と。低。め。大。田。大
塚。大。飼。が。大。法。師。の。值。偶。と。折。某。の。大。石。家。の。獄。舎。に。在。り。程。を。後。の。噂。と。た
は。の。徳。而。近。曾。石。未。多。指。月。院。と。某。も。又。道。節。も。大。法。師。と。蛸。崎。十。一。郎。照。文。の
環。會。と。離。合。の。時。の。遲。速。あり。久。く。大。津。子。具。足。と。素

懐と遠る目まじり御高の進退火急小玉と玉と不眠するは俺們が秘藏の玉の出
 処各異なるも皆幼稚に時感得るを趣の信々母胎内より揮りて生れるは大江
 親兵衛のものと大江大田の任され小文吾の最細く其の信々の獨大阪生秘藏玉
 小文吾と兵衛の護身裏の幼解りて玉と取とるは渡其毛野の徐々兩箇玉と
 學不受載せ燈光不寄を熟視る現此彼一對也但る文字同か其義の字の
 悌の字あり彫るがごとく鮮明なれ感きと太さる先這西箇の玉と返る遠く衣
 領と探るとまら出せ一箇の玉と杜介と小文吾の世代の受ては這中智の字
 わの玉言通て異形なれ奇也奇ると歎賞する視果と毛野返りけ當下毛野の玉と
 敏めて其が這玉未生以前母親の料をくゆるは俺母の父の側室中俺身の
 是る送腹の子を月満れは生れを懐孕既三檢ふと粟飯原の家跡絶ゆる

母の相模の足柄多大阪村在り時熨燭時侯の中か忽然とく流目生し似る
 一隻の光物南の方より見れば渡りて隣と云へ俺母の懐をくゆるは世もまはるは
 後吐嗟となる駭叫び慌て懐と檢撈る小大老母草の實も第は潔白の玉を
 怪るわら宿所を遠く又と件の玉とる小玉の内知見の字あり是人作の東西あり
 ぎあづる小字體と做くと鮮明に讀れか要ありと多る臆と鍼匣の執措は
 夜初更の左側母の猛可産の氣つて俺身を安らふ産する小後玉を來歴母の
 多く寫着て玉の共の俺腰着の護身裏の藏めたりと稍物情を知は緯信
 信と母親の説示しかは信奇特のありら寛家馬加常武が嫌忌と怖と其を
 女の子小扮で字育れよ鎌倉親住と利木園の隊のふらふら既中々復讐言の
 志根をぬく年十二ふり一時の諱の一字を取て名と溜智と命せし所得の玉を見れ
 たる文字も竊に表せし大川大田二兄の名無も玉の文字も由れ歎と回へ杜介小文

吾の共侶の頭、通愛の玉兒の由来を趣異を奇の自他皆異なる亦
 是不思議のつて王の文字と名を命せし俺們も亦介るれ和君と三名の
 大塚成孝、大山忠興、大飼信道、大江仁這四名も忠孝仁信各玉の文字を取らる
 合さしと義兄弟の名號一致の過世の心驗求めしと成知るしと知る一大奇事
 也と只管稱て已きしと毛野の感佩と大川生るの両刀と小篠落葉と名けり亦
 是縁故あると秋と向ふと莊介少敢き否這刀の名字ある。某の只雪條の両刀と
 做れ刀の醜小家の服章多雪條あるより之然と半葉家あり時小篠落葉
 と名けるも小篠の亦是醜の花號猶雪條と云ふと落葉の刀の刀尖此の疵あ
 るも如右名けり也あらんぞんと亦毛野亦感嘆と考の差なきもあらん落葉の
 葉の刃の聊瀾落れ落葉と名けられ那御武ある白とをり人を斬ると
 此の時あつて四下は木葉の零とあつての誇を罪るはとと砍葉の初御武誨

まの備と此の儼直なれも奇と好より這失ありと正を罪るを殺せむ
 支の報ひの觀面御武主僕のものもそのうも豊実も其果不命と損一な總々俗
 子の似而非推量あはれる錯誤多くあり世の胡慮あるものもこの莊介領給て那の素
 よの手首の小人土君子の齒不掛るは足し初和君が這刀を争ひ以て舉動不聊亦似
 この豊実の大山道節が村雨の刀の多入り折女弟濱原が枉死の末期まも大塚返せ
 といふと道節の名を君父の仇と定正まは近死して戦ふも必不負れ兼引まの折
 某の料の遺際も刀も復た道節と戦ひの別れありて往方と知らむ
 されは六月の十九日の夜のひびきは七月の初旬荒茅山道節も大士の隊な因
 果と悟りて刀を大塚返すなり然れ和君が這刀と七公の故主の重宝とを最惜をの
 某の亦亡親の紀念を争ひも解けて争も返され裕と云恰とと思孝節義の外を
 出さ倘這争ひ微の異姓の弟兄多しと知て路人不争かえを争ひて和と捨遣

化の配削妙なるを此彼似たるありき。小文吾らち笑ひて似たり。いもせざるも
 趣同く。信乃現八ヶ許我の組敷。又某は山林房公角舩の送恨も。初は怨敵後々
 親愛目と同一と談る。大山大阪大川は。いも。豈限る。と。在介も。ち微笑て。冥然と
 と。心。登時毛野の愀然と。在介小文吾らち對ひて。二兄より。既知る。大山生。君父の
 仇。定正主を敷。な。も。君と父を害。越杉駄一。東。三。平。這。兩。敵。敷。捕。々
 志。致。なる。某。馬加常武父子後類を敷。れ。も。父。を。害。せ。逸。東。太。縁。連。ま。る。給。敷。る
 ね。一。目。も。心。安。く。は。素。仇。出。遇。ぎ。て。吳。の。け。御。武。們。を。敷。果。せ。偶。然。之。れ。を。唐
 山。張。公。が。竊。盜。と。李。公。が。細。ゆる。と。い。け。鄙。語。も。似。たり。何。の。日。少。縁。連。敷。ま。る。を
 治。て。父。を。祭。り。方。も。心。事。と。察。り。父。と。ち。敷。と。在。介。小。文。吾。尉。也。倭。時。耳。終。相。譚
 なる。小。文。吾。の。遠。く。行。裏。と。解。り。金。千。兩。を。半。て。在。介。と。共。侶。を。毛。野。に。贈。て。お。せ。り。
 送。本。宿。望。ある。旅。宿。の。盤。費。を。肝。要。を。某。們。の。幸。ひ。係。も。盤。費。不。償。一。か。も。勿

論今日より後々まで影の貌の添ふて進退を俱へて。まづを賄ふ。然りとも。腰
 空。折。々。不。便。の。あ。ら。ん。と。博。義。不。ひ。も。受。納。め。あ。か。と。毛。野。の。推。林。示。を
 淺。く。ぬ。る。某。も。亦。初。より。聊。盤。纏。の。貯。あり。願。成。院。主。の。迂。化。の。折。俗。縁。ある。故。を
 り。又。十。金。の。送。財。の。方。御。向。も。既。お。ひ。け。り。形。貌。と。い。見。不。室。妻。の。盤。費。竭。了。故。あ。ら
 ぶ。の。美。心。安。く。係。と。推。辞。と。小。文。吾。在。介。の。存。親。切。推。薦。め。を。之。の。該。で。い。え。る。れ。ど。も
 悽。順。と。親。の。送。財。の。又。大。山。道。節。の。軍。用。の。餘。財。あ。ら。も。分。與。へ。れ。も。勘。々。内。里。見。殿
 より。賜。り。沙。金。の。も。用。果。さ。し。剩。り。の。日。由。元。の。重。心。れ。金。も。あ。ら。ま。た。を。減。と。宣。ふ。は。加
 る。是。理。の。當。然。枉。て。這。誤。不。隨。い。ぬ。と。連。り。論。と。果。る。れ。か。毛。野。の。身。及。兼。引。て。件。の
 金。受。と。ら。ち。載。せ。收。め。け。り。當。下。在。介。又。い。ち。甲。斐。の。石。木。を。指。月。院。の。大。法。師。住
 持。今。那。里。大。山。道。節。登。崎。十。郎。も。寓。居。せ。り。も。大。田。を。伴。て。指。月。院。に。も。多。欲
 毛。和。君。も。共。那。里。不。到。り。大。大。山。登。崎。快。對。面。あ。か。と。誘。ふ。毛。野。の。兼。引。某。を。も

那人々のあつうかぬあつねも。去る仇のまきあを。送小鉄が良友小面會の與甲斐文也
 是是孝と後ホと。義と先ホとの不似。その美の折のあつね。今番の九一の。と固辭を
 小文吾側より信じるも。理のわづら。今を寛家縁連の所在と探るぬ。あつね。甲斐赴
 ぬ。ふとも。是孝道の虧る。あつね。白足の虫に死との後。も。倒れざるもの。助け。甲斐より
 る。信れ。甲斐赴。料。仇の所在と知る。あつね。と。且。権黨七。大士。里。見。殿の
 家臣と。あつね。二世の因縁。あつね。八。大。あ。具。足。と。俱。安。房。赴。且。誰。今。も。前。知。ん
 某。們。大。塚。大。飼。大。江。這。餘。二。大。士。も。素。で。竟。環。り。あ。つ。ね。和。君。も。寛。家。縁。連。と。案。ね。て
 本。意。と。遂。れ。れ。且。安。房。赴。時。と。知。る。遅。速。の。料。が。あ。つ。ね。か。の。如。く。あ。つ。ね。を。這。処。より
 石。木。志。二。千。里。足。と。ぬ。路。る。不。何。あ。つ。ね。數。々。の。あ。つ。ね。一。圓。那。里。赴。ぬ。と。辭。と。盡。し。と。説。論
 廿。毛。野。の。且。沈。吟。七。里。見。殿。の。仁。政。武。德。伏。姫。上。の。孝。烈。義。俠。の。餘。も。忠。臣。義。士。節
 婦。の。那。行。状。と。傳。説。の。心。裏。恥。づ。ぬ。身。の。不。肖。親。の。ま。ま。存。る。友。の。信。と。疎。ま。り

大士の屑とわれん。は。當。感。首。角。兩。端。速。の。決。断。あ。つ。ね。又。再。四。尋。思。し。と。君。立。の。朝
 開。の。誨。と。受。入。且。等。々。あ。つ。ね。と。社。介。諾。さ。し。趣。理。の。希。妻。時。の。程。と。以。い。ふ。夏。の
 夜。を。れ。と。深。う。誘。就。枕。と。ね。ま。る。あ。つ。ね。小。文。吾。の。強。難。と。ま。つ。ね。相。立。の。あ。つ。ね。圍
 宅。の。男。女。何。の。間。臥。房。を。入。り。快。音。も。せ。も。惆。々。あ。つ。ね。夜。の。安。ら。い。と。な。ら。ぬ。三。枚。の。臥
 薦。と。ま。つ。ね。小。用。の。吊。緒。と。引。く。三。人。と。吊。は。六。布。七。布。萌。菊。の。懶。の。色。後。で。八。を。過。た。る
 曉。の。枕。と。程。も。く。と。睡。を。就。け。介。程。と。社。介。小。文。吾。の。憶。も。熟。睡。と。あ。つ。ね。明。る
 も。あ。つ。ね。臥。さ。し。旅。舎。の。婢。妾。も。喚。覚。さ。れ。駭。る。共。侶。も。起。生。んと。備。と。あ。つ。ね。大。阪
 毛。野。の。あ。つ。ね。の。他。則。と。登。る。あ。つ。ね。と。多。い。け。れ。け。懐。念。の。懶。の。下。と。機。揚。て。あ。つ。ね。社。介。と
 小。文。吾。と。喚。と。あ。つ。ね。大。川。生。れ。あ。つ。ね。大。阪。臥。さ。し。迹。の。這。東。西。あ。つ。ね。五。兩。包。の。沙。金
 る。と。あ。つ。ね。是。三。百。あ。つ。ね。の。社。介。眉。根。と。頼。單。也。原。来。毛。野。の。復。讎。の。宿。念。を。遂。る
 ま。も。あ。つ。ね。單。身。あ。つ。ね。と。潜。り。あ。つ。ね。と。伏。然。と。あ。つ。ね。這。沙。金。と。送。さ。れ。る。本。意。あ。つ。ね。の。と

包の十金の答礼よく相當せり。侍て受て會は返す。なれども義も破る。智慧勝
 てるものあるまじ。あれのまじやせん。恨むに要るはとふそ。と諭せば小文吾百會と拵る。
 然して他も脱落する。和殿の細注微言。兄弟堵の悶と。詩を似て後悔あるを。
 此のうゝの愚痴より。那大阪が思慮深き。石濱を夜討の折も。文の武の至妙の進
 退及ぶ。と感ぜし。腹を立らる。少く可笑くも。されはめ。陪話れば。社介合笑々。
 人のくゆる所。替力の大阪和殿。及ぼ。智計の和殿。ふと。大阪及ん。八行の内申
 智の字の王。とる。心験のまじ。まじ。侍れ。且く度外措。甲斐の石木へ赴く。とふふ。
 小文吾然る。と感ぜ。遠く縁頼る。戸を推開。の漱。身は表。程し。もあ。る。旅
 舎の婢。立。ま。の。と。来。ぬ。言。立。の。饌。の。早。飯。も。友。と。交。ひ。又。這。里。一。箇。缺。る。之。椀。は。高。装。
 飯。味。噌。美。汁。掛。て。是。三。山。川。の。歌。も。似。る。二。人。前。の。得。あ。る。唇。餉。の。料。の。割。
 籠。も。俱。受。取。て。胸。の。憂。也。勝。也。の。心。も。包。錢。茶。錢。も。添。房。債。と。遠。与。

朝の立立。と。社介の。杖。を。て。障子の。文字。拂。滅。て。迎。も。く。往。方。も。知。
 ら。大阪。の。以。捨。て。も。忘。れ。ぬ。昨。宵。の。因。坐。甚。多。と。覺。て。悔。の。鬱。恒。胸。と。峰。と。雲。の。
 集。る。甲。斐。支。路。と。投。て。坐。て。也。社。介。と。小。文。吾。の。這。地。も。野。と。相。別。れ。あ。る。道。節。さ。
 既。石。木。の。指。月。院。在。る。と。知。れ。空。た。の。父。朝。涼。の。時。時。を。此。升。日。小。堪。
 ぬ。酷。暑。と。昔。昔。立。凌。び。俱。ま。又。後。日。且。休。題。單。表。大。村。大。用。礼。儀。呈。裏。は。大。飼。
 現。八。信。道。と。共。侶。は。自。餘。の。大。士。と。素。ん。と。居。宅。と。捨。故。郷。と。離。れ。且。録。倉。ふ。赴。て。旅。
 宿。小。月。を。累。ね。か。ど。些。も。便。り。と。は。さ。り。か。箱。根。山。と。ち。論。伊。豆。駿。河。の。中。へ。遠。尾。
 勢。美。濃。近。江。城。下。郊。外。村。落。を。這。里。は。半。年。那。里。は。二。月。旅。より。旅。光。陰。と。送。り。て。
 七。も。二。稔。と。歴。ま。り。け。り。當。下。大。角。多。き。今。茲。の。秋。七。妻。の。二。回。心。下。り。て。投。る。も。
 る。旅。の。權。且。故。郷。か。ら。あ。り。て。親。の。墓。本。詣。つ。く。且。離。衣。の。苦。提。と。吊。念。ゆ。き。諸。
 國。巡。る。と。尋。思。や。々。恁。々。と。現。八。相。譚。ひ。現。八。听。異。議。不。及。也。と。あ。る。心。

かの年の夏六月の下瀬に現れ共侶に下野真壁赤岩の昔里に於て
 所親の宅に寓居する実父母養父母及離衣墳墓の昔と拂ひ香華を向
 念誦し時の程と覺む左右を行程の秋の如く却離衣の三回忌中を壁返る處
 新道場僧を取衣経を讀して這法延に到り赤岩大村の所親永六の御食
 膳の備あり又現分親煉介夫婦養家見兵衛夫妻の霊も這時共祈祭り大
 村大飼兩施主に準備丁寧され里人總て感謝し招かれも結縁の道俗幾
 百名の欲及びり辞果て大角の現公と商議をなす名を知らず大塚大田東國の
 人なれば京師より西の九州四国杖を駐り光陰を送るべうもあらん今番亦上
 野より武藏下總と徧歴せん欽和殿のあらはれと向へ現八賢頭某も念慮
 あり下總の行徳大甲御多ふも且裏那里に赴け小文吾の故郷遠る去申す
 單即の性方を知らず絶てりかとも既而光陰を歴る那五兵衛翁世を

去りて家さ迹なきるぬもゆまひも便りを浴ん後足由亦知べからん這度る且行
 徳と心當東首途見今も猶豫なきとるを大角諾して二稔以来一大未だ
 遇され昔里に立りこれと本意あらざ下日の先公を下と心すも赤岩大村
 多所親永六の遠く別と告ぐる詰日現れ共這地と立去り日の時文明十四
 年小文吾社小青柳の歌府秋九月中旬され日とい短く有りかとも月寒か暑も只
 驟雨の志なきるに現れ大角も旅宿も熟てのとも思ひ且下野宇津宮五七
 日杖を駐り彼此とく遊歴し是より江戸へ赴け更か又行徳に到り共侶の
 由くと又只一日も二百と未牌の比武藏州足立郡千住の御小程遠く徳北の
 暇路と過る折驟雨猛可降をて立宿某家もされ現れ大角も菅笠を傾
 け直奔を走りて中現れ路の小石も足を蹴りて乘時疼痛を勝ざりけれ
 必しも大角の所許後れりとい知らず大角も只管走る程も背を駈へて行



因老人

我住堤小
大角二賊を
拵拵



因老人

大角

裏の結理鮮け。後方より地上大礮と落ると。知るも走勢かひ。七八回を過り。必死歩を
止めて。其方と急ぎまをれ。跡より来る。一個の男子が。行裏に搔攫ひ。逃んとせ。大
角の偷見等と喚ひ。趕合へんと。程小賊は舊来一々か。忽地路を横たり。河
原を投て逃走。大角の系脱。甚地を趕合。看官より。當時の
千住河の河の瀬。今尚。この河は是。黒田河の枝川。あれも。素より。小流。あま。佳
河の東。あけ。廿日。鎌倉より。陸奥の。ま。到。田畑。在。川。を。なる。渡。と。千住。到
石濱。不到。又。石濱。より。黒田河。を。渡。と。須田村。到。柳嶋。到。れ。長祿の。江。地。圖。を。河。佐
今。の。法。第。原。より。長。き。の。
河。國。千。住。河。の。河。佐。を。一。
あれ。二。四。百。年。前。の。鎌。倉。街。道。を。下。る。れ。も。の。れ。川。中。橋。は。千。住
以西。本。街。道。不。あ。る。下。の。村。落。を。知。る。今。と。古。の。地。理。を。論。其。船。と。契。と。劍。を
求。る。如。く。多。下。間。話。休。題。介。程。小。偷。見。へ。不。連。逃。走。と。多。く。河。原。に。到。り。支。當。黒
多。一。個。の。癖。者。目。取。大。多。衣。箱。と。却。と。堤。子。鶴。立。る。當。下。件。の。偷。見。那。癖。者。を。録。示

を。哥。極。と。喚。ひ。堤。を。走。り。登。り。大。角。此。も。擬。議。せ。噫。偷。見。其。首。より。前。不
脱。を。路。を。と。ん。命。惜。く。を。果。を。返。せ。と。罵。り。足。不。信。と。送。返。ま。を。趕。近。着。く。成
兩個の賊。よ。せ。立。下。と。用。に。合。せ。左。右。より。榮。螺。ま。る。る。巻。を。固。め。打。を。競。ふ。大。角。の
右。不。受。左。不。柱。て。列。ぐ。當。る。修。煉。の。法。法。不。惜。され。も。微。ま。ま。左。より。組。む。一。個。の。賊。の。頂。を
抓。て。探。返。せ。右。より。携。る。已。前。の。偷。見。利。を。今。も。振。拂。小。部。合。小。弗。と。大。村。の。襦。袢。袖。成
曳。ぬ。る。程。も。あ。る。大。角。の。左。右。一。度。不。投。伏。せ。て。刀。の。柄。を。以。て。搦。れ。吐。嗟。と。怕。る。兩個の偷
見。立。ち。足。も。多。く。堤。より。河。水。と。跳。入。り。浮。け。潜。り。共。侶。は。酒。も。を。草。頭。蛇。の。水。を。涉
る。不。異。を。瞬。間。の。前。面。の。岸。を。千。本。辻。兼。葎。あ。り。入。り。往。方。も。知。る。不。なる。浩。然。現
八。を。稍。大。村。の。跡。の。草。木。を。後。走。来。る。程。驟。雨。を。歌。た。り。登。時。大。角。現。入。り。對
い。那。偷。見。の。更。に。趣。箇。様。々。と。報。知。し。件。の。兩。個。の。身。入。り。世。不。存。鳥。と。飲。喚。做。す。小
賊。で。あ。り。け。か。此。彼。共。不。投。伏。せ。斫。て。棄。棄。と。刀。の。柄。を。以。て。搦。勢。不。怕。れ。河。水。跳。入

○著作堂手集八犬傳第八輯上帙五弓画者筆工刷人目次
出像畫工

總卷淨書

柳川重信

谷金川

淺倉伊八

横田守

櫻木藤吉

原喜知

横田守

剖劔

第一卷

第二卷

第三卷

第四卷上

第四卷下

八犬傳第八輯下帙五弓

開卷驚奇俠客傳第二集

近世説美少年録第四輯

松浦佐用媛石菟録全書

卷の五より卷の八の下巻を引つて近日賣出
第一輯より第七輯迄再刷仕仕の求に覽下す
右第一輯五巻と辰の春より賣出 一置依
第二輯五巻癸巳の春正月迄逐滞出板
第一輯より第三輯迄十五巻追々皆出板
第四輯五巻癸巳の春正月より賣出
前篇三巻出板後久く中絶の所後篇七巻近來出板
前後二篇十巻全壁仕仕の求に覽可被下す

南總里見八犬傳第九輯近刻

曲亭翁精著八犬傳の二書、和漢古今昔なれば稀き妙
作多し、(ハハハ)巻數も亦大部多し、毎輯續刻の書
肆に故あり、(ハハハ)逐滞及び、賜願の君子の、
(ハハハ)ゆり、ゆり、ゆり、ゆり、ゆり、ゆり、ゆり、ゆり、
上下二帙十冊、刊行せり、第九輯も打つて、
と遠慮、(ハハハ)固、(ハハハ)百回、(ハハハ)止、(ハハハ)り、(ハハハ)二、(ハハハ)百、(ハハハ)八、(ハハハ)回、(ハハハ)之、(ハハハ)局、
結、(ハハハ)び、(ハハハ)て、(ハハハ)き、(ハハハ)れ、(ハハハ)く、(ハハハ)程、(ハハハ)も、(ハハハ)多、(ハハハ)く、(ハハハ)全、(ハハハ)編、(ハハハ)一、(ハハハ)貫、(ハハハ)つ、(ハハハ)て、(ハハハ)四、(ハハハ)方、(ハハハ)の、(ハハハ)書、(ハハハ)官、
(ハハハ)ま、(ハハハ)の、(ハハハ)記、(ハハハ)と、(ハハハ)認、(ハハハ)り、(ハハハ)限、(ハハハ)り、(ハハハ)未、(ハハハ)だ、(ハハハ)と、(ハハハ)を、(ハハハ)か、(ハハハ)書、(ハハハ)林、(ハハハ)文、(ハハハ)漢、(ハハハ)堂、(ハハハ)敬、(ハハハ)誌、

○家傳神女湯 婦人病の妙薬 一包代百弔
○精製奇應丸 大包代五弔 中包代五弔
○熊胆黒丸 小包代五弔
○婦人奇効の妙薬 一包代百弔
製本家神田明神下月町東横丁 滝澤氏
賣弘 所元留町坂下南側もの向 丸尾氏

天保三年歲次壬辰夏五月吉日發行

京橋水谷町

美濃屋甚三郎

本所松坂町二丁目

平林庄五郎

傳馬町二丁目

丁子屋平兵衛板

江戸書行

古今類記の仙女香 一巻、黒むらぎ美香 一巻、江戸京橋南二丁目本所角坂本氏

